
夜明けの太陽

黎音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜明けの太陽

【Nコード】

N5315W

【作者名】

黎音

【あらすじ】

この世界に太陽が昇る事はない。破面でありながら孔を持たぬ一護はその為か感情がゆたか。虚圏きつての実力者でありながら戦いを好まない。

ある日たまたま現世に視察・・・という名の散歩に出かけ、黒髪の死神・朽木ルキアと出会い運命の歯車が動き出す。

序 夜（前書き）

オリキャラ&構造が嫌な方はUターン

序 夜

頭上には一度も太陽が昇った事の無い空が広がっている。

足元には生の根付く事無い白砂が続いている。

モノクロの世界

ウエ・コムンド
それこそが虚圏

そんな色彩に乏しい世界を陽光を思わせる髪色の少年が歩いていく。少年の素顔をかつて覆っていた仮面は割れ、頭の両脇に冠のようなかたちで存在していた。

この世界で万人問わず身体にある孔。しかし彼の身体には孔どころか指一本の欠損すら見当たらない。

背負われた大刀も確かな光をもつ瞳も黒白の中ではひどく映えた。

その姿はまるでこの夜空に浮かぶ事は無い太陽のようで。

「いつこっ！」

「「一護ー！！」」

「一護ちゃん！」

四者三様の呼び声に少年――一護は振り返る。白砂を蹴散らし近づいてくる仲間に手をあげた。

「よっ」

「「よっ」っじゃねえっス！」

若草色の髪をした幼女がブンブンと両手を振る。頭には割れた仮面。

「藍染さまが会議始めるって怒ってるっス！」

「ずっと笑ってたけどなー」

「でヤンス」

「そこが逆に不気味よねえ」

アリの様な仮面をかぶった男が笑い巨体に巨面の男がうなずく。

その横で頬に手をあて紫色の髪の女が悩ましげに眉を潜めた。纏め上げられた髪をとめる白い簪の群こそ彼女の仮面の名残だ。

「・・・また外出禁止くらうぞ」

「「「「うおっ!?!」」」」

突然の声に「彼」と一緒に来たハズの四人が奇声をあげる。声を発した青年は大して気を悪くした素振もみせず、一護に近付き手をとった。前髪もなにも作らずただ伸ばされた黒髪の下から覗く片目を覆う仮面と奥に光る白黒反転した瞳。

「ほら」

「あの狸め・・・まあ仕方ねえか」

一護は眉間にしわをよせるが引かれる手には素直に従う。

「ネル、ペツシュ、ドンドチャツカ、ルベルゼ、セロ」

全員が一護を見る。

「帰るぞ」

「「「「「はいつ!!」」」」」

砂煙が撒きあがり

はれたとき、そこには誰もいなかった。

序 夜（後書き）

はじめまして 黎音です。

はじめてなんです、はい。なので読みにくい所があったらすみませ
ん。

こんな駄小説ですが楽しんでいただければ幸いです。

これからお付き合いよろしく願いします。

壱 高座

とてつもなく高い所。・・・そう、見上げれば首が痛くなつてくるぐらいの高さ。

そんな所に座つて下を見下ろすのには何か訳でもあるのだろうか？

「あー、あれか！馬鹿と煙は高い所が」

とつさに取り巻き五人組が一護の口をふさがなければ藍染は白き玉座から立ち上がっただろう。

底冷えするような笑みを顔にはりつけて。

「一護。今日はウルキオラの任務報告があると言わなかったかい？」

「朝、聞いた気がシマス」

「そうか。で、君は一体何処にいた？」

「東の方にちよつと息抜きに・・・」

「どうして戻つてこなかったのかな？」

一護はおもいつきり目をそらす。が、藍染は容赦なく何度も同じ質問を繰り返す。

七度目で一護が根負けした。

「だーもう！分かった分かりましたよ。歩いてるうちに報告の事忘れてましたスイマセンッ。」

「これでいいかつ？」

「素直なのはいい事だ。だが規律を破つたとなるとそれ相應の罰を与えなければ下の者にも示しがつかないだろう？」

その言葉に一護は げつ と露骨に嫌そうな顔をする。

「・・・また外出禁止か？」

外を出歩くのが好きな一護にとっては辛い罰だ。藍染もそれを分かつて一護によくこの罰を科す。

のだが。

「いいや」

ああ、首を横にふった藍染が仏に見える。一護は目を輝かせた。

「一週間 自宮謹慎だ」

訂正。 仏の微笑をつかべた鬼だ。

壱 高座（後書き）

長いので分けました。

サブタイトルの読み方は「たかざ」です。

式 謹慎

「言い方変えただけじゃねーかつ！」

自宮に戻った一護は怒声を張り上げる。空気を読めぬペツシュが軽い口調で一護の語中の間違いを正す。

「いやいや。外出禁止は虚夜宮（ラス・ノーチェス）内なら出歩けたが謹慎は宮の中から出ることは許されないから、今回の方が処罰としてはおもー」

「うるせえ！黙れ！きざむぞ！」

ギロリツ と夜叉も素足で逃げ出す様な眼光を受け、ペツシュは青ざめドンドチャツカの後ろに隠れる。

「うわぁ、きざむって言ったよこの人」

「怖いでヤンス」

「今のは自業自得でしょ」

ルベルゼは呆れ顔だ。いつもペツシュ達と一緒にいるネルにでさえ、「デレカシーなさすぎっス」

と冷たい目で見られる。泣き崩れるペツシュの背をドンドチャツカはいたわるようにさすってやる。

力加減を間違えつぶしているとも気づかずに。

「・・・茶が入った」

「・・・わぁ！？」「・・・」

台車にティーセットを揃えて持ってきたセロに四人は驚く。

一護は近くの椅子に乱暴に腰掛けたただけだったが。

セロの淹れる茶はいつもおいしい。本人は湯の温度や時間をはかっているに過ぎないというが、

どう理屈をつけようがおいしいものはおいしい。

一護の眉間のしわも緩んできたところでルベルゼが口を開く。

「ねえ一護ちゃん。一週間もどう過ごしましょうか？」

ネルが元気よく挙手。

「無限追跡ごっこするっス！」

「「おおー!!」」

盛り上がる約三名。一護とルベルゼは顔を見合わせた。

「・・・宮内だけでは狭すぎるだろう」

セロの冷静なつつこみによりこの意見は却下。

「じゃあセロは何したいでヤンス？」

「・・・かくれ鬼」

「それ、お前絶対見つからないだろう」

影の薄いセロが本気になっただら見つけれない、との一護の指摘によりこれまたボツ。

続いてルベルゼが不敵に笑う。

「ふふ・・・。私、いい物見つけちゃったの」

こぼれんばかりの双丘の谷間から長方形の箱を取り出す。

「ジャーンッ！トランプっていう現世のカードゲーム！皆でやりましょ」

異論なしで満場一致可決・・・と思われたが、ふと一護が気づいた。

「なあルベルゼ。それどこから持ってきたんだ？」

「ん？ああ、現世だけど？」

「おまつ・・・！金はどうした！まさかパクってきたんじゃない？」

慌てる一護に心外とばかりにルベルゼは鼻を鳴らした。

「失礼ね。私だってお店の物はタダじゃないことぐらい知ってるわよ」

「ああ・・・そうだな」

「そこらのガキからくすねたの」

「それもダメだ！」

バンッ　と一護が机を叩いたせいでカタカタとカップが音を立てる。さりげなく布巾を用意するセロ。

ルベルゼはきょとんと目をしばたかせた。

「ダメなの？」

「当たり前だ！お前だって勝手に自分の物盗られたらやだろ？」
「とりあえず犯人には「命を落とす不幸な事故」に遭ってもらうけど」

笑顔での腹黒発言に一同は若干引く。

「ルベルゼがなんかくろーい・・」

「どす黒いオーラが見えるでヤンス」

「怖いっす」

「・・黒いぞ」

「黒いな」

口々に言われルベルゼの米神にうつすら青筋がうく。

「・・なんなら表出る？」

「」「」「」謹慎中なんで結構です」「」「」

今が謹慎中でよかった 謹慎万歳

ルベルゼ以外の五名は心の底からそう思ったのであった。

式 謹慎（後書き）

どうも黎音です。最初、高座と謹慎は同じ話で書こうと思っていたんですが、長いかな、と思って分けました。そのせいで高座はすごく短いですが。これからもよろしくです。

では。

参 偽空

天蓋の下にしか広がらぬ青空。それは宮の窓から見たせい、ひどく小さく薄っぺらく見えた。

「グリムジョーが十刃（エスパーダ）の地位を剥奪！？」

「ああ」

謹慎中の一護に情報を運ぶのはたいていハリベルかウルキオラだ。

ハリベルとは従属官（フラシオン）を大切にするという姿勢に互い好感が持てたし、

ウルキオラは意外や意外にも紅茶好きでよくセロの淹れた茶を飲みに一護の宮に寄る。

スタークとも仲は良好だが彼が暇なときいびきをかいていないのは見た事がない。

現在来ているのはウルキオラで淹れられた紅茶をすすっていた。

「一体全体何したんだよ？」

「勝手に現世に出向き死神と交戦。結果、従属官を全員亡くし自らも浦原喜助に敗北し帰って来た」

淡々と事実だけ述べるウルキオラ。かじっていたクッキーをおき一護はたずねる。

「でもよ、実力はあるだろ？ なにもそこまでしなくても・・・」

「問題ない。奴は既に東仙統率官によって片腕を失い、たいした戦力にもならん」

「ああ、腕をね・・・って、はあ！？」

あまりにもさらいと言われたのでそのまま流そうとしたが、一護はその意味を理解し素っ頓狂な声をあげる。

ウルキオラの翡翠色の瞳が一護に向けられる。

「相変わらず騒がしい奴だな」

「テメエは落ち着きすぎだっ！ 腕だぞ腕！ お前と違ってアイツ超速

再生できねーんだぞっ!？」

「だから最早戦力にならんと言っているんだ」

ウルキオラは空になったカップをおき立ち上がった。乱れのない硬質な足音が響く。

「また来る」

一護の宮は窓が多い。他の宮と比べると格段に。

一護は黒ではない空の色が好きだ。地の白砂も明るく見える。

それなのに今日見る空はひどく色あせて見えた。空色と水浅茅の髪
の青年が頭の何処かで結びつくからだろうか。

「グリムジョー……」

仲がよい訳ではなかった。会う度に「戦おう」と付き纏ってきて正直、苦手意識も少しはあった。

でも根はまっすぐで。藍染の悪口を二人で隠れて言っていた事もある。

一護はいつの間にか下がっていた視線をあげた。偽物の空が広がっている。

まだ謹慎はとけていない。それが酷くもどかしい。

空がみたかった。

この曇った気持ちを吹き飛ばすような広大で透き通った現世（ほんもの）の空が。

参 偽空（後書き）

サブタイトルの読み方は「にせぞら」です。

ところで年齢制限つけたほうがいいんでしょうか。これからバトルもありますし。

でも十五歳以上ってほどでもないしなあ・・

なんせ、私がまだ十五じゃないし。

これからも応援よろしくです。

では。

四 視察

この白い檻から出たかったんだ。 億万という色を見たかったんだ。

それが始まりにつながるなんて、 思っても見なかった。

目の前に座るウルキオラの無表情な白い顔を見つめつつ一護は先程彼が言った言葉を繰り返す。

「視察？」

「そうだ。現世での万一の戦闘に備えよとの藍染様からのご命令だ」
ウルキオラは紅茶の香を楽しむかのように顔の手前でカップをキープしている。

「空座町・・・だっだっけ？」

今回の戦いの、まさに「鍵」となる町の名を言いつつ一護はマフィンの手を伸ばす。

そういえばこれ、何処で作っているんだろう なんて疑問がわいたが、おいしいのでとりあえず考えるのは保留にする。

「で、誰が行くんだよ」

「そこが問題だ」

ならば困った顔でもすればいいのに、白き鉄仮面は顔色一つ変えない。

「できるだけ少人数に絞り込みたいのだが、相応の実力者となるとな。

スタークとバラガンは動かんだろうし、ハリベルは周りの奴等がうるさい」

「ノイトラは自分から死神探してケンカ売りそうだし、グリムジョーが負けたんならそこら辺しか・・・

お前は？」

「あいにくと別任務だ」

藍染からの信頼が厚いウルキオラはその分、他の十刃よりも多くの任務がまわされる。

それはいい。

いいが、あの狸はウルキオラの都合も考えてやったらどうなのか。個性が根強い破面達の人選など一苦労なんてものじゃない。

薄く紅のかかった茶をありったけの破面達の顔を思い浮かべながら飲み干す。

と、たった一人 適任がいる事に気づく。

「なあウルキオラ。俺じゃダメか？」

「・・・何？」

「だから俺だよ俺。俺でいいじゃん」

どこぞの詐欺のように「俺」を連発し自分を指さす。ウルキオラは沈黙の後、口を開く。

「一護、お前は謹慎ち」

「よし！そうと決まれば善は急げだ！じゃあな！」

たてかけていた大刀を引っ掴み一護はそこら辺の空間を素手で切り裂く。

そうして口を開けた黒腔（ガルガンタ）に躊躇なく飛び込む。

閉じていく黒腔を一瞥しウルキオラは今日初めて紅茶を口に含んだ。適任がいなかったのも事実。一護が実力的にも性格的にも理想的だったのもまた事実。

後で藍染様に報告しておこう、とウルキオラは一人思った。

四 視察（後書き）

「どこぞの詐欺」とは「オレオレ詐欺」の事です。古すぎてネタ分らないかも。

怖いですよ、詐欺。実家の祖母もひっかかりかけた事があります。怪しい人の言う事は信じちゃダメですね、本当。

余談ですが、藍染って打つとき、「あいぞめ」って打つと一発で変換されます。

発見したとき、何気に感動しました。

では、これからもよろしくお願いします。

四・伍 心配

「・・・一護、菓子の追加をー」

バスケットにマフィンを山ほど入れてきたセロはピタリと立ち止まった。

目をこすり、しばたかせ、長い黒髪の間からもう一度椅子に座っているはずの主を探す。

が、そこには紅茶を飲むウルキオラしか居なかった。

「ウルキオラ。一護は一体ー」

「現世だ」

短い回答。だが、それにセロは ぼとりっ とバスケットを落としここ数年来の絶叫を喉から迸らせた。

それを一番近くの部屋に居たルベルゼが聞きつけとんでくる。

「なに、なんなの！？あんたがそんな声あげるって事は百足事件の再来！？」

「ち、違うつー！！一護がー」

言葉の途中で慌てたせい、か、むせて咳き込むセロの背をルベルゼはさすってやる。

落ち着いてきたセロは重大な事実を告白した。

「一護が・・・現世に行った・・・」

バシッ っと驚きのあまり力加減を失ったルベルゼの手がさすとは程遠い威力と速度でセロの背にたたきつけられる。

床に倒れこむセロ。ルベルゼは助け起こしもせず唇をわななかせる。

「え・・・ええー！！？」

こちらも先程のセロと負けず劣らずの大声だ。

二人の絶叫を一番近くで聞いたというのに眉一つ動かさないウルキオラは流石というべきか。

ルベルゼはおろおろと数メートル歩いてターンを繰り返す。

「ああ、どうしましょう。一護ちゃんが現世に？そんなの・・・」
ターン

「・・・絶対危ないわ。だって今現世には死神がいっぱい・・・」

ターン

「・・・居るんですもの。今すぐ迎えに・・・！」

立ち止まり。しかし決心がつかないのか、再び歩き出す。

「でもでも、可愛い子には旅をさせろっていうし。一護ちゃんなら死神の五人や十人・・・」

ターン　ちなみにセロの背を踏んづけた。

「・・・返り討ちだろうし。・・・でも、もし具合が悪くなってその隙になんて事があつたら・・・」

ターン　踏まれたセロが苦悶の声をあげるが、おかまいなし。

「・・・絶対に危ないわ。だって今現世には死神がー」

ターン　そして話もループ

延々と自問自答を続けるルベルゼ。

「過保護め」

と、ウルキオラは呟き紅茶を口にする。

ほんの少し、この二人を従属官にもつ一護に「大変そうだ」と同情を向けながら。

四・伍 心配（後書き）

本当は「視察」に書こうかと思ってたんですが、読まなくてもいいし番外編にしようかなーっと。オリキャラ二人は一護に基本過保護です。

何気に楽しかった。このシリーズで書いてほしい番外編があったら教えてください。

書けそうだったら、書いていききたいと思います。

では。

伍 始動

齒車が動き出す この物語の核たる齒車が

ゆっくりと

され

ど確実に

きれいに噛み合わさり 廻りだす

大きく息を吸い、吐く。その動作を二、三度繰り返し、一護は上を見上げた。高く広い青い空。

続いて下を見る。しっかりと生が根付く、母なる大地。

「・・・現世（シャバ）はいいな」

どこぞの監獄から出所してきたかのような口調で伸びをする。

いや、今回の場合脱獄に近いのかもしれないが。

黒腔から出て地を踏みしめる。砂とは違う確かな感覚。頬をなでるさわやかな風。

ゆるる緑と色とりどりの花。

「・・・現世はいいな」

無意識のうちに口についてそんな言葉が出た。

出た所は山の中で、なぜか近くに隕石が落下してきた様な大きなクレーターがあった。

ヤミーとウルキオラの霊圧の残滓を感じたので、前回に来たときになんらかの意図の下作られた物だろうと推測できる。

「派手だな・・・」

一体何をやったのだろうと一護は首をひねる。唯の登場による無用の産物とは知るよしもない。

しばしそのままクレーター創造のわけを考えていたが、ここに来た理由を思い出し。一護は顔つきを真剣なものにする。

さて、任務を始めよう。まずは

「散歩だな」

人によつてはサボリだと称すかもしれないが、散歩は地形を知るための探索方法。

・・・なんて格好つけてみるが本心は現世を見たいという好奇心である。

ゆったりとした歩調で一護は歩き出す。近くで小鳥のさえずりが聞こえる。枝に止まっているのだろう。小川のせせらぎ。形を変え流れる雲。

たくさん生命がはぐまれているのが感じられる。

「・・・虚圏もこんな感じだったらー」

言いかけ、苦笑し首を振る。あそこは「死後の死した世界」だ。明るさなど求めるほうがおかしい。

歩いているうちに木の数が少なくなり、人工的なくぐもった音が聞こえてきた。こすれあう木の葉の音が騒音に負け、聞き取りにくい。

どうやら、もうすぐ人の住むところに出るらしい。

一護は気配を感じ、ふと足を止め、視線を左にずらす。一拍遅れて黒衣着物を着た人物が現れた。

響転（ソニード）に似ている。だが、死神の使う歩法は確か「瞬歩」といったつけ。

「何者だっ！」

刀に手をかけつつ、すごい剣幕で一護を睨む黒髪の少女死神。愚問を一護になげかける。

一護は自分の頭にある割れた仮面の欠片を指さした。
「見てわかんねーのか？」

ほら

動き出した

伍 始動（後書き）

ルキアと一護が出会う大切なお話です。

これでいいのかな、という思いがありますがこれが私の今の精一杯という事で。

サブタイトルは「歯車」か「始動」かで悩みましたが、最後の一文を考え付いて

「なら始動だな」と。

これからもご愛読よろしくお願いします。

では。

陸 名乗

「破面か・・・！」

爛々と黒曜の瞳に確かな敵意を燃やす死神の少女。見た目は小柄で華奢な印象を受けるが、この時期・この場所に派遣された事を考えるとそれなりの実力者なのだろう。白くほっそりとした手が刀の柄を強く握りなおす。

「藍染の侵攻はまだのはずだが・・・。一体何のようだ」

問いながら殺気を飛ばされても困る。これでは拷問だ、と一護は心の中で抗議した。口に出そうとも一瞬思ったが、少女の陰のある目つきに口をつむぐ。

自分でも情けないと思うが少女にはそれだけの迫力があつた。整った顔が更に凄みを感じさせる。

死神とは、皆こんな感じなのだろうか。一護は自分の頭の中で「死神」と検索する。

何件か過去の雑談がヒットした。

「「こ、こゝろゝさゝれゝゝ！！」「」」

「死神？黒くてうつとおしくて、まるでアレみたい！口に出すのも嫌！」

一護ちゃん。一人見かけたら、近くに三十人は居ると思いなさい！分かった？」

「・・・大概弱い」

「屑だ」

・・・皆、結構独自偏見が入っていて碌な情報が一つもない。

一護は己の無知さ加減に泣きたくなつた。

チャキツ、 という小さな音とともに死神が刀の鯉口を切る。脅
しかもしれないし、このまま刀を抜くのかもしれない。

だが、一護に戦う気はないし、彼女が刀を抜くのを待ってやる義理
もない。

結果歩みを再開させた一護。死神はしばらく呆氣にとられていた
が慌てたように追いかけてくる。

「ま、待て！」

「待つかつ！」

一護は足を動かす速度を速める。背後の死神も負けじ、と早めたよ
うで足音は変わらず聞こえてくる。

相手が諦めるまでお互い意地をはり、諦めない。 奇妙な鬼ごっこ
が始まつた。

すこしずつ速度があがっていく。何処までついて来るんだと一護
はやれやれと眉をよせ。

目の前に広がる住宅街に驚き立ち止まつた。急に立ち止まつたせい
か、勢いがころしきれなかった死神は一護の背中に強かに鼻をぶつ
けた。

「き、急に止まるでない、たわけっ！」

「え？お、おう。わりい」

反射的に謝ってから一護は首をひねる。

「・・・つておかしくないか、これ」

「む」

死神もばつが悪そうな顔で咳払い。

「そうだな。仮にも敵同士であるというのにー」

「そっちが勝手に追いかけてきたのに、なんで俺があやまつてんだ
よ！？」

「そこかつ！？」

死神がつっこみとともに拳をおとす。一護はうずくまり衝撃を受け
た腹をおさえた。

不意打ちだったためか、ものすごく痛い。

「・・・おれ、戦う気ねえのに」

涙目の声に死神は罪悪感を感じたのか少し気まずそうに目をそらし・

・先程までの調子に戻る。

「ならば魂魄でも喰いに来たか」

「あんな不味いもん喰えるかつ」

立ち上がった一護の発言に死神は怪訝そうな顔をした。

「・・・喰わんのか？」

「あゝ、体質？あの味ダメなんだ」

ダメ、なんて物じゃない。以前喰らおうとした時、頭痛と眩暈、嘔吐の感覚、その他もろもろの症状がオンパレードで襲ってきた。

「もともと孔がねえからな。喰う理由がそもそもなー」

「孔がない？」

死神が聞き返す。一護は頷き、着物の襟をずらした。

「ほら」

日に焼けていない胸部は鎖も孔も無い。死神は困惑した表情を見せる。

「お前・・・本当に破面か？」

「何言つてんだ。あるだろ？リツパなのが」

そう言い、一護は仮面の欠片をつつく。

不承不承頷く死神。どうやらむやみやたらに刀を抜く性格ではないらしい。ならばー

一護は背の大刀を掴み、眼前の土に突き刺した。そして手を放す。

「なっ・・・」

「お前、話通じそうだしな。これでこっちは丸腰だ。怖かったら刀握ってる死神。」

俺は一護。「一つ」を「護る」で一護だ」

わざと挑発するような口調で話す。死神は刀を強く握った。

「・・・死神ではない」

腰から外し、一護に倣う様に眼前に突き刺す。

「朽木ルキアだ」

陸 名乗（後書き）

長文をとの事でしたので、書いてみました。
まだ短いかな？それとも長すぎ？

皆様の感想と批評をお待ちしております。

では。

漆 散歩

何故、こうなった。

ルキアはたまたま空座町の巡回中、不審な霊圧を感じ取り、その場
にかけつけたただだった。

それだけだった。そのはずだった。

浮竹隊長、日番谷先遣隊の皆、白哉兄様、申し訳ありません。

私は今、何故か――

「おお！ルキア、アレなんだ！？」

何故か一護という破面と散歩しております。

さかのぼる事、十五分前――

ルキアは握っていた刀の柄を手放した。本来ならば一護が刀から手
を放した時、抜刀して斬りかかるべきなのだろう。そうでなくとも
念のため帯刀はしておくべきだ。

しかしルキアは一護の澄んだブラウンの瞳を見るうちにその考えを
捨てた。

真直ぐな光を燈すこの破面は少なくとも自分から戦闘を望む事はな
いだろう、と無条件にそう思った。

いや、心のどこかで「あの人」に似た顔立ちの一護を信じたいと思
ったのかもしれない。

「一護といったな。何故現世に来た？」

「ウルキオラづての藍染の命令。「空座町を視察してこい」って」
一護の口から飛び出た敵の総大将の名にルキアは顔をしかめる。

「随分と急いだ行動だな。決戦は冬になるのであろう？」

その言葉に今度は一護が「訳がわからない」、といった顔をした。

「なんでそんなにかかるんだよ。遅くても秋になんじゃねーの？」

お互い首をひねりあう。どこかで思い違いがあり、そのため決戦の

日程が食い違っているらしい。
ルキアが確認するように訊く。

「崩玉の覚醒に手間取っていて、まだ戦力が十分ではないのだろう？」

「いや、別に」

一護はあっけらかんと否定した。

「崩玉つて一瞬だけなら覚醒と同じ力だせるだろ？その一瞬でも破面作るのに十分だ」

「なん、だと・・・」

「知らなかったのか？じゃあもう幹部級は全員席がうまつてるってことも？」

「初耳だ・・・」

ルキアは頭痛を抑えるかのように額に手を置いた。皆が恐れる最悪の状況にいつの間になつていたのだ。直ちに上に報告しなければ。

「おいルキア？」

心配そうに見下ろしてくる一護に大丈夫だ、と身振りで伝え・・・はたと思い当たった。

「一護・・・。お前、こんな事を私にしゃべって大丈夫なのか？」

「え？」

「たわけっ！情報を敵に流した等、裏切り行為ととられ処罰されても文句はいえんだぞっ！」

一護はきょとんとしていたが、ふいに口角を緩ませた。

「何を笑って・・・」

「優しいんだな、お前」

急にほめられ、ルキアはぼかんと口をあけた。

「だって俺、破面だぜ？会ってすぐの敵を気にかけるなんて普通しねえよ」

賞賛とともに礼も言われ、ルキアは顔を朱にそめながら怒鳴った。

「き、貴様が破面らしくないのが悪いのだっ！！この前来た奴等は皆好戦的で強かったというのに、お前ときたら刀は手放すは泣き出

すはー!!」

「泣いてねえ!!」

「いいや、腹を殴られただけでピイピイ泣いた!」

「あれは不可抗力だっ!」

しばらく泣いた泣いてないの言い争いを続けた後、ルキアは一護を再びじいつと見る。

「本当に破面か・・・?」

「またかよ。そうだって言ってたんだろ」

「性格の差が前来た破面と大きすぎてな。信じられんだ」

「つかそいつらが普通。俺みたいなのが変なんだ」

一護はそういつて刀を地面から抜き、背に戻した。

「じゃあなルキア!また会おうぜ!」

「あ、こら待て話はまだー」

ルキアが言い終える前に一護の姿は消えた。追うか手に入れた情報を帰って伝えるかルキアはしばし悩んだ。が、結果として十八秒後その心配はなくなる。

「あのさ・・・ここどこら辺で何所までが空座町なわけ?」

困りきった一護が戻ってきた事によって。

結局、放っておく事もできず、監視もこめてルキアは一護と散歩を共にした。

「いやあ、すげえな現世は」

一護は道端で摘んだ綿毛を広げたたんぽぽに　ふうー　と息を吹きかけた。

強風をうけ、たくさんの種が子孫を残すため大空に舞い上がる。太陽はすでに西に傾き、空と旅立った種たちの白い綿毛を一護の髪と同じオレンジ色に染めた。

「こんなに綺麗で不思議な物がたくさんあるなんて」

「ああ。私も此方に来たときはあまりの技術の進歩に驚いた」

並んで歩く黒（死神）と白（破面）。緩やかに伸びる影。

平和な散歩の時間が、そこにはあった。

漆 散歩（後書き）

今回はほのぼのとしたお話でした。
いかがでしたでしょうか？感想をいただければと思います。

八 宿泊

茜色の空の下、一護はルキアに歩調をあわせ夕暮れの道をならんで歩く。

一護はまさか死神に案内されるとは考えてもみなかった、と今日の散歩を振り返り思う。

が、もしルキアに会わなければ自分は延々とこの町をさまよっていただろう。

それにもっと短気で物分かりの悪い死神に会っていたら・・・と考えると、ルキアに会えたのは最高の幸運であろう。紛れもない敵に言う言葉としてはいささか・・・いや、かなり不適切なものだとはおもうが。

「なあ一護」

一人思考の海に沈んでいた一護を引っ張りあげた声。

「ん？なんだよルキア」

左下に視線をむければ黒い瞳がまっすぐ此方を見つめ返していた。

「そろそろ帰るのだろう？」

「・・・ああ、言ってなかったか。今日は現世に泊まるつもりだぜ」

一護の宿泊宣言にルキアは目をまんまるにした。

「なぜだ？いや、それよりも何処に泊まる気だ？」

もつともな質問。だが一護は目をあからさまに逸らし、一つ目の質問をはぐらかした。

「まあ、いろいろ事情が・・・。寝る所はとりあえずどっかの家に霊体のままホームステイ・・・」

「・・・それは「とりつく」と言うのではないか？」

「毎晩変えるさ」

「しばらく居る気かつ!？」

親指を立てた一護にルキアは怒鳴ってつつこむ。そして一気に十年分幸せが逃げていきそうなほど重いため息をつく。心配する一護の

顔をちらりと見て、またこれ以上ないくらい深くため息。

「いやいや失礼だろう、さすがに。一護は常より眉間のしわを深くした。」

「何だよさつきから。明日からはちゃんと一人で町見て周るって」「ダメだっ！私はお前の監視についているのだぞ！？一人になどさせん！」

「・・・監視だったのか、お前」

「言っただろうっ！？最初に監視としてつきそうと！！お前は私と同じ所に泊まるのだ！！」

「・・・と、いう訳でして」

「「「「「いやいやいや」」」」」

浦原商店内。ルキアの言葉に目の前の五人の死神が一斉に首を横に振る。一護はとりあえず片手を軽くあげた。

「ども」

「うるせえぞ破面！！」

とたんに赤い髪をしたガタイのいい男死神が胸倉を掴みあげてくる。突然の事に動揺しているのは分かるが、何もしてないのにこれでは理不尽がすぎる。一護は眉を吊り上げた。

「何しやがんだテメエ！！」

「黙れこのタンポポ頭！んな頭なら「いちご」より「みかん」のほうがよかつたんじゃないのか！？」

「あああ！？「いちご」じゃねえ「一護」だボケ！脳みそつまってるのか赤パイン！！」

「孔なし破面！！」

「刺青死神！！」

「刺青ばかにすんじゃないねー！」

「そっちこそ孔なしなめんじゃないねーぞ！レアなんだよ、バーカ！！」

「バカつつうほうがバカなんだよバーカ!!」

目を覆いたくなるような幼稚な言い争いはルキアの鉄拳により終焉を迎えた。

「やめんかつ! たわけ共!!」

「ぐえ!!」

潰された蛙のような声をあげ倒れこむ二人。一室に集う一同は哀れみと呆れを視線に乗せ、投げかけたという。

八 宿泊（後書き）

もう少し長かったんですが、次の話と分ける事にしました。
誤字脱字はじゃんじゃん教えてください！

玖 黒猫

コトツ とちやぶ台に人数分の湯のみが置かれる。

「まあ皆さん、自己紹介でもしようじゃないですか」

店の奥にいた浦原が相変わらず室内だというのに緑色の帽子をかぶったまま胡坐をかいて座る。

浦原にすすめられ、赤髪の死神がしぶしぶといった様子で口を開く。

「六番隊副隊長 阿散井恋次」

続いて頭を髪一本残さずそりあげた死神が名乗った。

「十一番隊の斑目一角だ」

「同じく十一番隊の綾瀬川弓親」

隣に座っていたおかつばの男死神も一緒に自分の名を言う。

その次は一護の真向かいに座していた白銀の髪の少年にしか見え無い、しかし強い霊圧をもつ死神。

「十番隊隊長、日番谷冬獅郎だ」

隊長格だったのか、と一護は納得した。と、いうことはこの部隊の隊長は彼だろう。

「その副官の松本乱菊よ」

ルベルゼを思い出させる豊満な胸をもつ女性死神が灰色の瞳を片方つぶる。

「アタシは浦原喜助。このしがない駄菓子屋の店長っスよ」

一護は口元を扇で隠す癖のある金の髪の男をじっと見た。

「・・・浦原喜助ってアンタか」

「おやあ？もしかして有名人っスか？アタシ」

一護はコクリとうなずいた。

「元十二番隊の隊長。崩玉を作りだし、戦闘能力・頭脳は目を見張るものがありー」

浦原はそれを聞きつつ茶に口をつける。

「超がつく変人」

「あー、おいしい。セロが淹れた茶と同じ位おいしい」

「本日の一護の悟り・「現実逃避」」

どこか間違っている感はいないが、誰も触れることなく話は進んでいく。

「・・・それにしても破面らしくないっスねえ　一護さんは」

「・・・またか」

今日で三度目の話題に一護は顔を歪めてみせる。日番谷、と名乗った少年死神もじい・・・と一護を見て言う。

「孔がないというのは・・・」

「それも本当だっ」

「ほう、孔がないとな？」

夜一の金の瞳が キラン と光る。一護にぴょんつと一護にとびつくと急上昇する霊圧。白い煙が体からあふれ出す。それがおさまった時、一護は何故か褐色の肌の美女に押し倒されていた。

「・・・え？あ、う」

真っ赤な顔で口を開閉させる一護。美女は妖艶な笑みをうかべる。

「どれ、見せてもらおうかの」

止める間もなく一系まとわぬ美女に襟を大きく開かれる。なんだか色々と危険な状況だ。

女性を手荒に引き剥がすわけにもいかず、一護は目を瞑り顔を背け、大声で叫んだ。

「やめろっ！ってか、服着ろっ！服！」

玖 黒猫（後書き）

「黒猫」は「不運」ってね。

私事ですが、明日誕生日です

プレゼントにブリーチの映画のDVDを頼んでいるので楽しみです
！

拾 女性

「いやゝゝやはり窮屈じゃの 服というものは」

美女―黒猫姿から元に戻った（らしい）夜一が纏った服のすそを引っ張りながら言う。

「それ着んのが当たり前だっ」

一護はいまだ赤い頬を隠すように背を向けて座っている。

「もうよいぞ」

夜一に着替えの終わりを告げられほっとしながらふりむく。

一護は卓袱台を囲んでいたメンバーの減り具合に眉をひそめた。

「なあ、赤い髪の子とはげとおかっぱ頭とルキアと金髪の女の人、何処行った？」

すると、残っていた日番谷と浦原は気まずそうに茶をすすする。

代わりに疑問に答えたのは夜一。にんまりと口角をあげる。

「仕置きじゃ」

「は？」

見目の美しさに反し、夜一はどっかと胡坐をかいた。

「わしのピッチピチの肌によからぬ情を抱いたらしくての。今、ルキアと松本が裏手でわしと碎蜂が前に教えてやった「その場でできる！簡単な拷問」を実践中じゃ」

「んな料理みたいな言い方」

まえにテレビというものでみた三分クッキングのうたい文句がなんだか怖ろしい使われ方をしている、と一護は身震いした。

夜一は指導中のことを思い出したらしく口元に軽い笑みをうかべた。「特に碎蜂ははりきつての。斬魄刀を持ち出して卍解をー」

はてな、と一護は記憶を探る。「卍解」とは隊長格しかできぬ斬魄刀における最終奥義だった気がするのだが。

「・・そんな事でしていいのか卍解って」

「いいわけねえだろ」

一護のつぶやきに現隊長職を務める日番谷が断言。

「そういえばなんでお前はここに居るんだ？」

「・・・あんなのにいちいち反応できるか、くだらねえ」

「昔っからこんな感じなんすよ、夜一さん。慣れちゃいました」

二人の発言に夜一は口先を尖らせる。

「なんじゃ。枯れておるのおお主ら。一護の初々しさを見習わんか」

「うるせえ！！」

心底煩そうな日番谷と真つ赤になった一護が怒鳴る。浦原は「あはは」と笑っただけだった。

一護の様子を見ていた夜一は不思議そうに言った。

「にしても一護、お主は何故藍染などに従っておる？」

「・・・従いたくて従ってるわけじゃねえ」

一護は苦虫を噛み潰したような顔をする。

「ただ、あそこには仲間がいる。俺はそれを護りたい。それにー」
そういつて一護は思い出す。過去の出会いと散った一人の仲間のことを。

暗い世界は嫌だと言った「彼女」の事を。

「あの死んだ世界に夜明けをもたらすにはー力が必要なんだ」

太腿の上で硬く握り締められた手。浦原はそれを目をほそめて見ていた。

「意外だな。てつきり藍染の下についた者たちは皆深い忠誠心があるものとかかり思っていたが・・・」

日番谷の率直な感想に一護は手で大きな×をつくる。

「んな訳ねえだろ。力くれるっていう誘いがなきゃ、今の数の半分も集まらなかったぜ。」

もちろん、忠誠は表向き皆誓ってるけど、本当に心底って奴は多いってわけじゃない」

「で お前は全っ然、忠誠心の欠片も無いわけか」

おう、と一護は胸を張る。

「あんな腹黒狸、いつか寝首かいてやる」

「狸っスか。そりゃいいっスね」

一護の狸発言が坪だったらしく、浦原はかみ殺しきれない笑いをもらす。

「もしかして、現世に泊まりたいというのもー」

「ああ、ちよつと謹慎中にダチが持ってきた任務にむりやり参加して脱け出してきたからな。

しばらく帰りたくねえんだよ」

日番谷の的を射た問いに笑って答えたとき、襖が横にずらされた。

崩れ落ちるように倒れた三人。腰に手をあて立つ二人。夜一はパツ　と顔を輝かせる。

「おお、やったか！」

「はい、夜一殿」

「けちよんけちよんにしてやりましたよ！」

「うむ」

満足げにうなづく夜一にルキアと乱菊はきりりと引き締まった顔をする。

「これも夜一殿と碎蜂隊長のご指導の賜物です」

「これから是非、よろしく願います」

「まかせよ」

女の会話に恐れを覚え、黙して茶を口にする三人。転がった男達を助け起こす気にはとてもなれなかった。

拾 女性（後書き）

久々の更新です。お待たせしてすみません。

に、しても「彼女」って誰！？なんだかまたオリキャラを作る事になりそうです。

キャラ考えてから書けって話ですよ、すみません。

その謎の「彼女」と夜一さん達の女の会話からサブタイトルが「女性」なんですが安易すぎるだろうってかんじですよ。もっといいタイトルつけてやるって方、どしどし応募を（してません）！

拾巻 優掌

「彼女」の亜麻色の髪がふわりと風をはらみなびく。

白いカチュューシャのような仮面の名残に額に連なる十字架を思わせる仮面紋。エスティグマ

服の胸元や裾に施された黒いレース。振り返って「彼女」は笑いかける。

「

」

その言葉は耳を澄ましても聞き取れない。

駆け寄ろうとしても、足が地に縫い付けられたように動かない。

「彼女」は穏やかに微笑んでいる。が、次の瞬間。突然、朱を撒き散らして倒れこむのだ。

そう。この光景を一護は知っている。「彼女」が倒れたわけも。

これは、すでに起きた過去の出来事。

重い瞼をこじ開けるように開く。視界いっぱい広がるは見慣れた

白の天井　ではなく、

初めて見るくすんだ木の天井だった。

一護はその事に暫し寝起きのぼんやりとした頭で昨夜をたどった。

「破面・・・」

「ん？どうしたんだこの小さい女の子」

「破面・・・貴方は危険・・・危険は排除・・・」

「うえええ！？なんかすごい殺気向けられてんだけど！？」

「やべっ、雨が殺戮モードに・・・」

「やばいのかこれ！？おилキア！俺の刀、どこしまった！？」

「店の奥に結界をかけて厳重に保管してあって、すぐには取り出せん」

「なんでんなめんどくさい事を！」

「・・・お前、少しは自分の状況を考えんか」

「はあ？つと！」

「排除」

「危なかった・・・で、俺は結局如何すりやいいんだ！？」

「排除」

そして視界はブラックアウト

「そうだった・・・」

スタークの従属官・リリネットと変わらぬ背格好の少女の奇襲をうけ、よけきれずに気絶したのだ。痛む腹部をさすりながら上半身をおこす。

すると一護が起きたのを知っていたかのようなタイミングで襖が横に滑る。

「・・・おはようございます」

正座をして朝の挨拶をしてきたのは黒髪ツインテールの大人しそうな女の子。

もつといえ、昨日一護の腹部に拳を叩き込み、昏倒させた張本人だった。

無意識のうちに腹部を庇う様な手つきをしていると、少女は深々と頭を下げた。

「あの、昨日はすみませんでした」

「え？」

急に謝罪を口にされ、一護は戸惑いを隠せない。いつの間にか少女の後ろに立っていた少年が眉間にしわを寄せた。

「別におめえが謝る事ねえだろ雨」

「でもジン太君、勘違いだったんだし・・・」

ジン太、と呼ばれた少年は一護を　びつ　と指差した。

「こいつらは前、お前に大怪我させたんだぞっ!？」

ジン太に指差された一護は雨を見る。五体満足、健康そうに見えるが。

「・・・本当か？」

「・・・ええ、まあ」

一護の問いに雨は少々口籠ったが確かに頷く。

「それで、昨日でつきりまた攻撃にきたんだと・・・」

本当にごめんなさい、と雨は申し訳なさそうだ。

一護はそれをだまってみていたが、がばり、と布団を体からはぎ、その場に正座し頭を下げた。

「悪かった」

「「え？」」

いきなりの事に謝っていた雨も腕を組みしかめっ面をしていたジン太もぽかんと口を開ける。

「・・・そんな目にあったんなら、俺のこと警戒して当然だよな」

ゆっくりと腰を上げ、雨に近づき膝を折り目線を合わせる。

「ごめんな」

自分がここに来た事によつて嫌な思い出を刺激してしまった事にせいいっぱいの謝罪を。

拒まれるかと思いつながらもそつと頭に手を置く。

雨はほんの少し身体を強張らせたが一護の申し訳なさそうな笑みを見てゆっくりと緊張と警戒をといていく。

一護はこちらを探るような目で見るジン太にも目を向ける。誰よりも彼女を心配している事が言動から察せた。

「傷つけるつもりはないから・・・」

お前もこの子も。そして、他の皆も。

そういつて頬に手を伸ばす。

ジン太の目つきは鋭いままだが拒絶するそぶりは見せなかった。

「・・・あつたけえんだな、お前」

ジン太が至極意外そうに目を瞬かせた。

「破面だつて体温はあるさ。・・・心もな」

雨が不思議そうに自分の頭の上にある一護の手を触る。

「・・・やわらかい」

「俺には鋼皮イエロがねえからな。簡単に傷はつくは裂けるは不便利いいとこだ」

でも、一つだけ。全ての不便を挙げようと鋼皮が無くてよかったと思える事が一つだけ。

「やわらかいなら、こつやつても誰も傷つけずにすむだろ？」

虚圏は弱肉強食の世界。手は相手受け入れるために開く事はなく、ただ握りしめられ拳として振るわれる。口は語り合う為ではなく、敵の喉本を噛み千切る為に。

声は挑発と勝利の雄叫びの時にしか発せられず、爪は相手を引き裂く為に研ぎ澄まされる。

『こついうのつて嫌よね』

『貴方もそう思うでしょ？』

「・・・誰も傷つかずにすむのが一番いい」
それが無理ならせめて傷つくのは己一人で。

「本当に破面らしくないっスね、一護サンは」
間延びした男の声。

「浦原・・・」

「おはようございます。朝ご飯、できてますよ」

「あ」

それを伝えに来たのだろう、雨が声をあげる。気にするな、とぼんつ 頭を軽くたたくと立ち上がった。

「なっさけねえな、雨」

「ジン太君だつて忘れたくせに・・・iiiiiiii!?!痛い痛い痛い!?!」

「おい、何髪引つ張ってんだ！？やめろ！」

「うつせー！！」

「ジン太、やめなさい」

「て、店長・・・」

四人は騒がしく食卓へと向かう。

狭い廊下を、四人一緒に。

拾巻 優掌（後書き）

遅くなりましたが、第拾巻話アップです。

サブタイトルの読み方は「やさしいのひら」です。

気づけば、話数も二桁。これも応援してくださる皆様のおかげです。本当にありがとうございます。

読んだあとコメントを一言でも書いてくださると、うれしいです。

拾貳 義骸

食卓にはすでに一護と一護を呼びに来た三人の他は全員がついていた。

「遅いぞ、一護」

「わりい」

頬を膨らませるルキアに急かされながら一護が座ると家主である浦原が手を合わせて音頭をとろうと声を張り上げた。

「では皆さん、」

「頂くとするかの」

人型となっている夜一が浦腹を無視しひときわ大きなどんぶりを持ち上げ先に食べはじめる。

ほかの者達も夜一にならないそれぞれ手を合わせ箸をとった。

「夜一さくん・・・」

恨みがましく、じと目で名を呼ぶ浦原を夜一は鼻で笑う。

「おぬしの号令で食べ始めなどしたら飯がまずくなるわ。ほれ一護こやつの事は放っておいて早う食うのじゃ」

「え、お、おう」

浦原を気の毒に思い、未だ一人料理に手をつけていなかった一護は夜一に押し切られるように両手を合わせる。

「いただきます」

味噌汁の椀を口元に持つていくと味噌の良い香が鼻腔をくすぐる。すすれば朝の冷えた身体に温かさがしみわたっていくよう。

「うめえ・・・」

一護の口からもれ出た素直な感想に眼鏡とエプロンをかけた巨体の男が会釈した。

「ありがとうございます」

「これ、アンタがつくったのか？」

「はい。申し遅れました、浦原商店定員・柄菱テッサイと申します。

以後お見知りおきを」

「あ、はい、一護です。よろしくおねがいします」

誰に対しても頭の低いテッサイにつられて、一護も敬語で応対した。テッサイから見たことのない料理の説明をしてもらいながら、長方形の皿に載った魚を手前に引き寄せる。

皿に盛られた焼き魚を器用につついて骨を外していく一護にテッサイは感心したようになつた。

「ほほお、見事な箸裁きです。ジン太殿も見習って頂きたいものですな」

「テッサイ！ テメエツ！！」

かきこむように食べていたジン太が食べるのをやめ、米粒を飛ばしながらテッサイにつつかかる。それを微笑ましいと思いつつ見ていたが、罵声を吐きテッサイに飛び掛ったジン太が見事締め上げられその体から骨のきしむ音が断続的に聞こえてくるとさすがに片頬が引きつった。ルキアをはじめとする数人の死神は不気味なバツクミユージックに箸の動きをとめる。

が、日番谷は呆れた瞳を一瞥くれただけで、出しまき卵に箸をのばす。

その落ち着きっぷりは流石は隊長、といった所だ。

浦原や雨は慣れているのか自分のおかずが騒ぎに巻き込まれないかだけが心配らしく、ジン太達からできるだけ遠いところに魚を移動させている。

夜一にいたっては騒動を感知せず。抱えあげるほどのどんぶりをもくもくと空に近づけていた。

誰もが仲裁にはいる気はないらしい。これが彼等流のコミュニケーション・なのだろう。おそらくは。きつと。たぶん。

一護は深く追求する事をせず白身の魚を口に運んだ。淡白だが決して飽きない味だ。

耳がどこから響く悲鳴とギリギリと関節がしまる音をひろったが、顔を上げる事はせず。

まるで義務であるかのように、黙々と箸を進めていった。

「なんだよ、これ」

食後、ルキアに引き摺られる様にして連れて来られた一室。

その床に並べて寝かされていた「もの」に一護は眉をひそめた。

足元には金髪の美女。あちらには銀髪少年。その反対方向に転がるは剃髪の男とおかつぱの男。それに押し潰されている不運な男は一護につつかかってきた赤髪の刺青野郎。

その向こうにはルキアとそっくりな・否、ルキアそのものと言っても差し支えないだろう、瓜二つな少女が横になっていた。

違うところといえば、服装。隣に立つルキアが死神の制服である死装束を纏っているのに対し、畳に身体を横たえている「ルキア」は現世風の服を着ていた。

見たせば他の皆も洋服を着込んでいる。

そして、よくよく見れば全員肌が青白い。死人の様に血の気が通っておらず、もともと色白の「ルキア」にいたっては紙の様に真っ白だ。

「ふふふ・・・」

ルキアは低い声で笑うと歩を進め、「ルキア」の上半身を抱き起こした。

「これはな、義骸という」

「「ギガイ」？」

聞き慣れない言葉を鸚鵡返しに聞き返す。ルキアは自慢げに大きく頷くと「ルキア」に体を近づけ、その中に「するり」と入った。

一護は息を吞んで「ルキア」の様子を見守っていた。

と、今まで「ピクリ」とも動かなかった彼女の臉が震える。

ゆっくりと黒曜の瞳が現れ・・・いつもの古風な喋り方で話します。

「どうだ一護。驚いたか」

一護はあっけにとられてただ口を開閉させるだけ。その様子にルキ

アは堪え切れずにふきだした。

「はははっ！な、何だその顔は！！」

「う、うるせーなっ！で、結局なんだよ義骸って」

「これはな、飯の肉体なのだ」

親指で自分を指差し、得意げに胸を張る。

「現世に長期に渡り滞在する死神に支給されており、人間に成りすます事ができる」

「じゃあ今は人間にも姿が見えるのか？」

「無論だ」

「すげえな」

こんなものがあつたとは。一護は心底驚いていた。

「・・・俺も欲しいな」

言ってから子供のような我侘だった、と反省する。ルキアの顔を見るのも何だか気恥ずかしく頬をかきながらそっぽを向いた。

またからかわれるのだらう。そんな確信と覚悟と諦めに似た感情に一護は眉間のしわを深くした。

が、ルキアは一護の思いいがいでいた様なことはせず、腕を組み何度も頷いた。

「そうだろうな・・・。私も現世に来たばかりの頃は人間の中に入ることに多少といえども興味があつたものだ。そ・こ・で」

ルキアが組んでいた両の手を パンツ と打ち鳴らす。

襖が横にスライドし、扇子を広げた浦原が登場。

後ろから彼に付き従うように続いて部屋に入ってきたテッサイの肩に担がれている「もの」に一護は言葉を失った。

着ているものはジーパンにＴシャツと非常にシンプルな物。頬は死人の様に色がない。

硬く閉ざされた瞼にゆるくかかるオレンジ色の髪。その瞼が開かれた時の瞳の色を一護は知っている。なぜなら、それは

「・・・俺？」

「の、義骸っス」

浦原が帽子を片手で押さえながら言う。 テッサイが肩から義骸を置の上に降ろす。

近くに寄ってまじまじと見たわけではないが、本人の目から見ても違いが見つけられない。

「ちなみに一護サンが気絶してらっしやる時に色々調べさせてもらいましたからサイズはバツチリッスよ」

「人の寝てる時に何してやがるテメエ」

一護は飄々と笑う浦原を睨みつける。 彼に対する尊敬と感謝の念は一瞬にして霧散した。

「せっかく現世に来たのだ。 楽しまなければ損であろう」

「おう！ ありがとな、ルキア！！」

変わりにこの手配をしてくれたのであろうルキアに感謝の思いが募る。

一護は礼を彼女にだけ、万感の思いで口にした。

うれしそうに自分の義骸を見つめる一護。 まるでプレゼントを貰った子供のような振舞いにルキアは目元を和ませた。 しかし、次の瞬間辛そうに俯き、唇を噛みしめる。

その脳裏に去来するのは昨日の晩のこと。

「一護に義骸を、ですか？」

日番谷の提案にルキアは首を傾げた。 日番谷は撤回するつもりは無いらしく、しっかりと首肯すると浦原に視線を滑らせた。 無言の回答の催促に浦原は頷く。

「もちろん、かまいませんとも。 明日にでもお渡しできます」

「でも隊長。 何でそんな事を？」

乱菊は怪訝そうな面持ちで日番谷に問う。 その場にいる誰もが思っていることだった。

「そんなにあの子の事、気に入ったんですか？」

「そんなんじゃないよ。浦原、奴に渡す義骸には仕掛けを作れ」

「わかってますよ」

「仕掛け？」

ルキアはその響きに眉をひそめた。

「ああ。まず、通常よりも脱ぎにくくする。義魂丸はもちろん、悟魂手甲は絶対に渡すな」

「それは、義骸に閉じ込めるといことですか！？」

「そうだ。運動能力は人間並みにおとせ。そしてもう一つ。霊圧遮断義骸を渡す」

ルキアは首を傾けた。それを渡して何の意味があるのだろうか？

「霊圧が遮断されれば破面に一護サンは感知できなくなります。死んだ・・・とも思っただけえればいいんすけど。まあ助けや迎えに誰か来る確率はぐっと減ります」

「そうして向こうが油断しているときに有力な情報を奴から絞り出す」

つまり、仲間から一護を隔離させるために義骸という枷をつけるのだ。

酷い話だ。

拾貳 義骸（後書き）

なんだか日番谷がくろい・・・。

いや、好きですよ、日番谷。ただこういう非情な事できるのは隊長ぐらいかな、と。

一言感想いただけるとうれしいです。

拾参 街中

一護は商店街のにぎやかさを目の当たりにして思わず足を止めた。友達なのだろう学生らしきグループ、腕を組んで歩く若いカップル、子供連れの仲のよさそうな親子。

行き交う人々。活気あふれるその様は虚圏には決して無い、あたたかな日常。

「どうかしたのか？」

急に立ち止まった一護に同行していたルキアが心配そうに声をかける。

「いや・・・ただ、にぎやかだなあって」

正直な感想を口にしながら辺りをきよろきよろと見渡す。

「おい、拳動が不信すぎるぞたわけ。もつと自然に振舞わんか」

「自然につて・・・んな事言われてもなあ」

一護は困ったように頭をかいた。

なんせ見るもの聞く事、全てが珍しくて仕方が無い。

これで好奇心が沸かないわけが無いだろう。

そんな一護の思考を読み取ったのか、ルキアは米神を押さえた。

「ならば、せめて大きな声で「わー現世つてすごい」・・・などと言うのはやめろ。目立つのだ」

「テメエも十分目立ってんだろ」

身振り手振りをつけて何処かの劇団員のように一護の言った事を繰り返すルキアは言わずもがな通行人の注目を浴びていた。一護の指摘を受けルキアは咳払いを一つするとにっこりと笑う。

「さあ、いきましよう一護君。おほほほ・・・」

「何やってんだ気持ちわるっ、う!？」

目にも留まらぬ早業で誰の目にも映らなかつただろう。

一護はルキアに踏まれた足を地面から浮かせ、抱え込む。その拍子にバランスがうまく取れなくて片足で跳ね回った結果、更に視線を

集める事となつたのはむしろ当然の結果だ。

「何をやっておるか!!」

その場から全力疾走で離れた後、ルキアは目を吊り上げ説教を開始した。

「あんな事をすれば人が集まってくるであろう!目立つな、と何度いえば分かるのだ貴様は。今は万人の目に姿が映っておるのだ。人間に不審に思われたらどうする!？」

「あそこで人が集まってきたのはほとんどテメエのせいだろうが。

何なんだよ、あの気持ちの悪いしゃべり方は」

「気持ちが悪いだと?失敬な奴だな。これはな、わずか一日で習得した現世語なのだ。貴様も手本にするがよい」

「誰がするか、誰が。ああくそ。ちよつと走っただけなのに汗出てくるじゃねーか。義骸つて身体能力まで人間にあわせてんのか?」
額に滲んだ汗を手の甲で拭いながら涼しい顔をして立つルキアに問いかける。

「っ、ああ。人間に不可能な動きでもしたらばれてしまうからな。特に貴様ときたらあっちへふらふら、こっちへふらふら。これで動きが速ければ世話が焼ききれんわ」

ルキアは一瞬だけ言葉につまったが憎まれ口と共にそう返した。
馬鹿にされた、と感じた一護はもたれていた壁から背を離しルキアに向き直る。

「あのな、俺は確かに挙動不審だったかもしれない。けどな、お前よりはましだったっていう自信はあるぜ」

一護は珍しい現世の様子に感嘆の意を表した。それは現世に住む者達にとっては首を傾げる事だったかもしれない。しかしその横で自慢げに現世ガイドを行っていたルキアは事もあるうに観光地のバスガイドのように小さな旗を持ちスピーカーを持参して話すのだ。住宅地でどれだけ周りから人がこっそりと見ていたのをおそらくルキアは知らない。

案の定、ルキアは訳が分からない、といったように秀麗な眉を顰める。

「何を言うか。私の完璧な現世の溶け込みっぷりをちゃんと見ていたのか？」

「浮きっぷりなら嫌って程見てきましたが？」

皮肉たっぷりに言い返すと、ルキアは小ばかにしたように鼻で笑った。

「そう見えているうちは、まだまだということだ」

口元に哀れみを含んだ笑みをうかべられ、一護は思わず突っかかる。「つんだとっ！？」

「ほら、次へいくぞ。うまいクレープ屋があっちにあるのだ」

が、ルキア簡単にあしらいコンクリートの詰められた歩道を歩き出す。

特に喧嘩をしたい訳でもなかったので体に込めていた力をぬく。

・・・そういえば、前に一度セロがクレープという物をおやつに出してくれたことがある。

生地の中にいろんな果物が入っていてなかなかおいしかった。

別に子供のように物で釣られたのではない。少し食べてみてもいいか、と気まぐれをおこしただけだ。

そう心の中で繰り返しながら一護は足早に先に行くルキアを追った。

人影がまばらになってきた所で現れた桃色と淡いクリーム色を交互にペイントされた屋根。

ルキアはそれを見てとめるとうれしそうな顔で一護の方を振り向く。

「あれが私の行きつけの店だ。見た目は小さいが味は絶品だぞ」

「小さいって・・・。お前、店の説明にそれはないと思うぞ」

「いちいち細かい奴だな。奢ってやるのだぞ。ありがたく思え」

「へえーへえー。感謝しますよ」

軽口をたたきながらクレープ屋に向かう。が、その途中で少女の怒った怒鳴り声を聞き、足を止めた。

「はあ！？何で金なんて払わないといけないのよ。ぶつかってきたのはそっちでしょ！？」

声のした方向をむけばくすんだ色合いから染めたのだろうと推測できる金髪の男を筆頭とする三人組に二人いる少女のうち、黒髪の少女が啖呵をきっていた。

「はあ！？何で金なんて払わないといけないのよ。ぶつかってきたのはそっちでしょ！？むしろそっちが謝んなさいよ」

ぶつかってきた男達を怒鳴りつけているのは有沢たつきを止めようと織姫は小声で話しかけた。

「ねえ、たつきちゃん。あたし別に怒ってないし・・・」

「ダメよ！アンタがせっかく買ったクレープ駄目にしてくれた挙句、謝りもせず金払えなんて。あたし、こういう性根が腐ったヤツが大っ嫌いな」

肩を怒らせる中学時代からの親友はどうやらひく気は無いらしい。井上織姫は眦を困ったように下げた。仕方なく自分から交渉してみる。

「あの、いくら払えば・・・」

「織姫っ！！」

たつきには悪いが彼女のためにもここで騒ぎは起こせない。

空手部の彼女には秋に大きな大会が控えている。何か面倒を起こして出場停止にでもなったりしたら大変だ。織姫は鞆の中の財布を握り締めた。

男達はにやにやと笑っていたが、金額を口にした。

「十万だ」

「え！？」

「ちよ、そんなに！？」

織姫もたつきも予想外の金額に驚愕を隠せない。高校生の二人からすれば、十万など大金のカテゴリに入ってくる。

「うるせえーな。この服のクリーニング代だよ」

金髪の男はクリームのついた髑髏のシャツをつまんだ。

「そんな趣味の悪い服に十万は高すぎでしょ」

たつきの安い挑発に男の顔に血が上る。

「うるせえ！痛い目見ないと分かんないのか！？」

「ほーほー。痛い目見させてもらおうじゃないの」

ごきり、とたつきは指の関節を鳴らす。織姫は険悪な雰囲気はどうにかしようとたつきの服の裾をひっぱり逃げようと合図する。が、たつきは心配ない、と首を振った。

「こんなのは正当防衛！それに試合に出られなくなるのが、アンタの楽しみにしてたクレープの恨み取つとかないと後で後悔するわ」

「たつきちゃん・・・」

拳を握り締めるたつきに申し訳なさそうに織姫はたつきの名を呼んだ。

「生意気な女だな。やっちなえ！」

月並みの台詞と同時に腰巾着らしき二人が殴りかかってきた。が、そこいらのチンピラが空手全国大会二位の女子高生に勝てるわけなど無い。

あっさりと裏拳と膝蹴りをくらいノックアウト。

「口ばつかとはこの事ね。ほら、アンタもかかってきなさいよ」

「くっそ・・・！」

金髪の男は舌打ちし、にんまりと笑う。

逆境の中での表情の変化にたつきは怪訝そうに？を浮かべた。

それ理由はすぐに知る事となる。

「きゃっ！？」

「織姫！？」

背後から聞こえてきた親友の悲鳴にたつきは目の前の男の事も忘れて振り返る。

その時に生じた隙を相手が見逃すはずも無い。

組み伏せられ頭を硬いアスファルトに強かに打ちつけた。

「たつきちゃん！」

たつきに倒されたはずの男達に羽交い絞めにされつつも、織姫は必死に身を振りたつきに駆け寄ろうとする。が、年齢と性別という壁が力の差となり現実は一歩たりとも動けない。

近くに通行人はいない。助けは期待できない。

もうダメだ。そう織姫が瞳を濡らした時。

「ふべえ!？」

「がへっ!」

奇声と共に織姫の両腕を拘束していた二人が吹っ飛んだ。比喻ではなく、本当に。

「・・・せっかく楽しんだのに、テメエのせいで台無しだ」

怒りを低く抑えたような声で二人を殴り飛ばした人物は言う。

織姫の前に庇う様にでたその人は鮮やかなオレンジ色の髪をしていた。

「女二人に大の男が三人がかり? ふざけんな」

少年はたつきを押さえつける男を呆れた様に一瞥した。

「ほらこいよ。テメエの相手なんざ俺一人で十分だ」

「つの野郎!」

たつきから標的を少年に切り替えた男が飛び掛ってくる。

織姫は大乱闘を覚悟し固く目を瞑った。しかし、予想に反し、聞えてきた音は鈍く深い一つだけ。

おそろおそろ目を開ければ倒れ伏した男を少年が見下ろしている。

「なあ、アンタ。大人しく逃げ帰るか、このまま続けて病院行つて十万以上支払うか。

どっちがいい?」

声の調子から後者を選べば少年は実行するだろう、と予想できた。

男はひきつった悲鳴を上げ、仲間も置いて走り去る。頭を失った残りの二人は尻尾を巻いて逃げていった。

「さて、と。大丈夫だったか?」

少年が心配そうな顔で振り向く。今までチンピラに向けていた声とは真逆の声色。

優しいブラウンの瞳が織姫を捕らえた、その瞬間。

彼女の心臓はひっくり返ったかのように一際大きく脈打った。

拾参 街中（後書き）

織姫（街中で）恋をする、でした。

本当は彼女は出てこないはずだったんですがどうしても出しくな
つちやつて・・・。

結果こんなんでも本当に申し訳ないです。

誤字脱字、または一言でもコメントをいただけたら幸いです。

拾四 案内（前書き）

祝！知らぬ間にお気に入りに登録してくれた方が百件突破！！
これも全て皆様のおかげです。こんなダメダメな黎音ですが、応援
してくださる方が居る限りがんばって書いていきます！！
どうか見捨てず、最後まで応援して下さい。

拾四 案内

飴色の髪をした少女が ぽかん と口を開けてこちらを見ている。どうしたものか、と一護は今更ながら困っていた。

勇ましく男達を怒鳴りつける黒髪の少女を一護はただただ感心して見ていた。

それが喧嘩に発展し、男達の人質をとるという卑劣な行為に我慢できなくなり飛び出したはいいものの。こんな派手な髪色をしていれば変に思われて当然である。

現に少女は一言も言葉を発せず、ただ瞬きを繰り返しているではないか。

「あゝ・・・、怪我不いか？」

とりあえず当たり障りの無い事を聞き、会話をしようと試みる。

が、彼女は真つ赤な顔で赤牛の様にかくんかくんと首を上下に振るだけ。

どうしたものか、と考えていると黒髪の方の少女が服についた土を掃いながら立ち上がり一護に向き直った。地面に打ち付けた額が赤くなっているが、大事にはなっていない様だ。

「あんがと、助かったわ。あたしは有沢たつき。こっちは、」

「い、いい井上織姫ですっ！」

たつきが名乗ると、織姫も裏返った声で名前を言った。そして何故か敬礼。

「お、おう。俺はー」

「一護っー!!」

言おうとしていた名を別の声で言われる。そして背に衝撃を受け、一護は前のめりにつんのめった。

「何をしてるか、馬鹿者！私にクレープを買わせておきながら自分はどこかに行くなど、赦されると思っておるのか！？それに単独行動はとるな、とあれほどー」

両手にクレープを持つルキア。一護は衝撃の訳を理解した。

・・・足で背中蹴りやがったな。

なおも言い募るルキアに一護は大人しく聞いてやるのが一番と判断し、黙って相槌をうつ。

「・・・あの〜」

それを中断したのは織姫だった。

「・・・莓さん、ですか？」

静寂

「つぶ」

ルキアが堪えきれず、ふきだした。

「い、いちごっ！？随分と可愛らしくなったではないか！？はっははは！！」

「笑うな、テメエッ！！」

一護が真っ赤になって怒る姿は正に果物のそれで。

ルキアはその様を見てまた笑い転げた。

「あはははははっ！！駄目だ、腹が痛くなってきたぞ！」

「そのまま腹痛になって寝込め！！」

一護は腹を抱えこむ様に笑うルキアに言い返すと、織姫に慌てた様に訂正を施す。

「莓じゃねえ、一護だっ！一つを護るで一護！「い」の方にアクセント！」

「は、はいい！！」

焦って顔を近づけると赤面してがくがくと頷く。一護は訳が分からず首をかしげた。

・・・そんなに顔が怖いのだろうか？

どうやらあまり好い印象は受けていないらしい。気をつけなければ。

一護は鈍感であった。

ほんわかと温かい生地にひんやりと冷たい生クリームとアイス。色とりどりの果物。

大好物のチョコレートまで一緒に入っている。言う事なし。

一護は満足げにクレープにかぶりついた。

「おいしいでしょう」

得意げに胸を張るルキアの言うとおり、クレープは絶品だった。

たつきと少しは一護に慣れたらしい織姫ももう一度クレープを買い、一緒に食べている。

「あとね、これに七味唐辛子とマヨネーズと茄子をトッピングする
とおいしいんだよ!!」

「いや。織姫、それアンタだけだから」

織姫の味覚にダメだしをしたたつきは一護とルキアの話した事（勿論、嘘）を纏めた。

「んじゃ、二人は親戚の家に遊びに来てて、この町の人って訳じゃないんだ」

「ああ」

「その通りですわ」

また例のお嬢様しゃべりでルキアは微笑み、上品に小口でクレープを食べる。

それを一護が半眼で見つめていると、「なんだ。文句でもあるのか」と言わんばかりの眼力で睨み返された。それに片頬をひくひくと痙攣させながらもクレープをまたほおばる。

「ところで、この後何処行くか決まってるの？」

たつきの問いに一護は観光コースを定めているルキアを見つめた。
ルキアはクレープから顔を上げる。

「いえ、特に行くべき所等は決めていませんわ」

「じゃあ今まで回ってきたところは何だったんだよ」

まさか適当とかいうんじゃ・・・と一護が勘ぐっているとルキアは

品のよい笑みをうかべる。

「行きたかったんですの」

「お前の好みのルートだったのか!？」

「それが何か？」

「・・・いや、もういい」

開き直られ、一護は追求を諦めた。おいしいクレープをまた一口。

「じゃあさ、一緒に行かない!? 私、いろんな所知ってるよ!！」

名案を思いついたとばかりに織姫が両手を胸の前で合わせる。顔が満面の笑みで輝いていた。

さすがのルキアもこの提案には口ごもった。

「いえ、しかしその・・・」

「でもさ、お前らにだって予定とか都合とかあんだろ? 迷惑かけるわけにはいかねえーよ」

目を思いっきり泳がせるルキアに一護は助けの船を出す。それにルキアもしめたとばかりに乗り込み、大きく頷く。

「そ、そうですわっ! 井上さんと有沢さんにご迷惑をお掛けするわけにはいきません!」

「ああ大丈夫だつて! あたし等もこの後町ぶらつくか、ぐらいのプランしかなかったし」

「地元の人が居たほうが、穴場スポットとか見つけられるんだよ!」

二人の申し出は純粋な好意からのものだ。ゆえに断りづらい。

「ですが・・・」

ルキアの困惑した表情にたつきは「嫌なら無理にとは言わないけど」と断りをいれる。

「この辺入り組んで道とか迷ったら色々とかいだしさ。この町の人じゃないなら尚更」

いえ、まず二人ともこの世界の住人じゃありません。

などとは言えず、一護は曖昧に口端で笑った。

「あのね、おいしい和菓子屋さんがあるんだよ!」

「・・・白玉はあります?」

ルキアが織姫の言葉に反応した。

「もっちゃん！あその白玉、おいしいんだよ！」

「ご一緒してもよろしくて？」

あっさりと意見を翻した。いいのか、それで。

「もちろんだよ！」

「じゃ、行こつか」

「参りましょう」

にこにこと笑いながら出発する三人組。いや、それでいいのか。

「ほらー護君、お速くー！」

もういいや。

一護はつつこむ事を放棄し、後に付き従った。

移動する一護達を隠れて追跡する五対の目。

「・・・なんか、朽木の方が引つ張りまわしてません？一護のこと」

「何やってんだ、ルキアのヤツ」

「俺はアイツと殺り合いてえ」

「ええ、今度は僕に譲っておくれよ。君は前きた奴等と楽しんだじゃないか」

「いいからお前等、黙って歩け」

日番谷の命令に義骸に入った死神一同、とりあえず返事をする。

モデルの様に流行の服を着こなす乱菊は道の隅で壁に隠れるようにして進んでいく恋次に不思議そうに首をひねる。

「ちよつと、アンタそんな格好して何やってんのよ」

「いや、乱菊さん。前にテレビドラマで尾行してた刑事の格好を・
・」

そう弁解する恋次の格好はサングラスによれよれのベージュのロングコート。更に同色の帽子までかぶっている。コートの下のスーツ姿の方がまだましだ。

「だっさー!!」

「・・・阿散井、とりあえずそのコートを脱げ」

「おもつくそ怪しいぞ、恋次」

「美しくないね」

次々に言われ、恋次は泣く泣くコートを脱いだ。

「に、しても拍子抜けするぐらい何も問題を起こさないね、一護君は」

弓親は前方を眺めながら驚きを口にする。乱菊も「そうね」と同意を示す。

「そうね。てつきり演技が何かで朽木が騙されたんだと思ってたけど、案外本当に大人しい子なのかも・・・」

「何言ってるんスカ！そうやって気の緩んだ所で襲ってくるに決まっています！」

前を行く一護の背を睨んでいた恋次が憤慨した様に怒鳴った。木刀を肩に引つ掛け歩く一角が興味なさそうに大欠伸をする。

そして一同の真ん中を歩く日番谷に視線をやった。

「なあ日番谷隊長、何であの破面と戦ったら駄目なんスカ？力で脅して吐かせたほうが速いし確実だと思うんですケド」

「・・・無理だ」

日番谷は迷いなく静かに告げた。それに乱菊に一護の危険性の可能性を説いていた恋次も耳を塞いでいた乱菊も呆れて二人を見ていた弓親も質問した一角さえもあつけにとられた。

「え、でもあんなガキ、負けるわけないですって」

自信ありげに恋次が鼻を鳴らす。日番谷はゆっくりと口を開く。

「最上級大虚について浦原が話した事を覚えているか？」

「はい？」

脈絡の無い話に恋次は刺青が施された眉根を顰めた。

「ええ」と・・・、すつごく強くて小型で少なくとも・・・」

指を折りながら乱菊は最上級大虚の特徴を挙げていく。

「・・・そして、仮面が剥がされた時は必ず人型に成る」

日番谷に告げられ、乱菊は ハツ と息を呑む。他の面々も顔を強ばらせた。

一護は 完全な人型だった。

一同の脳裏にこの間現世を強襲した破面の姿と力がよみがえる。

彼等は強かった。しかし、もとは最下級か中級の虚である、と日番谷は結論づけた。

・・・もしも一護があれと同等か、それ以上の力を持っていたとしたら・・・？

「だとすれば・・・生かして捕らえるのは難しいかと」
進言した乱菊に頷く日番谷。

「戦いを好む破面が表面上だけかもしれないとはいえ友好的だなんてこの機会を逃せばおそらく二度とねえ。情報を引き出す機会もな刀も身体機能も封じたんだ。わざわざ暴力でいなくてもいいだろう」

「そこまで考えてたんすか」

恋次は目を丸くする。

不測の事態に瞬時に対応しただけでなく、それが後々プラスになるように考え動く。さすが、天才児の異名は伊達じゃない。

隊長職につく人物の凄さを改めて実感しながら恋次は前方の一護の監視に戻った。

と、首をひねる。

「何してんだありゃ？」

その紅の視線の先には後退りながらぶんぶんと首を横に振る一護と詰め寄るルキアの姿があった。

「無理無理無理無理、絶対無理！！！」

まるでその他の言葉と動作を忘れてしまったかのように一護は拒否の意を言い続ける。

にじり寄るルキアから一步でも離れるためにまた一步、足を後ろに

すらしながら後退した。

「何を仰るの一護君。大丈夫、きさ・貴方ならできますわ」

一方ルキアは目をぎんぎらと光らせながら迫る。獲物を捕縛しようとするハンターの目だ。

助けを求めルキアの背後に視線を走らせたが、織姫は申し訳なさそうに両手を合わせ片目を瞑り、たつきはというと「手伝おうか？」とむしろ一護の捕縛にのりのりだ。

げんなりと気落ちしながらも一護は何故かこうなるまでの経緯を事細かに振り返らなければならない気がし、それに従った。

織姫とたつきに案内されながら一護とルキアは賑やかな町を物珍しそうに眺めていた。

といつてもルキアは先日からの町に滞在しているので本心からそう思っているのは一護だけだろうが。

「すみません、あれは何ですか？」

そのはずだったのだが、突如ルキアが小首を傾げ人差し指を伸ばした。白く細い指が何を指しているのかと辿っていけば、そこにあるのは至って普通な住宅。

唯一相違点をあげるとすれば、その前に「うなぎ屋」という看板が出ている事だろう。

「あー、あれね。「うなぎ屋」っていう何でも屋さんだよ」

「「何でも屋」？鰻屋じゃねーのか？」

「だから、「うなぎ屋」だよ」

織姫はにこにこと笑う。一護は頭痛の訴える頭を押さえる。

「あー織姫？つまり一護は食べ物屋じゃないのかって聞いたわけで・・・」

たつきの通訳が入り織姫は慌てた様にはつと息を呑む。

「ち、違うの！うなぎ屋さんはうなぎ屋だけど鰻屋じゃないけどうなぎ屋さんなの！」

あ、ちなみに鰻にはマヨネーズとマシユマロをそえるのが織姫流・・・

「ああなるほど！つまり店名は「うなぎ屋」だけど鰻は取り扱っていないって事ねよく分かったわねえ二人とも？」

息継ぎをせず織姫語を解読・及び翻訳したたつきは二人を見る。その迫力に押され、一護達はかくかくと首肯した。

「あ、ああ・・・」

「・・・よく、分かりましたわ・・・」

『たつきの説明で』という重大な一言を二人は揃って飲み込んだ。その心遣いにたつきは苦笑し目礼する。

「この店長　育美さんっていうんだけど、気さくで優しくいい人なんだ」

「ああ！？辞めるってどういう事だお前！！ちょ、塾う？つぎかな、雇ってるこっちの身にもなれ・・・ってクソッ！切りやがった！！」

二階から響いてきた怒声。その言葉使いの荒さに一同、沈黙。その間にも二階からは「根性無し」や「ゆとり世代め」といった辞めたバイトに対する罵詈雑言の数々が並びたてられる。

「「気さくで優しいいい人」・・・」

「普段はその・・・ねえ」

一護はたつきの言った紹介文句を現実と比較するように口に出す。本人も多少現状とのズレを感じているせいか気まずそうにそっぽを向く。

「そうだ！せつかくだし皆で挨拶に行かない！？」

気まずい空気を吹き飛ばそうと織姫は提案する。一護とルキアは顔を見合わせた。

「・・・あそこに？」

二人が見上げた先には階段の上、罵声が降り注いでくるドア。

「あ、そうしょっか！！」

今までまともな事を言ってきたたつきの手のひらの返しように二人は顔を引きつらせて彼女を見つめた。その食い入る様な縋りつく様

な目に耐え切れなくなったのか、たつきは冷や汗をかきながら二人に耳打ちした。

いわく、このままでは近所に多大なる迷惑がかかってしまうし、ただでさえ「育美さん」は母子家庭で世間からは風当たりが強いのでここで目をつけられると大変なそう。

気を回しすぎなのではとも思うが大雑把に見えて細かに相手に気配りできるのが彼女の長所の一つなのだろう。

そんな事を思いながら一護は彼女の考えを了承した。ルキアも何もいわず頷く。

皆でうなぎ屋邸を訪れる事はこうして決定したが、ここで問題が起った。

上へ続く階段が狭く、二人横に並び上がっていくスペースも無い。先頭をきる勇者は育美より八つ当たりの可能性が無きにしも非ず。

そうして、ルキアは清らかな笑みで特攻（またの名を生贄、犠牲）に一護を捧げたのだ。

そして先程の「無理」「お前なら大丈夫」の言い争いに発展する。

「その根拠はどこにあるんだよっ!？」

「大丈夫ですわ、私が保障いたします!!」

「その保障に意味あんのかつ!？」

「店長さん、そんなに怖い人じゃないよ・・・」

織姫が言っが、止まる事を知らない罵声により説得力にとても欠ける。

そうこうするうちにしびれを切らしたのかルキアは一護の胸倉を掴むとぐいっ　と自分のほうに引き寄せた。

「いいから行け。分かったな？」

「・・・はい」

有無を言わせぬ眼光に一護はしぶしぶ返事をした。

階段を前にごくりと唾を飲み込む。

「いや、大げさ・・・」

たつきが何か言ったが耳に入ってこない。一段、足をのせる。二段目に左足を。そうして上がっていくうちに大分緊張は解れていった。扉の前に立ち深呼吸。覚悟を決めインターホンを押した。

「あ、一護！そのドア・・・」

たつきが何かを口にした。が、一護がそれを最後まで聞く事は無かった。

「はい、どちら様？」

バンツ　と勢いよくドアが外側に開いた。当然、すぐ近くに立っていた一護は避けきれない。呻き声をあげながら赤くなった鼻をさする。

「ん？あらごめん・・・って派手な頭ね」

「うつせえ・・・」

声を張り上げて言い返してやりたいが、痛みに負け呟く様な大きさになってしまった。

「どーも育美さん」

たつきに声をかけられ育美はそちらに首を動かす。頭の後ろで一つに束ねられた艶やかな黒髪が揺れた。

「あら、たつきちゃんじゃない！織姫ちゃんと・・・誰？」

「朽木ルキアと申します。どうぞよろしく」

ぺこり　と会釈したルキアに続き、一護も頭を下げる。

「一護です。「一つ」を「護る」で一護っていいいます」

「そ、じゃあ上がってって！今お茶淹れるから」

くるりとコーナーし店の中に入っていく育美にならない一護達も入っていった。

拾四 案内（後書き）

お久しぶりです。区切りのいいところまで一気に載せたらこんなに長く・・・。

読みにくいですよね、ごめんなさい。

育美さん大好き！なんです。かつこいい女性って憧れます。で、彼女が出たのは私の完全な趣味です。・・・石を、石を投げないでー！感想、誤字脱字等のご連絡下さい。ではまた。

拾伍 御茶

「ま、狭くて散らかってるけど、そこ等に座つといて」

育美はそう言つて、一護達を招き入れた。こじんまりとして、中々好感が持てる部屋だ。

商売ことは第一印象が大事というし、いうほど散らかってはいない。ただ、電話の置いてある小さなテーブルの上だけ別世界だ。受話器は中途半端に外れ、メモを取るためにそばに置かれていると思われる用紙とペンは床に転げ落ちていた。

まるでそこだけ嵐が通り過ぎていったかの様。

何があつたのか大体想像のつく一護はあえて何も触れずに黙つてソファに座る。

ルキアもスカートを押さえ、そおつと腰掛けた。

「ね、いい人でしょ？」

真向かいに座つたたつきにウィンクされ一護は苦笑つた。

「ああいい人だな……。人の鼻っ柱をドアで潰そうとするぐらいには」

「あ」

一護はまだほんの少し赤みの残る鼻を押さえる。ちょうど育美が奥から戻つてきた。

「ほいよ、お茶」

机の上に置かれた四本のペットボトル。

「そつちの二人もサントリーでよかった？」

「へ？まあ……」

「かまいませんわ」

それを聞くならずペットボトルで出す事を「よかった？」ではないか？

一護はそう思つたが黙つてキャップをまわす。

「おっと、自己紹介が遅れたね。あたしは鰻屋育美。ここ何でも屋

の「うなぎ屋」の店長だ。よろしくね、ルキアちゃんと一護……
だっただけ？」

確認のためか、問われた。ルキアは微笑を浮かべ肯定し、特に発音も間違っていないので一護も頷く。

「にしても見ない顔だね、二人とも。空座第一高の生徒じゃないのか？」

いえ、学校云々の前に人間じゃないんです、二人とも。

お茶を啜りながらブラウンの瞳を思いつきり泳がせた一護にルキアはため息をつく。

分かりやすすぎるぞ、貴様。

絶対嘘がつけない性質らしい。一護の新たな一面を知りますますルキアの中の「破面」のカテゴリーから一護は遠ざかっていった。

ルキアがそんな事を思っているとは露知らぬ一護は現世で商売をしている育美を物珍しげにじい……と見た。虚圏では商売人など絶対お目にかかることは無い。むしろ居たら笑える。

興味津々、けれど現世の人間が言わなそうな事は言わないように気をつけて。それとなく、自然に質問する。

「何でも屋」って……具体的に何するんだ？」

パツ と明かりを灯したかと錯覚するぐらいに育美の顔が輝いた。
「よくぞ聞いてくれた！！」

ばんっ と一護の背中を勢いよく叩いた育美にあるのは、誇れる自分の仕事を知ろうとしてくれる事への喜びだけ。悪意など欠片ほども無いのだろう。

・しかし、叩かれたせいで飲んでいたお茶が気道に入ってしまった側としては苦しくて仕方ない。咳き込む一護に向けられる三対の同情の視線。

育美は気がつかなかったのか、はたまた無視したのか流れるように何でも屋を語り始めた。

「困っている人を助ける正義の味方……いつしか人はそれを「何でも屋」と呼んだ！！」

「いや、金取るんだろ」

「東西南北、依頼とあらば即参上！うなぎ屋店长・鰻屋育美！」

「それ、決めポーズ？」

びしっ　と片手を斜め上に突き出し、育美はどこかのヒーローの様に動きを止めた。

そのまま立て板に水を流すかのごとく何でも屋のすばらしさと魅力を語りだす。

「話ふんなきゃよかったかも・・・」

どうやらこのまま当分続きそうだ。一護はペットボトルにキャップを回しはめた。

どこまでも広がる白砂。響き渡る声。

「いつこが現世に行つたつスカー！？」

眼球がこぼれんばかりに目を見開いたネルにしなだれかかるようにルベルゼが抱きつく。

「そうよ・・・。悩んで悩みぬいて後を追っかけようとしたらね、ウルキオラが」

『貴様は謹慎中だ。一護は任務で特別に藍染様に外出許可を出していただいたがな』

「つて言うのよー！！」

「はあ・・・ウルキオラ様もなんていうか・・・ゆうずうがきくのは藍染様といつこにだけっス」

「あんの鉄仮面！石頭！蝙蝠！」

その他一通りの悪口を思いつく限り並び立て、ルベルゼは大きくため息をつき、白魚のような指先でネルの仮面の割れた部分をなぞりながら口先を尖らせる。

「だって・・・一護ちゃん空座町行つた事ないのよ？虚夜宮でもた

まに迷うのに・・・。

道に迷っても誰にも聞けないし・・・」

一護が実際にその事態に陥り、死神に道を聞きあまつさえ現在進行形で道案内されているとは知らないルベルゼ。知らぬが仏。

「もし、死神にでもあつたりしたら・・・ああああ!!」

その死神と一護が現在進行形で行動をとみにしているとは知らないルベルゼ。この調子だと、知ったら発狂するかもしれない。

「でも、一護ちゃんなら・・・でも死神に餌付けとかされたりして和んでたり!!」

いや、まさか。あまりにも突拍子のない妄想にネルは首を振る。しかし、一護がお菓子をおいしそうに食べながら死神と仲良く談笑する光景が瞼の裏にありありと映し出され、その考えを改めた。

・・・いつごろなりやりかねねーっす。

その二人の心配事が現実になっていると二人が知るのはいつになることやら。

「・・・このこと、セロは知ってるんスか？」

「もち。ってか最初に知ったのアイツだし」

「・・・まあな」

「「はうあ!?!」」

突然のご本人登場に二人は飛びあがって驚いた。セロは慣れた手つきで盆の上からカップ五つあるうちの三つを下ろすと紅茶を注いでいく。ふんわりといい香りが白い湯気とともに漂う。寸分狂わず同量ずつカップを満たしていく紅茶にルベルゼは董色の瞳を細める。

「随分と落ち着いてるじゃないの。アタシよりも一護ちゃんとは長い付き合いだつてーのに薄情なもんね」

「付き合いが長いからこそだ。一護は強い。俺よりも・・・そしてお前よりも」

セロは長い前髪から黒水晶と白黒反転したオッドアイをルベルゼに投げかける。

「余計な心配をするよりお前はそのなまりきった剣の腕を磨いたら

どうだ？」

「どうかしら？アンタの首を落とすぐらいならできると思うけど？」
ふんっ とルベルゼは小ばかにしたように鼻で笑う。険悪になってきた雰囲気ネルは身を震わせテーブルについた。お茶でも飲んでいよう、と考えたのだ。

いそいそとカップに手を伸ばすネルにも気づかず、紫と黒が睨みあう。

「だいたい・・・、いつつも思ってたんだけどアンター護ちゃんに甘いのよ！！」

「俺は一護の意思を尊重しただけだ。お前は過保護が過ぎる」

「あんの天然鈍感ちゃんにはあれぐらいでちょうどなの。意思を尊重って何？それじゃ一護ちゃんが死ぬって言ったら黙ってOKだすわけ？」

「それとこれとは話が、」

「一緒よ！」

まるつきり子供の教育方針で食い違いぶつかる親だ。

先程までの一触即発の空気が和らいだわけではないが、少なくともネルは体の震えを止め、落ち着いてカップに口をつけられた。と、顔に驚きをあらわにする。

「・・・濃い」

いつものまろやかな味は無く。白の陶器のカップに入った紅茶は濃い紅みをおび、舌には茶葉を浸しすぎた時特有のまとわりつくような苦味が残る。

セロにあるまじき失敗だ。それが意味する事にネルは「なーんだ」と一人納得したような、呆れた様な顔でカップの底を見る。

「・・・なんだかんだ言っても、一護のこと心配してるんじゃないっスか」

言い争うセロとルベルゼを見る。お互い刀を部屋に置いてきているため、抜刀沙汰にはなっていないが見えない火花が見えると錯覚するぐらいにお互い敵意をちらしていた。

普段無口なセロが饒舌になり、敵意をむき出しにするのは一護の事だけ、とルベルゼは気づいているだろうか？いや、変なところで鈍い彼女は絶対に気がついていない。

「他から見れば、似たもの同士なんすけど」

違いは一護の意思を尊重するか、安全を優先させるかだけ。それにしたって一護のことが大切だという思いからという事には変わりないのだ。

「いーいー！？一護ちゃんは大切に大切に箱入りで育てるべきなの！！」

「子供の自由を制限するのは教育上よくない。あくまで自由な発想と行動を」

「あほんだら！わからずや！」

いや、あんたらどこの保護者っすか。

ネルはずずつと茶をすすった。ほろ苦い味が舌いっぱいに広がった。

拾伍 御茶（後書き）

久しぶりに虚圏の皆が登場です。ちなみに一護に出会った順番は、「彼女」 ネリエル組 セロ ネル組 ルベルゼ、と考えています。余談ですが「彼女」の名前がようやく二つぐらいまでに絞り込めました！（えー）

いつ登場するのは神のみぞしる！違った、みぞしる！
コメントいただけたら更新の励みになります。

拾陸 写真

「ん・・・？」

一護は天井を仰いだ。何だかどこかで誰かに噂をされている気がする。

「それでなー、一番苦労したのはやっぱり・・・って聞いてんのか一護」

「あ、ああまあ」

「怪しいな。ま、いつか。で、その依頼はまず依頼人が無茶苦茶でー」

一体何時まで続くのやら。むしろよくそこまで話し続けていられるものだ。

空になったペットボトルを机の上に置き、一護は相槌をうつ。ルキアは隣に座る織姫と談笑していた。たつきは壁にかかった時計に視線を運び、ため息を吐く。

「育美さん。そろそろ、二人を別の場所にも案内したいんだけど」

「ん？ああ、そうだったか。悪かったね長話につき合わせて」

「いや、俺もおもしろかったし」

確かに延々とどこまで続くか分からない話であったが、内容がおもしろくなければとくに席を立てている。育美は中々の話し上手であった。

「そう言ってもらえるとうれしいよ。何かあったらこのうなぎ屋にまかせなー！」

育美のウインクとともに話は終了し、一同はうなぎ屋を後にした。

うなぎ屋からでた一護達をどうしても案内したいところがある、と織姫が先導をかってでた。

「こっちこっちー！」

ばたばたと大きな建物の前に立ち、手招きする。一護はそれが何か分からなかったが、たつきは大きなため息をついた。

「織姫え。あんた、ゲーセンってさあ・・・」

「ほらほら、皆早く早く!!」

ばたばたと走って入り口に向かう織姫。たつきは困ったような顔で一護とルキアを振り向く。

「ごめん、いい？」

「かまいませんわ」

一護が答える前にルキアはやわらかい笑みをたつきに返す。それにほっとした素振りを見せながらたつきは織姫の暴走を止めようと駆け出した。

一護は微笑を振り撒きながら手を振るルキアにそっと問いかけた。
「あ、あのサルキア。「ゲーせん」ってなんだ？」
ルキアはいつもの古風な口調に戻る。

「「ゲームセンター」の略だ。たくさんゲームが置いてある」
そういえば、と一護は記憶を辿る。確かルベルゼが「トランプ」という物を「現世のゲーム」といつていた。ルールは複雑だったが、やってみるとなかなか楽しかった。一護は期待に胸を膨らませる。
「なあなあ、それってトランプっていうのもあるか？」

「分かん。が、囲碁や花札もあるかもしれんな」

傍から聞けばあってはいるのだが少しずれた会話をしながらガラス張りの入り口の前に立つ二人。すると、一護達を歓迎するかのようにガラスが真ん中で左右に分かれ開いていく。誰かが動かしいているのだろうか。一護はそう思いこちらを凝視している人物を見つけ出そうと目を辺りに走らせるが、今入ってきた二人を注目する者は一人もいない。

「人が近づくと自動で開くのだ」

その場できよきよと周りを見回す一護をみかねたルキアが説明をした。

チカチカと様々なところで色とりどりに光るライト。鼓膜が破れるかと思うほど大きな効果音。今まで無音に近い世界で暮らしていた一護にとっては歩いてきた道々ですら賑やかで目が回るようだったというのに、これでは失神ものだ。

「あ、こつちこつちー!!」

手が数本見えるほどのスピードで織姫は手を振る。

おぼつかない足取りで進む一護を引つ張りルキアは織姫の方に向かった。たつきが目の焦点が定まらない一護の様子を見て小首を傾げる。

「あれ、一護どうしたの？」

「ひ、人酔いしたみたいで・・・」

ルキアのフォローにかるうじて頷く一護の顔色をみてたつきは目を見張った。

「ちよ、本当に大丈夫・・・？」

「結構ギリギリ・・・」

力なく笑う一護の背を容赦なく引つ叩きルキアは微笑む。

「治りました？」

「治るかぁ!!」

「でも元気になりましたわ」

「いや、怒りで一時的なものじゃないかと」

たつきの冷静なつつこみにより一護は自分の体調を思い出した。

口を手で押さえる一護。とそこに向こうから駆け戻ってきた織姫が

バシンッ　と勢いそのままそばに居た一護の背を景気よくしばいた。

「ほらほらあ、皆はやく来なつてば!!」

「がはっ!？」

「い、井上さん・・・」

「織姫、それとどめー!!」

「え!?!うそ、ごめんねっ!?!」

白目をむく一護をあわてて介抱する三人。

その甲斐あってか一護は深呼吸を大きく一つすると、「もう平気だ」

と口元から手を外す。まだ若干は青いものの大分類に血の気が戻ってきたところで織姫が皆の腕を取りぐいぐいと奥へと引っ張っていく。

「さ、あっちにプリクラあるの！一緒に撮ろうよ！」

「ぷ、ぷりくら？一緒にとる？？」

「何々？一護。アンタプリクラも知らないの？」

箱入り息子？等とたつきに茶化され一護は笑い飛ばせなかった。脳裏にルベルゼとセロの顔が浮かび上がる。過去の映像も同時に再生。

「一護ちゃん、ダメよ！そんなにたくさん物を持つちゃ！あ、危ない！」

「・・・本五冊持っただけだぜ？」

「・・・一護、別にわざわざ茶を淹れる手伝いをしなくてもいい・・・というかするな」

「んでだよ。味が落ちるとかいうのか？」

「いや、火傷の危険性がある」

「・・・お前、俺をバカにしてんのか」

それでも懇切丁寧に話せばセロは納得してくれるがルベルゼは一筋縄ではいかない。

虚閃を放ちそうになるところを武力でもって押さえ込み、もはや小規模戦闘に発展するのだ。

「箱入り息子」。一護は言われた言葉を頭で復唱し、疲れきった笑みを顔に浮かべた。

「・・・なんか、否定できない。むしろピンポイントで言い当てられる。

勿論、彼等とは血など一滴たりとも繋がっていないのだけれども。そんなことを一人考えているとたつきに何事課囁かれていた織姫が頬を赤く染めつつも手をふるふると緊張で震わせながらも差し出し

てくる。

いまさら何故そんな事で震えるほど緊張しているのだろう。そうか、顔か。また怖くなっていたのか。一護は眉間に寄ったしわを伸ばそうと指で眉間を摘まむ。

「あ、あの一護君。ええつと、もしよければこのわたくしめとその・ふ、二人で・・・」

「何だよ。言いたい事あんなら早く言えよ」

「織姫、織姫」

たつきが胸の前で両手を握り締め「ガンバ！」と小声でエールを送っている。

何への応援かは知らないが織姫には伝わったようで力強くガッツポーズをたつきに返す。

「い、一緒にプリクラ撮りませんか!？」

「おお、いいぜ」

「ひよえええええ!？」

一言即答すれば奇声と共に飛び上がる織姫。顔には安堵の色とうまくいきすぎたことからからか、僅かな困惑。

自分から言っておいて何をそこまで驚く。

一護は内心首をひねりながらもほら、と近くにあつた「プリクラ」とピンクの文字が印刷された暖簾もどきが並んでいるフロアを指差す。

「ほら、あれだろ?早く撮ろうぜ、皆で」

「・・・ふえ?」

「いや一緒に皆で撮ろうつて、お前も今そう言っただろう?」

「あ、う・・・うん」

意気消沈といった感じで織姫はどんよりとした重い溜息を吐き出した。

たつきがその肩を優しく抱いて慰めている。

「アイツ、想像以上に鈍いわ。持久戦よ」

「う、うん。たつきちゃん、わたしががんばるね!」

そんな事を二人がぼそぼそと声を潜め話しているとは露知らず。

一護は一番手近にある「プリクラ」と書かれた布に似たものを興味深々でめくってみる。

なにやら四方を布のようなもので囲っただけの簡易な小部屋だ。その一辺には壁から突き出た黒く光るカメラのレンズと何やら陽気な音楽やらが流れ出る画面があった。

ピンクと黄色の可愛らしい丸文字が画面に映っている。やたらカタカナばかりが羅列していた。

「ふむ、これが」

ルキアも不思議そうに画面を見る。

「って、撮ったことあるんじゃないのか？」

「たわけ！そのような暇が死神にあるわけ無かるう。遊びなど以外だ。ましてや、こんなわけのわからぬ機械だらけの所になど誰が好き好んでくるものか」

「・・・言ってることとやってる事、間逆なんスけど」

きらきらと目を輝かせ、画面に笑みをこぼし、カメラのレンズを片目を睨り覗き込むルキアは誰がどう見ても楽しんでいる。

（ひよつとしてこいつ）

一護の脳に一つの疑惑が過ぎった。

、案内とか言って、本当は俺をだしにして遊んでるだけなんじゃ・

・・・？

「いや、まさかな・・・？」

「何がよ？」

一護がルキアへの疑いを振り払っているとしたつきが後ろから復活した織姫と肩をならべこちらに来た。

「これで撮ろつか。よし、入って入って」

「ちよ、え、ここ入るのか！？」

「何、ホントに初めて？大丈夫大丈夫、痛くないから。多分」

「ちよ、最後の一言なんだ！？」

からかわれてるとも知らず一護は顔を青ざめさせた。

「お、俺やつぱり遠慮して・・・」

「ここまできて何寝ぼけたこと言ってるの。ほら、すぐすむから！」

「さ、撮ろう撮ろう！」

「楽しみですわ。ほほ・・・」

「ルキアっ！？テメエまで・・・ちょ、こらまでひっぱんな！」

三人がかりでの引っ張り込みに一護は敗北を喫した。

カメラのフラッシュのたびに一護の悲鳴じみた声が響いてきた事実をここに記す。

手にされた一枚の小さなシール式の写真の数々。そのうちほとんど一護は驚いた顔をしていたり、ルキアやたつきに無理やり首に手を回されていて迷惑そうにしている顔だったり。

ようするにまともな顔をしている作品が一枚も無いのだ。

まあ、もとより眉間にしわをよせた仏頂面なので気にすることも無い。

そう結論を弾き出した一護は横に並んでいたはずの頭一つ分以上下にある黒髪が姿を消しているのに気がつき、前へ進む足を止めた。後ろを歩いていたたつき達を振り返るといつの間にも立ち止まり、織姫の持つ先ほど撮ったプリクラを見ている。三人ともだ。

そんなに気になる写真等あったらどうか。さんざん見てきた自分のプリクラをもう一度確認するがどれもこれも見飽きたものばかりで目新しい発見は無い。

不思議に思いつつ一護は三人が固まって立っているところまで戻り、身長差を使って上から覗き込んだ。

が、皆の注目を集めている写真に拍子抜けしたように眉間から力を抜く。

「なんだ、これが」

につこりと笑う織姫。ピースサインを画面に突き出すたつき。ルキ

アは猫をかぶったままおしとやかに口に手を沿えている。一護は相も変らぬ仏頂面だった。

「いや、あたしらもそう思うんだけどね・・・」

「井上さんが・・・その・・・」

言われてみれば食い入るようにそのプリクラを見つめているのは織姫唯一人。

頬が赤いのは熱でもあるせいか。

「ま、アンタが一番まともに映ってるヤツだから、気持ちは分からなくは無んだけどね」

「は？何で俺が関係してくんだよ？それにその写真だって笑ってねーし」

「甘いですわ。「恋は盲目」と昔からいうでしょう？」

「「鯉」？あれって目が見えねーのか？」

「・・・ああ、うん。やっぱ勘違いしたかコノヤロー」

「鈍感もここまでくると病気ですわ」

はああ・・・とつかれた二人分のため息。一護は二人を見比べ、肩を竦めるしかできなかった。

拾陸 写真（後書き）

久しぶりの更新なのに話が進まない・・・。趣味を思いつきり入れるから仕方が無いんですが・・・。
次回はもう少しぐらい進展させたいです。
コメントありましたらお願いします。誤字脱字もお知らせしてください。

拾漆 哀愁

川のせせらぎが鼓膜を震わせる。水面に乱反射する日の光が眩しくてブラウンの瞳を無意識のうちに細め。しかし見続ける。一護はこの場所に案内してくれた織姫の方に礼の意を伝えるため振り向き呆れた。

「まだそれ見てたのか？」

「あ、あはははは・・・ごめん」

「いや、別に悪いとは言つてねーけど」

プリクラで撮られた小さな写真を両手でしっかりと持つ織姫はこくと頷くとまた写真鑑賞を再開する。

・・・いや、別に悪いとは言わないんだけどさ。

一護は苦笑し写真を穴が開くほど赤らんだ顔で見つめる織姫から川面に視線を戻した。

日光を受け宝石のように輝くそれらを視線をそらさず記憶に刻み込むように一歩も動かず。

ただ何をするでもなく、じい・・・と見ていた。

「・・・アイツ、何してんのよ一体」

川を見つめ微動だにしない一護に業を煮やしたか、たつきはその肩を叩こうと一歩近づく。

が、その手は白く華奢な手の意外なまでの強い力に止められた。

「朽木さん・・・」

「駄目、ですわ」

多少とはいえ一護の事情を知るルキアにはほんの少しだが彼の心情を「想像」する事ができる。

虚圏、という所がどういう場所なのかはルキアが正確に知る術は無い。だが、「死後の死んだ世界」と一護は以前言い切った事がある。生が欠片ほども感じられない夜の世界だ、と。

ならば生と光に溢れた現世に来て、一護は何を思っただろう。
驚き、憧れ……。もしくは羨みか、それとも妬みか。
けれど、どれを抱こうと最後に行き着く感情はおそらく、

哀しさ

「悲しい」ではなく「哀しい」。心が痛むのではなく、ただ切ない。

それはこの世界に留まることを許されないからか。

あるいはこの世界に生きられないからか。

それともこの世界を敵としなければならぬからか。

優しすぎる一護の胸を苛むのはもっと別の何かか、あるいは全てか。

ルキアには分からない。分かることは今はそつと見守るのが一番だ、という事。

だからルキアはたつきの手首を掴む。

「駄目ですわ、少なくとも今は」

そんな言葉と一緒に眉根をよせ、困ったような表情で笑みを見せた。

きらきらとゆれることに光は形を変えていく。たまに光の加減で七色が見えたりすると宝物を発見した気分になった。見ているだけで、暖かい気持ちになれる。

（これが、光　　）

『ねえ、「光」って知ってる？』

いつか「彼女」が言っていた。現世に赴くたびやってきて、仕入れ
たばかりの知識を一護に得意げに披露する、くだらなくも幸せな一
時に。

『きれいできらきらしてて、あつたかゝい気持ちになれるのよ』

「本当だ・・・」

やはり、「彼女」は嘘をつかない。ただ一度を除いては。

「本当だったよ、マール・・・」

今は亡き保護者役に伝えるように一護は蒼穹を見上げた。

ふらりと。特に何の理由もなく一護は河川敷に下りた。強いてあげるならもつと近くで水面を見たかったから、だろう。

じやい 靴の下で小石や砂利が小さな音をたてる。その小さな音に続いて別の音が耳元を通り過ぎる。落下後に聞こえた小さな水音連鎖するように一つ、また一つと地面にできる水のしみた円。

「・・・雨？」

あんなに晴れていたのに。一護は空を見上げもせずそう呟く。

雨は嫌いだ。マールが死んだ日も土砂降りの雨の日だった。

雨音は無力だった自分を責め、なじる。雨は体温を奪い、過去を想起させ涙を奪う。

無論、泣く資格なんて、無いのだけれど。

哀愁を漂わせた吐息を吐き出す。と、視界を癖のかかった長髪の手が横切る。

「マッ、・・・!？」

今まで考えていた「彼女」とそっくりな後姿に名を呼びかけるが、途中で口を紡ぐ。

マールの髪は亜麻色。もう少し黄がかかっていたはずだ。それに一瞬見えた横顔はまったくの別人。

「・・・何やってんだ 俺」

ハッ、と自嘲の笑みをこぼす。

傘を差した女性は微笑みながら斜め下の「誰か」と喋っている。そちらに視線を移した一護は眉を顰めた。そこだけぼんやりと白い

靄がかかり、見通せない。何だというのだろう。

「あの、すみません」

気になり呼び止めたが女性は背を向け歩いていく。

無視か、無視なのか。

初対面とはいえあんなりの態度に一護は米神を引き攣らせその肩に手を伸ばす。

「すみませんが、少し話を」

（あれ？）

傘を避け横のほうから女性に手を伸ばした一護は「そっいえば」と今更ながら気がついた。

、何でこの人、傘持ってるんだ？

雨はさつき、突然降り出したのに。

不思議に思いつつも一護は伸ばした手を肩に置いた。

途端、電流のように足先から脳天まで激痛が走りぬける。

同時に頭の中で展開される数々の映像。

「・・・ッ

！！？」

それが何なのか見極める前に、一護は頭に襲ってきた痛みに耐え切れず。

声にならない悲鳴を上げ、意識を手放した。

グラリッ と。

何の前触れも無く河原に立っていた一護の身体は傾いた。

「一護っ！！？」

ルキアは草の生えた土手を一気に駆け下りる。側に膝をつき名を何度も呼んだ。

冷たい砂利の上に崩れ落ちた一護は目を固く閉じ、ピクリとも動かない。

血の気の引いた顔を目にすれば頭の中に反響する声。

『ごめんな・・・ きつかったろ』

違う。

ルキアは嫌な予感を頭から追い出すように唇を噛む。痛みが神経を伝い脳に届く。

それにほんの少し冷静な部分が生まれた。

一護は一護だ。あの人 海燕殿では無いのだ。

勝手に重ね合わせて不吉な想像をするのは止める。

大丈夫、助かる。助けてみせる。

「一護！？朽木さん、一護は！？」

「、大丈夫ですわ」

駆け寄ってきたたつきと織姫に笑いかけ、ルキアはスカートを掃いながら立ち上がる。

うまく、笑えているだろうか。

「実は一護君、病気がちでつい最近まで入院してらっしゃってたんですの。」

今日は退院祝いもかねておじ様のお家に足を伸ばしたのですが・

・

咄嗟に以前ドラマで言っていた台詞を引用する。

「そうだったの？」

たつきは目を見張り、織姫は一護の顔を心配そうに覗き込んだ。

「今、迎えを」

「迎えに来た」

突然響いた声に驚愕して三人は土手の上を見る。そこにいるのは銀髪の少年。

「ひ、日番谷隊長！？」

「た、隊長？」

ルキアの口から出た称号になじみの無い二人は顔を見合わせた。

日番谷がくいつと顎を動かすとスーツを着た幼馴染が「何で俺何スか・・・？」とぶつぶつ文句を言いながら降りてくる。

「恋次！？貴様まで何故・・・」

「みんな来てるわよ、朽木」

涼やかな声と一緒に乱菊が姿を見せた。こちらは最新流行の服を見事に着こなしている。

その後ろからシンプルなＴシャツを着、木刀を弄ぶ一角とこれまた個性的に服を着こなす弓親が隣に立つ。

「皆様・・・どうして・・・」

「ま、いろいろ心配でついてきちゃったのよ」

肩を竦める乱菊。恋次は一護を背負い、立ち上がる。

「おら、行くぞルキア」

「あ、ああ・・・。有沢さん、井上さん、今日は本当にお世話になりました」

「へ？いや、別に」

「わ、私たちも楽しかったよ・・・」

ルキアの言葉遣いの切り替えに驚きつつ、二人はルキアにつられ、深くお辞儀をした。

そのまま先に土手を上がった恋次の後を追う。

その足を止めたのは振り絞るように出された一言。

「ま、待って！！」

ルキアが斜面の途中で振り向くと織姫がまっすぐに見つめ返していた。

「ほ、本当に今日楽しかったから！だから、もし迷惑じゃなかったら、」

「また一緒に歩こうね！」

ルキアは予想外の事に言葉を失う。織姫の横からたつきも言った。

「いいね、それ。一護にも伝えといてよ」「今度はうまく笑えるようになったとけよ」「って」

次回があると信じて疑わぬ二人にルキアはやわらかい微笑をうかべた。

「はい、必ず」

拾漆 哀愁（後書き）

今回は少し暗めの話・・・と思ったんですが最後でちょっと変更。
いやー、私シリアスっぽい書けませんわ（断念）。

ところでついに名前ができましたオリキャラさん！

マリーとマールで迷い最後はコインの裏表で決定したマールさん！

マ「・・・何、その決め方」

黎「大変だったよ、いやホント」

ル「お取り込み中いい？」

黎「おや、ルベルゼさん」

ル「あたしもそんな感じで決められたの？てかあたしらのフルネームいつ出んのよ」

セ「・・・気になる」

黎「セロまできたの？」

ル「こ・た・え・な・さ・い（黒微笑）」

黎「・・・（冷や汗）ええ〜と。てきと・・・」

ル「殺ス」

セ「加勢する」

マ「私も」

黎「だあー！待って待ってジョーク！ルベルゼの方はイメージが先にできててそれにぴったりの名前を！マールは真咲さんに似た名前にしようと！」

セ「・・・俺は」

黎「・・・サラダの中の影の薄い野菜にちなんで」

ル「それ、セロリ？」

セ「・・・（無言で抜刀）」

黎「ふふふ、無駄だよ。君の帰刃はまだ名前を決めてないから解放は・・・」

セ「・・・普通に斬るだけなら・・・できる」

黎「へ、ストップ！降参！ぎ、ぎやあああ・・・」

ル「あの馬鹿」

一「あんな作者を見限らないでここまで読んでくれてサンキューな」
ル「あら一護ちゃん来てたの？」

一「おう。感想なんかあれば送ってやってくれ。いつも感激して泣きながら見てやがるから」

ル「それもなんか不気味・・・んじゃ、これからも応援よろしく」
マ「それじゃあ、また次回で」

拾八 揺心

誰、だ・・・？

『・・・』

笑って頭上から差し出される掌。「笑っている」と分かるのに顔が見えない。

『　　たり前じゃ・・・』

雨音がノイズのように女性の声を遮る。

碌に何を言っているのなんて分からない。けれど、一護は満面の笑みで迷わず手をとろうとする。体は他人のもののように勝手に動く。見えて認識はできるのに指一本干渉できない。映画を見る観客のような心地で一護は女性の手をとった。ぎゅ、と女性も手を強くしかし優しく握り返す。一護はまた笑い、ぶんぶんと繋がった手をはしゃいだ様に前後に振る。

その手は、普段の手よりもずっとずっと　小さかった。

敷布の上に寝かされた一護の顔は大分血の気を取り戻したものの、まだ青白い。

そっと起こさぬ様に音に注意して襖を閉めるとルキアはまっすぐ浦原の居るであろう部屋に直行する。そこに、彼は居た。

「・・・一護は大丈夫なのだな」

開口一番に確認をとるルキアの眼光はいつもよりも険しい。浦原は腰掛けるように目で促し、自分も座る。

「一応は、としか」

「一応、だと？」

噛み付くような口調でルキアは浦原の言った事を繰り返す。

「おいルキア、」

「恋次、すまぬが黙っていてくれ」

おそらくはなだめの言葉をかけようとした恋次を遮り、ルキアはピシヤリ　と言い渡す。

「どうということなのだ、一体」

「・・・見たところ体に異常はありませんでした」

「ならば何故　、」

「破面の健康な状態というものがどういう状態なのか、そもそもそこが分からないんすよ」

言われた事に忘れていた事実を思い出す。

一護は破面なのだ

「一応、アタシ達を基準に調べさせてもらった結果、異常はありませんでした。」

けれども、もしそれが異常だとしたら　、

ごくり、と唾を飲み込みルキアは口を開いた。

「・・・調べられるか？」

「手は尽くします。なに、破面っていったって本を正せば虚。虚なら昔、散々解剖と研究を　」

「するなよ・・・一護で」

ルキアに詰め寄られ、浦原は冷や汗をながしながら「しませんしません」と首を横に振る。

「ただ、昨日も義骸採寸の時に取らせていただいたデータを今度のもっと正確に採取させていただきますが・・・」

「むう・・・」

腕を組み唸る。が、こればかりは仕方が無い。

マッドサイエンティストに一護を委ねるのはいささか・・・というかなり避けたいのだが、腕は確かだ。

そう結論をだしたルキアは不承不承だが一護のことを浦原に頼んだ。

「なにアイツなんか情かけてやがんだ」

浦原が立ち去った後、部屋に残った恋次は咎めるような眼差しでルキアを一見する。

「・・・その「なんか」に本気で突っかかっていったのはどのどいつだ？」

昨日の恋次の行動を引き合いにだし、言い返す。

返答につまった恋次はももごとごねていたがルキアはとりあう事無く湯飲を持つ。

「・・・分かってんだろっな。アイツは」

「破面、だろう？」

よどみない回答など予想していなかったのか、恋次は面食らった顔をした。

「分かってたか。てつきり俺は忘れてんのかと思ったぜ」

「いや、忘れていたよ。先程、浦原が言わなければ思い出さなかった」

正直に告げ、煎茶に口をつける。朽木家で出るものよりは安物だった。

困惑したように眉を寄せ、赤髪をゆらし恋次は尋ねる。

「どうしたってんだよ、一体。まさか海燕さんとアイツを重ねてんじゃねーだろうっな？」

ルキアは答えず茶をすする。無言を肯定と受け取ったのか、恋次は大きくため息をついた。

「あのな、確かに顔はよく似てるさ。でもアイツは破面だ。どうせ本性は」

フッ ルキアは鼻から息を漏らすように小さく笑った。その反応に恋次は口をつむぐ。

「・・・最初はそう思っていた。「顔は似ているが、それだけだ」とな」

けれど、それだけではなかった。

「・・・信じられるか？あやつ、私と話し合うためと言って刀を捨てたのだぞ？」

初耳だ、と恋次の驚くあほ面を含み笑いをこぼしながらルキアは続ける。

「それに道が分からんと困った顔をして私に聞くのだ。「ここはどこだ」とな。

ペラペラと情報は流すし、呆れて心配してやれば「優しい」と言ってくるのだ」

まだあるぞ、とルキアは指をおる。

「歩いているとこちらに気を使って速度を合わせるし、はしゃいで子供のようなと思えばたまに妙に大人びて落ち着いておる」

ルキアはオレンジの少年を思いだす。ぶっきらぼうだが優しい彼を。・・・重ねていた。その性格まで似ていたのでな。

しかし、私はいつのまにか一護を「海燕殿」から隔離し「個人」として認識しはじめていたようだ」

それがはつきりしたのはついさっき。一護が何の前触れもなく倒れたとき。

初めて「一護は一護」とはつきり思った。「海燕殿とそっくりな破面」ではなくなった。

「・・・重ねてしまうよりも、まずい事をしてしまったようだ」重ねたなら、まだわりきれる。「あの人とは別人」と。

けれどルキアは「一護」という「個人」を認めてしまった。

「・・・ルキア」
静かに恋次は問いかける。彼に似合わぬ真剣な顔をして。

「・・・闘えるのか？」
誰と、とは言わない。ルキアは煎茶の入った湯呑の水面を見つめた。

「・・・分らない」
そこに映った自分の顔は、ゆらゆらとゆれていた。

「さて、と」

緑と白の線が交互に入る帽子を深くかぶりなおし、浦原は一護に布団をかけなおした。

左手には霊子採取器。その中身は一護の霊子だ。

掻いていた胡坐をとき立ち上がると研究室に向かう。

尸魂界にいたときよりも小さいが、設備は自分が作ったので決して引けはとらないだろう。

所狭しと置かれた機械の間を抜ける。他の機械には目もくれず、隅に置かれた一台の機械にたどり着くとスイッチをいれ霊子採取器をセツト。

ブウウン・・・と青い光と共にモニターが光り、機械が作動。

カチカチとパスワードを打ち込むと浦原は表示された数字と文字を見つめる。

下に画面をスクロールさせ忙しなく視線を動かす。と、その動きがある一点で止まった。

「・・・これは・・・」

浦原はしばらく驚きのあまり言葉を失った。が、すぐにキーボードを叩きだす。

静寂の研究室にキーボードの叩かれる音だけがやけに大きく響く。

その音が　止む。

「やはり・・・」

小さく呟くと浦原は画面の情報を脳に叩き込むように読み返した。

そしてモニターに出されたデータの全てをどこにも保存することなく消去。

問題はない。そこに書かれていた全ては浦原の頭の中に入っていた。ゆつくりと懷から携帯電話を取り出す。履歴に入っていた番号を

選択。

数回のコールのあと、相手はでた。

「どーも。お元気ですか？」

へらり　と向こうには見えないのに気の抜けた笑みをたたえ浦原はあいさつを口にした。

「・・・xxxxxxxx」

「そりゃ、確かに昨日電話したばかりですけど。社交辞令つてもんすよ」

「xxxx、xxxxxxxxxxxxx？」

「ええ、まあ。予想外に早く確かめられる機会が早くにあったものですから」

浦原は帽子の影に隠された色素の薄い灰色の瞳が鋭く細められる。

「間違いありません。ご本人っすよ。正真正銘の、ね」

広がる曇天。落ちる雨。

一護はぼんやりとした頭で思った。

・・・いつのまに寝てたんだ？

硬いものが体の下にあるようで、痛くて仕方が無い。体の位置を変えようと方を動かしたところ、ザリツ　と小石と砂利らしきものの音が聞こえる。

体が　重い。起き上がる事ができない。まるで何かがのっかっているように。

その時、初めて体にかかる重みに気がついた。視線を下ろせば明るい茶髪が視界いっぱいに広がっていた。

「xxxx、」

自分がその女性の事をなんと呼ぼうとしたのか。声は自分の口からでたというのに聞き取れず、また最後まで言われる事も無かった。

体を起こした瞬間、女性の背中に滲む赤が目飛び込んできた。

嘘、だ。嘘嘘嘘ウソウソウソウそうそうそうそだ！

現実が信じられず、女性の体を揺する腕からだんだん雨に打たれ、冷たくなっていく女性の体温が伝わってくる。

ああ、これではまるであの時の、マーラの時のよう。何もできなかったあの時のまま。

一護はカタカタと震える手にべっとりとついた朱に息を呑む。雨が手に落ちるが朱は落ちない。頬を滑り落ちる雫は雨か涙か。庇われた。護られた。死なせた。俺が、

コ
ロ
シ
タ。

ウオオオオオオオオオオオオオオオオ・・・

一声の雄叫び。滲んだ視界に入ってくる毛深い虚。頭の前に垂らされた竿にはおかつぱ頭の少女がこちらを見下していた。

残忍な笑み。虚圏で散々見てきた。これは、絶対優位の捕食者の目。

ゆっくりとこちらに狙いを定め、あげられる尖った触手。

呆然と冷たくなっていく女性の体を抱きすくめる一護になす術は無く。

振り下ろされた、と思ったと同時に腹に走る灼熱の痛み。そして全てが暗転した。

ザーザーと雨の音。

罪を償え、と。罪を忘れるな、と。

今もなお降り続く。

拾八 揺心（後書き）

お久しぶりです。テストが近くなってきたのに、何やってんだ私・

ル「ホント馬鹿よね」

セ「・・・馬鹿」

朽「たわけめ」

黎「うおう、ルキア！？何故ここに？」

朽「どうでもよいだろう。まったく私でさえテスト前は勉強したぞ？」

黎「え、でも前日まで忘れてて一夜漬けでしょ？そんな人にとやかく言われたくない」

朽「き、貴様何故それを！？さては一護からか！」

一「いや、夜明けシリーズでは俺がばらしたってありえなくねえか？」

朽「原作での話だっ！」

一「理不尽だろ！文句なら原作の俺に言え！」

ル「もしもしお二人さん。ここでそういう話、やめてくんない？」

ええ〜と、サブタイトルの読み方は「揺れる心」。

え、「そのまんますぎる」？いまさらでしょう！

ル「胸張ってどうすんのよ・・・」

一「なんだか開き直りってスキルをこの間覚えたらしい」

朽「・・・なんだそれは」

セ「駄目な奴だ」

そこ、聞こえてんぞ！出番へらしてやる！

と、こんなダメダメなドのつく馬鹿の作品を読んで下さってありがとうございます。テストやらなんやらで更新のスピードは落ちるかもですが応援よろしくお願いします。

つきましては、コメント・感想などを下さるとはげみになります。

「しょーがねーな。書いてやっか ッチ」ぐらいの気持ちで結構です。

皆様の温かい心でこの馬鹿を見守ってやってください。

拾玖 追想

体が上へ押し上げられていくような感覚。だんだんと暗闇から遠ざかり意識が浮上していく。

一護は重い瞼をこじ開けた。

天井はくすんだ木。どうやら浦原商店に運び込まれたらしい。迷惑をかけてしまったようだ。はやく起きなければ。

一護は布団の中から抜け出そうと小さく身じろぎした。が、わずかに動いたものの布団は依然として一護の上にとっている。義骸がそれとも体調のせいかは知らないが体がだるくて仕方ない。ならば布団をどかさうと右手を上げ

真っ赤に染まる掌

「あ……」

一気に思い出す。今まで見ていた「夢」の事を。

そう、「夢」のはずなのに。

「なんで……」

夢から覚めてもなお思い出せる。あの、生々しく手を滑り落ちる緋色の感触。

今でも手にこびりついていると錯覚するほどに現実味をおびていた。見たことも無い女性が自分を庇ったせいで――

『見たことも無い』？

自分で思ったその言葉に違和感を覚える。間違っではない、はずなのに。

「くそ……」

瞼の裏で今もなお靡く鮮やかな茶髪。耳を澄ませば聞こえてきそうな雨音。

「なんだってんだよ・・・」

「なにがだ？」

一人呻く様な問いに問いで返す声。驚いて瞼を開ければ襖を音も無く開いたルキアが横たわる一護を見下ろしていた。

「何時の間にいたんだ？」

「貴様が呻き始める少し前にな。それより大丈夫か？」

「ああ、別に」

平気、と上体を起こそうと再び腕に力を込めたが体を持ち上げるのが正直辛い。

それを察したのか、ルキアは「寝ている」と一護の肩を押しとどめた。そして脇に腰を落とす。一護の顔色を見、「大分よくなったな」と安堵からのかすかな吐息をもらす。

「一体急にどうしたというのだ？持病でももっていたのか」

「いや、破面が持病って」

「では、貧血」

「それもないだろ」

「では、まさかの立ちくらみか！？」

「ずっと立ってただろーがっ！！」

体のたるさも忘れて思わず大声でつつこむ。

ルキアは満足そうに大仰に頷いた。

「うむ、それだけ声が出せれば問題あるまい」

・・・いや、もうちょい普通の確かめ方とかあるだろう？

呆れはててもものも言えず、一護は枕に頭を深く沈めた。

「で、冗談はさておき。どうしたのだ？体調が悪かったのならそう言えば」

「いや。本当にあそこに行くまでなんともしなかったんだよな。むしろいいぐらいだったし」

いきなり倒れるなんて経験は今まで一度もした事が無かった、と言

えばルキアは首を傾げる。

「なら、原因はなんだったというのだ？」

顎に手をおきながらルキアは考え込む。一護はしばらく無言で手をつぐつぱつぐつぱと繰り返して開閉させていたが、その動作がなめらかになってきたところで声を発した。

「・・・いや、別にそんなに深刻に考えねーでもいいんじゃないか？
ほら、もうだいたい動けるようになってきたし」

「何を言っている莫迦者」

一護の言葉をルキアは一刀両断に斬り捨てる。いつそ見事と賞賛してしまいたくなるほどの即答だ。

「貴様の無様に倒れこんだ理由が分からなければ、そのうち愚かな貴様は同じ過ちを起こし、その度に私達はお前を引きずって帰らなければならんかもしれんのだぞ？」

「迷惑かけたのは悪いと思ってるけどよ・・・。無様だの愚かだのいらねえ修飾語多すぎねえか？」

「これぐらい当然だたわけめ」

「・・・そうですか」

投げやりに会話を断ち、一護は肺の中の空気を全て追い出すかというほど深くため息をついた。

「・・・変な、夢を見た」

「変な夢？」

ルキアが怪訝そうに一護の顔を見つめる。一護は返答もせず、ただ一人呟くように話した。

「知らない女の人と笑いながら歩いていて・・・傘さして、雨の中ずうと・・・」

「雨」という単語に心なしかルキアの片眉がぴくりとはねた気がした。

が、今の一護にそれを覚る余裕は無く、ただ天井に視線を彷徨わせていた。

「笑ってた・・・その人楽しそうで、俺も何でか子供になってたし、

その人の事知らなかったけど楽しくて笑って・・・」

ごくり、と乾いた喉に唾を無理やり押し通す。

「それで、その人は俺を庇って死ぬんだ」

顔を見ずともルキアが絶句しているのが分かる。一護は今一度自分の掌を見る。

「何が起ったのか分からなかった。信じられなくて、体揺すぶつて、でもどんどん冷たくなっていつて……。でも、近くに虚がいた。俺もそいつにさされて、」

「・・・一護、それは夢だ。現実と混合するな」

ルキアが一護を気遣って、その話を止めようとする。

一護は力なく首を枕の上で横に動かした。

「・・・これは、確かに「夢」だ。でも、「現実」でも似たような事があった」

血塗れ 土砂降り 後悔

「・・・きつと忘れてないか確かめに来たんだ、アイツ」

あまりにも、一護が幸せそうにしてたから。アイツはおおざっぱで底抜けに明るいくせに妙に寂しがりやだったから。

馬鹿だ。

「忘れられるわけ、無いだろーがっ・・・」

自分に向けて嘲りの笑みをうかべる。一護は訳の分からない、といった顔をしたルキアに語りだす。神に向ける懺悔のように。

死神なら、亡き者にも思いは届けてくれるのか？

そんな馬鹿げた事を半ば本気で思いながら。

ああ、気が重い。まだ成長が初期段階の小さい体でオレンジの髪を揺らしながら足をまた一歩だす。何時も背負っている身の丈を越える大刀を数十本余計に担いだとしてもここまで足の速度は遅くないだろう。のろのろと歩く、という言葉さえ遅すぎて最早不適切。今の一護のスピードは蝸牛と対等なかけっこができるほどだ。

それでも進み行けば目的地が見えてくるのは当然の理。この廊下を渡りきれば、そこはもう第七十刃サマのテリトリー。

三步進んで二歩下がる。ここまで来ていいかげん往生際が悪いと自分でも思っている。

思っているのだが、なかなか実践に移せないというのもこれまた人間・・・もとい破面の性であろう。

しかし、そんな無駄な抵抗もついに終焉を迎えることとなった。

背後からの快活な笑い声によって。

「にじしししし！そーんなに嫌なの、あたしの従属官は。ねえ一護？」

鈴をころころと転がすような声。一護は眉間によりいつそう皺をよせ振り向いた。

「こらこら、可愛い顔が台無しよ？」

サファイアブルーの瞳が悪戯つ子のようにきらきら光る。

くせつ毛でカールしがちな亜麻色の髪。カチューシャのような仮面の欠片。

服の上からも十分分かる大きな乳房の輪郭。

胸元を黒い上質なレースが飾り立て、袖も途中から入るスリットから黒のレースがふんだんにあしらわれている。裾にもこれでもか、というほどにつけられているレースの色は黒。

きめ細かな肌。しかし額には聖痕のように十字が連なり刻まれている。

以上が第七十刃サマ　もとい、今日から一護が仕える事となった主、マール・クオドメルの容姿である。

出会いは唐突。さらさらと手ごたえの無い砂を掘っている時であった。急に聞き覚えのない声がかけられたのは。

「なにしてるの？」

一護は振り返りもせず一言。

「墓」

「誰の？」

「・・・ダチ」

傍らの白い仮面のあぎとが風でカタカタと音をたてた。

「お名前は？」

「・・・ネイティ・フエグラン。大虚^{メノス}の森に落ちて・・・」

歯が数本足りない仮面の残りを撫で、一護は白砂をまた一かき掘る。周りの砂がさらさらとこぼれ、欠落は埋められていく。乾燥した砂漠を今日ほど疎ましく思ったことは無い。

「あー、違う違う。貴方のお名前よ」

「・・・俺？」

一護は予想外の言葉に手を休め、後ろに立つ声の主を見上げた。そこには美しい女性が立っていた。白い装束を纏っている以上、仲間という事は分かるが見たことの無い顔だ。

天蓋に広がる青空よりもなお青い瞳をまっすぐ一護にむけ、女性は繰り返す。

「「貴方のお名前」。聞かせてくれないかな？」

「・・・一護、だ」

童をあやす様な言い方に多少眉を顰めたが簡潔に名を告げ、再び砂に手を突っ込む。

これ以上はもう関わるな、という一護なりの意思表示だった。のだが、女性は一護が返答した事が嬉しいらしくさも当然といった風に隣に腰掛けた。

「私はマール。マール・クオドメル。よろしくね」

よろしくするつもりは無い一護は黙っている。

マールはたいしてがっかりした様子も見せない。

「ね、一護。一護って強いつて同僚から聞いた事あるんだけど」

はあ しれず一護の口からため息が漏れる。

「んな事ねえ」

「あら、前に天下の十刃様から剣で一本とったって聞いたわよ？」

「ヤミーはでかいから懷に潜り込みやすかったただけだ。それに一本

といつても切つ先が服を掠つたぐらいで」

「十分すごいじゃない」

くすくすとマールは笑みをこぼす。

「十刃の従属官になつたりとかしないの？そんな話ぐらいいくつかきてるでしょ？」

「・・・ならない」

言葉少なく拒否をしめた一護にマールは おや？ と首を傾げた。

「どうして？私はそういうのあんまり気にしないんだけど、普通名誉なんてものじゃないでしょ？贅沢しまくりよ」

「・・・だつて、従属官は「十刃サマ」を護らないといけない」

文字通り従属し、服従し、追従し、盾となり刃とならなければならぬ。それはヤだ。

「俺は・・・十刃サマ一人を護る気なんてさらさら無い。つか、もともとお強い十刃サマに護衛なんていらねーだろ」

相も変わらず手ごたえの無い砂を掘り進めているとマールが ひよいつ と立ち上がった。

そのまま響転で何処かへ消える。その場には一護と形見の仮面が残つた。

ようやつと興味を無くしたか、と一護は吐息を一つ吐き出す。

そして再び作業を進めようと砂まみれの手をさらに下に突っ込んだとき、ザパンツ と水が頭上から降る。水気の無い砂地は素早く降り注いだ水を吸収。数秒も待たずして、そこに水が一時とはいえ在ったという証拠は濃い色に変わりじつとりと湿った砂地のみとなった。

「どう？この方が掘りやすいでしょう？」

マールは手に持っていたバケツを放り出すとしゃがみこみ、白い手が汚れるのも厭わず掘り出した。

「ほら、なにしているの？早くネイティを休ませてあげないと」

彼女に同意をしめすようにネイティの仮面の歯が風でかみ合わさり、カチカチと音を立てる。

一護は一拍遅れて大分掘り易くなった砂に手をつけた。

「ねえ、一護。貴方言ったわよね「十刃サマに護衛はいらないだろ」って」

黙々と穴を深くしていく最中、マールがそんな事を蒸し返す。

「ああ、言った」

事実なので一護は肯定する。

「それね、違うと思う」

マールはほんのすこし手を止めた。

「十刃は強いから周りから敬遠されちゃうでしょ？従属官はいわばすぐそばで一緒にいてくれる相棒みたいな感じなんじゃないかな」

人は群れる生き物だ。それは虚になっても同じ。虚は互いを喰らい大虚となり、大虚は一所に集合し中級大虚はそれを統率したが、さらにその上では最上級大虚が力でもって君臨する。そんな歪なピラミッドが虚圏では成立しているのだ。

これは破面になろうと変わることは無い。そうマールは言いたいのだと一護は悟った。

「変わった考え方するな、アンタ」

「だって、寂しいじゃない。一人は」

てへ と舌を出す様が妙に様になっていて一護は墓作りの最中だというのに不謹慎にも笑ってしまった。

今、一護は不機嫌だ。そこらの大虚なら身の危機を感じ取り、とばっちりを受けぬようそくさ逃げていくだろう。が、破面のなかでも十本の指に入る実力者は涼しい顔をしてそこに立っていた。

「まさかテメエがその十刃サマだったとはな・・・」

「でも逃げずに来てくれたのね。うれしいわ」

「・・・それ、本気で言ってるのか」

「ええ、もちろん」

につこりと百点満点の太鼓判が押されるぐらいの笑顔。それを見目

麗しいマーラがやるのだから異性は当然、同性とて赤面ものだ。しかし一護は怒りの剣幕でその満面の笑みを睨みつけた。

「そりゃあ、部屋に帰ったら荷物が全部運び出されてて、「貴方の荷物は預かった！B Y破面？7マーラ」なんてメモが置いてあつちやな」

それを行つた当の張本人は今、目の前でにまにまと笑っていた。

「人質ならぬ荷物質つてね。さあさあ、私の従属官になってくれるかな？」

「断る！」

「そこは、「いいとも」！」でしょうよ」

頬を膨らませながらマーラはどこから取り出し何故かかけていたサングラスを外した。

「とにかく俺の荷物返せ」

「あ、貴方の部屋だけど、新しい破面に譲るよう藍染様に言つたから」

「はあ！？」

一護はあんぐりと口を開いた。寝耳に水とはまさにこの事だ。

「新しい部屋はこの宮の中よ。で、ここに居候したければ・・・分かつてるわよね？」

十刃と共に暮らすのは供たる従属官のみ。例外は認められない。

完全に退路を断たれた、と一護は眉間の皺を深める。

そんな一護の視線を知って知らずかマーラは暢気に　ぐうつ　と伸びをした。

「今日はいいい天気ね」

「・・・そーだな。（てか天蓋の下でいい天気以外ありえないんだけど）」

「明日も晴れるらしいわ」

「・・・そーだろな（ここで雨なんてふるわけねーし）」

「さてさて、私の従属官になってくれるかな？」

「・・・はあ」

今世紀の幸せが全て逃げていきそうなほど深く、深く一護はため息をついた。

「・・・何というか、パワフルな方だな」

なんともまあ、はっちゃめちゃで傍若無人な方だ、という感想はとも言えず、ルキアは控え目にそう言った。

「はっちゃめちゃで傍若無人なヤツだよ」

そんなルキアの心を読み取ったかのように一護は苦笑した。

一護がマールに抱いた第一印象そのまんま。なので言い当てるのは簡単だ。

「でも、悪い奴じゃなかった」

目的を果たす為なら少々強引な手も使うが、暴力で訴えてきた事は一度としてなかった。いつも見せる笑みは邪気が無く、自分と同じように争いを極力嫌う珍しい破面だった。

「・・・好人、なのだな」

「ああ」

そう、好人『だった』。

最期のその瞬間まで。

拾玖 追想（後書き）

長いかな・・・読みきった人、本当にすごい。
一気に書いたらこれ以上長くなるので分けました。
コメントお待ちしております！

貳拾 信用（前書き）

今回はずっと追想編です。

貳拾 信用

「いちそうにまでした」

手を合わせ、白い皿にナイフとフォークを三時から六時の方向に置く。

以前のルームメイトが礼儀にうるさかったので、最低限のテーブルマナーはもう癖のように当たり前にしている。

今の同居者とは大違いだ。

ガタンツ

噂をすれば起きてきた。もう朝が終わりかけの時間帯だというのに彼女も自分と同じく魂魄を食べるのに非常に抵抗があるらしく食物を摂取する。

もう作るのも面倒だし、残りものでいいか　と思案し一護は皿を持って立ち上がった。

テーブルから幾許も歩かないうちに部屋の入り口から爆発したような亜麻色の髪を振り乱し、マーラが駆け込んでくる。

「おっはよおおおおお！！」

ここ数日で学んだとおり、一護は頭を下げ屈みこんだ。その真上を一護にじゃれつこうとしたマーラが通り過ぎる。

「きやあああああ！？なんでよけるのよー！？」

純白の硬質な床をかかとで擦りながらブレーキをかけ、マールはく
るりと一護の方に振り向く。その顔には不満がありありとでていた。

「最初は黙って抱きつかせてくれたのに……！」

「そこから学習したんだよ」

何も知らなかった同居初日。ダンプカーが衝突したかと勘違いする勢いで抱きついてきたマールに一護はなすすべなく昏倒した。

それ以来、毎朝あいさつと共に受けていれば、自然と対処法も身についてくる。

「と、ほら一護返事は？」

「・・・おはよう」

につこりと微笑まれ、一護はため息交じりに朝の挨拶を口にした。

マーラの従属官に不本意ながらもなつて数日。色々と彼女の性格やら生活態度やらが見えてきた。

その一つがこれだ。一護は本を読みながら視線だけ食卓につくマ
ーラに向けた。

「ん？ふおうふいふあお？」

「・・・食つか喋るかどっちかにしろ」

こちらの視線に気づき、顔を料理から上げたマーラにそう言い渡す。
その途端口と皿の間を往復する手のスピードが格段にあがった。

どうやら食べるほうを選択したらしい。

容姿はかなり良いほうだというのにこの食べっぷりで幻滅した者も
少なからずいるだろう。

すでにマーラの傍らには空となった皿が積み上げられていた。
しかもテーブルマナーなんて知ったこっちゃねえと言わんばかりの
食いっぷり。

ハムスターのごとく頬を膨らませて詰め込めるだけ口に食物を詰め
ている。

そうこう観察しているうちにマーラは皿の上の料理をたいらげ飲
み込んだ。

「それで？どうしたのよ」

「・・・よく食うな、っただけだ」

「あら、霊圧の大きな者はその分食べないとダメなのよ？一護も知
っているでしょ、そんな初歩的なこと」

「知ってるけどよ・・・魂魄喰えばこんなに食べなくてもいいんだ
ろ？何で摂取しようとしらないんだ」

「一護だつてそうでしょう」

「俺はしたくないし、そもそもできねーんだよ」

「私だつてしたくないのよ、そんなこと」

幾つもの皿の山を一つに重ねながらマールは言った。

莫大な力を持ち、破面達の憧れの地位に立つ者としては想像できない台詞だ。

「悲鳴を上げて泣きながら逃げようとする魂魄を貪るなんて・・・食欲一気になえそうだわ」

「そんな事言つてるとその内、十刃落ち（プリバロン・エスパード）に落とされるぞ」

「あゝら。その時は一護、貴方が従属官に拾ってちょうだいな」

くすくすと笑いながら軽口を叩くマールに一護はとりあえず手元にあったファンシーなクッションを投げつけた。

第七十刃宮の屋上。広がる天蓋の青空の下でマールは白の僧侶を手を取った。

「ほら、ナイトゲット」

黒のマスに居た黒のナイトを白のビショップが追い出す。マールはそれを手に取るとチェス盤から退場させた。

「随分と安易な駒の動かし方じゃない？」

白の支配者は不適に笑う。黒の幼きプレイヤーはそんな挑発に耳を傾けることなく漆黒の砦を前進させた。重厚な城は勝利に浸る僧侶をいとも簡単に弾き飛ばす。

「安易なのはそっちだろーが」

一護は呆れた風情で事切れたように横になるビショップを手元に回収した。

「ああー！！いつの間にルークがそんなところに！？」

「さっきからずっと」

ナイトを取るのに夢中になっていたあまりマールはルークの事など眼中になかったらしい。

「うううう・・・この恨み、晴らさずでおくべきかー！！」

白のポーンをルークの斜め前に進められる。

ここは張り合っても意味がない。一護は逃げるが勝ちといわんばか

りにルークを横に動かすと、マールも深追いはせず、別の兵士を進ませた。

「なあ・・・」

「ん？」

「なんで外でこのちえ・・・？」

「チエスよチエス。現世のゲーム」

「それは分かってる。なんで外でこれをやる必要があんだよ？」

風はもちろん、雨が降ることなどありえない天蓋の下では天気は常に晴天。

別に何時でも何でも外でできるのだ。何せ天候は必ず完璧なのだから。

だからこそ分らない。わざわざ外で遊戯盤を持ち出すわけが。何かを愛でるわけでもなく、何かを気にかけるわけでもなく。

これなら室内でやったところで変わりは無いと一護は思ったのだがチツチツチツと立てた人差し指を左右にふりマールは口角を上げる。

どうやら彼女なりの考えがあつたらしい。

「気分よ」

・・・訂正。まったく何も考えていなかった。

一護は眉間にしわを寄せながらビショッ普を斜めに滑らせるように移動させる。

「まったく・・・お前の気分に関係を付き合わせるなよ」

「あら、私は一護と一緒に外に居たい気分だったのよ？」

付き合ってもらって当然でしょうと腕を組まんばかりの物言いは流石の一護も頭を押さえる。

マールは上機嫌に鼻歌を歌いながら一護の陣地に白騎馬を進めた。

「それにね、ちょっとうれしいことがあって空が見えたかったの」

「うれしいこと？」

「そ。今度ね、現世にいける事になったのよ。任務でだけどね」

「・・・ふうん」

「なに、どうしたのふてくされた顔して。あ、さては羨ましいんでしょう」

「・・・」

「お？お？さては凶星ね？」

頑なに口を閉ざす一護の表情を見てマールは面白いものを見たばかりに口元を押さえる。

舌打ちをしたいのを唇を噛んで耐え、その代わりに思いの丈をぶつけんばかりの勢いでルークを白のマス目に叩き落す様に置いた。

一護は現世に行ったことが無い。まあ、霊力が強いとはいえまだ成長段階。将来有望な若者が万が一にも死んでしまえば藍染としても少々は惜しいのだろう。

しかし正直、一護にとつてはものたりない。同期は捨て駒とはいえ現世に行けるというのに何故自分だけ行つてはならないというのだろうか。

あんの腹黒狸は『まだ時期ではないからね』と訳の分からない事を言つて笑うだけ。

「現世」とは一護にとつて夢幻。話にしか聞かない、実態がつかめない幻想郷の様な物だ。

行きたい。行つてみたい。

「・・・俺も一緒に行つちゃダメか？」

黒の兵士を盤から取り除きながらマールは小首を傾げる。

「何処へ？」

「現世」

いつも快活に笑うマールの顔が曇った。

「ううーん・・・」

「何か問題があんのか？」

次の一手を下す事も忘れ、一護はマールを見つめた。

「いや、その・・・藍染様のお許しができれば・・・」

「何でだよ。アンタが居るんだ、万が一どこるか億が一にも危険なんでないだろ。」

足手まといになるかがそんなに心配か」

苛立つ一護の声にマールは必死に首を振る。

「ち、違っわ！でも貴方を連れ出すには藍染様の許可がかたくなに藍染の名をだすマールに腹が立つ。」

「なんで一破面の事に総大将が口出しすんだっ！？」

いきなり上がった一護の霊圧にカタカタと黒白の駒が震えだす。

マールは何も言わず一護を見つめ返す。

「・・・答えてくれ。何で俺の事で藍染の許可がいる？」

「・・・」

「・・・俺は、アンタの従属官だ。（不本意ながらも、だが）よほどの事がないかぎりアンタの好きにしていはいはずだろ。それが何で

「
そこまで言って ビクリッ 肩の震えたマールに一護は目を見開いた。

まさか。

「まさか、俺を従属官にしたのは・・・」

アイツの命令だから・・・か？

マールはそこで初めて一護の追求から逃れるように俯いた。

その行動は、質問の肯定だった。

「　　っ、もういい！！勝手に独りで行っとけ！！！」

「ま、待って一護っ！！」

焦ったように呼び止める声にも振り向かず、その場を響転で立ち去った。

高速で変わっていく視界が、涙で滲んでよく見えなかった。

響転の使いすぎでだるくなった足を止めると、その場は見覚えのない廊下だった。

まだ十刃の宮が隣接する区域のつくりを知らない一護は実質迷子だ。

ぺたん と壁伝いに膝を抱えて座り込む。

荒くなった呼気を徐々に落ち着けながらもその合間に嗚咽がまじる。

『なにしてるの？』

数日前のことなので酷く鮮明に思い出せる。今は色褪せていてくれた方がありがたいというのに。

『あー、違う違う。貴方のお名前よ』

ネイティ以外に初めて名前を聞いてくれた。

『どう？この方が掘りやすいでしょう？』

手伝ってくれた。優しかった。

『だって寂しいじゃない、一人は』

ああ、そうだな。独りは寂しい。

一護は縋る様に自分の両腕を抱きしめる。壁にくっつけた背中がいやに冷たい。

信じてた、んだろうな・・・。

自分の気持ちを客観的にそう結論付ける。

はちやめちやでパワフルで傍若無人で寝ばすけで。

優しくって強くて、でも本当は寂しがりや。

魂魄を喰う事を嫌う所も実は戦いが嫌いな所も一護と同じだった。初めて見つけた同属。

壁一枚隔てて寝ても刀を抱いて寝ないと安心できないなんて一度も思わなかった。

信じてた。間違いなく。でも、今はどうなんだろう。

一護を本心から傍に居て欲しいと願って従属官にしたと信じたい。
でも、あの反応からして、かなりの確率で違うと分かる。

命令だから、だったのか・・・？

あの笑顔も。優しさも。全部藍染の命令があつたからこそ一護に向けていたのだろうか。

「・・・バツカみてえ」

マールは悪くない。藍染の命とあらば、十刃といえど逆らえない。
きっとその中でも最高の待遇をしてくれたのだろう。

マールは悪くない。一護が勝手に信用しただけ。

だというのに。

「なんでこんなに・・・！」

爪を立てるのもいとわず、胸の前で強く手を握り合わせる。ずきずきと胸が痛い。

皆の様に心が無くなって欲しいと思ったのはこれが初めてだった。

コツツ コツツ コツツ

一護は赤くなった目を擦った。誰のものは分からないが、足音が近づいてくる。

ちょうどいい。道を聞こう。

そうして、昔の部屋に戻ろう。荷物はもういい。それよりも、もう会わないように。

コツツ コツンツ

目の前で足音が止まった。ゆっくりと腫れぼったくなった臉をこじ開け、顔を上げる。

そこにはー、

「探したわよ」

今、最も会いたくなかった破面が立っていた。

「なん、で・・・？」

「あのね、貴方はその垂れ流しの霊圧を何とかしたほうがいいわ。
辿りやすいつたらありゃしない」

手間のかかる子供を見る目でマールは一護を見下ろす。けれど、一護の聞きたかった事はそんなじゃない。

「なんで、探しにきたんだよ……？」

「当たり前じゃない。貴方は私の従属官で」

「藍染サマの命令で、だろ？」

（違う）

一護は自己嫌悪に顔を歪めた。

こんな棘のある言い方をしたいんじゃない。本当はありがとって言いたいはずなのに。

気を悪くしてしまったか、とマールの顔を伺うが彼女は怒気に頬を染め上げも見下してもいない。ただ、ほんの少し申し訳なさそうな表情で。しかし、しっかりと一護を見つめていた。

「貴方を従属官にしたのは、命令だった。そこは認めるわ」

マールは静かに話を始める。一護は視線を床にさまよわせながら小さな声で言う。

「分かってる。別にアンタが悪いんじゃない。だからもう俺のことは」

「ほつつておかないわよ」

マールは膝を折り一護の眼前にしゃがみこむ。

「私言わなかったかしら？ 従属官は十刃にとっては相棒なんだって。私は少なくともそう思ってる。でも。いいえ、だからこそ。」

信用の置けると判断した相手じゃなきゃ、絶対に傍におかないっ」
初めて聞くマールの必死な声。一護は ぱちり と瞬きした。

「命令でも、か……？」

「命令だろうとなんだだろうと気に入らなかったり気があわなそうになかったらそつこく追い出してるわ」

ぽんぽん と跳ねているオレンジの髪を撫でながらマールは微笑んだ。

「一緒に居てよ。私、寂しいのダメなの」

一緒に居てよ。

その言葉に壊れた螺旋巻き人形のようにコクコクと頷いた。
頬を滑る雫がさきほどよりうっとうしくはない。

屈折し歪んだ視界の中で蒼穹よりも深みのある青から自分と同じように涙が流されている事を知った。

「信じてた」じゃない。 「信じる」よ。

明日も明後日もその先も。ずっとずっと。

貳拾 信用（後書き）

お久しぶりです。遅くなってすみません。

実はデータが書いてる途中で全部飛んでしまいまして、余りのショックにしばらく立ち上がれなかったしでございました。

これから本格的にテスト期間なのでしばらく更新できないと思います。

コメントや感想にすぐにお返事できませんが「それでもくれてやる」というお優しい方はぜひコメントをお願いします。

貳拾壹 日常（前書き）

万歳！テスト終了しました！（結果は多分ボロボロ）更新再開します！！

貳拾壹 日常

「吐き気がするわ」

眼下に広がる光景にマールが心底嫌そうに吐き捨てる。

それには一護も同感だった。足元の下では同族が喰らいあい、傷つけあい、殺しあっていた。助けにいかないよう厳しく言われていなければ今すぐ飛び降りて全員気絶させて回るというのに。

「ほんと、悪趣味ね」

マールは視線を斜め上に持ち上げた。呼び集めた十刃のさらに上に座す男。

仏のような穏やかな微笑をたたえ高き所から見下ろす全ての破面の創造者・藍染惣右介。

「いくら新しい十刃候補を絞り込むためであっても、有力な破面全部を戦わせる事はないでしょうに・・・」

生き残れば天国。負ければ死か、生き残っても捨て駒のレッテルが貼られる。

もともと一護はずば抜けて霊圧が高かったためこの選定は免れたが、そうでない者なら必ず通る地獄の試練だ。

「・・・マールもこれをやったのか」

「まあね。でももつと少なかったわ。それでもその日は眠れなかったけど」

肩をすくめマールは下の後輩達を見る。一護も同様に広がる地獄絵図を見た。

「ここから這い登るのは誰なのだろう、と思いつながら。」

「こういうのってやよね」

マールは自分の過去を思い出したのか声に重い響きがある。

「貴方もそう思うでしょう?」

「・・・ああ」

血を流し倒れた名も知らぬ破面に黙祷をささげながら一護は深く頷

いた。

さくさくさく 白い砂の上をマール宮の方向に歩く。

「あー、気分悪い。だるい。かつたるい。足痛い。お腹すいた」

「最後の二つは関係ねえんじゃないか？」

「ずっと立ってたのよ？お腹と背中がくっつきそう」

「あの後でよく食えるな。俺、今日は昼飯いらねーや」

「にしし、それなら今日は一護の分も食べれるのね。楽しみだわ」

「やっぱ食う」

慌ててそう言い直せば、マールはにっこりと微笑った。

「そうそう。ちゃんと食べなきゃ。大きくなれないわよ？」

「余計なお世話だっ」

そう怒鳴りながら一護は思った。

もしかして、俺に食べさせるためにわざとあんな事を言ったのか・
・・・？

「でもそれじゃ一護の分、食べられないわね・・・・。いつもより
多く作ってくれない？」

前言撤回。どうやら本当にお腹がすいていた様だ。

「ねえ、「光」って知ってる？」

食事中にいきなり問われ一護は目をぱちくりと瞬かせる。フォーク
に刺さり、口に運ばれようとしていた芋が ぼとり と皿に落下し
た。

「急に何だよ」

「いいから。知ってるの？知らないの？」

「知ってるぜ。例えば今そこに置いてあるランプはその光をとす
道具だ」

なにを当たり前のことを。

そんな顔をして言えば、マールは苦笑をこぼす。

「それが灯すのは明かりよ」

「一緒だろ」

「違うのよね、それが」

ミディアムのステーキを切りマールは一口で大きな肉の塊を飲み込む。

「言い方が少し悪かったわね。じゃあ、「太陽の光」はどう？」

「・・・お前は記憶能力って物がまるでねえって事は今分かった」
一護は無然とした口調で言い返す。

以前、現世に行った事がないと一護がマールに突っかかっていて疎遠になりかけた事は彼女のおめでたい頭の中には既に片隅に押しやられているらしい。

いや、片隅にも存在しているか、はたして怪しいものである。

ともかく、現世に行ったことが無いのだから太陽なんぞもってのほかだ。

「その言い方からすると無いみたいね。いい？光はね、きれいできらきらしてて、あったかい気持ちになれるのよ」

「・・・はあ」

「見ていて本当に感動するの」

「ほお」

「楽しみよねえ、現世に行くの」

「オメエなにげに性格悪いな。俺が行きたくても行けねえ事、知ってんだろうが」

不機嫌気味に言い放ち食事を再開する一護を不思議そうにマールは見返す。

「何言ってるの？貴方も行くのよ。一緒に」

「・・・ん？」

「・・・聞き違いか？俺には「一緒に」って聞こえたんだけど」

「大丈夫。間違っていない間違っていない」

満面の笑顔で親指を突き出すマール。

一護は「あー、そうか。よかったなー」と棒読み口調で全く信じていない。

「もー。ホントよホント。信じてってばー」

「はいはいはい」

「藍染様に直接直訴した私をほめてよ」。すっごく緊張したんだから」

「・・・本当に？」

藍染の名は冗談で出すような物ではないし、出そうとしたらおつても勇気がいる。

そんな心臓に悪いジョークをわざわざ出す意味も無い。

もしかして、本当の事・・・？

半信半疑で一護は確認をとる。

「いつ行くんだ？」

「十日後」

「何所に？」

「現世に」

「誰と？」

「私と、一護の二人」

「なんで？」

「任務よ、任務」

てつきりウインクしながら「勿論、遊び」- ということだった一護は真面目な答えに目を丸くした。

「・・・貴方が私をどう思っているのか、よく分かったわ」

マールは腰に手を当て、立腹した様子を大げさに示す。

これは確かに自分に非があると認めた一護は素直に謝罪しようと頭を下げた。

「すいません」

「よろしい」

彼女は謝罪を受け取り妙に高飛車な気取った声でそう答え、クスクスと笑みを漏らす。

「で、任務ってのは？」

一護がそう問うた瞬間、マールアの眼差しに真剣みが宿る。

いくら普段の振る舞いからは想像がつかなくとも、彼女はやはり、破面の頂点に立つ十人の一人。誇り高き十刃なのだ。

「今回の任務は現世に逃げた実験体の破面の始末。藍染様がじきじきに改造してたのだから、手強いかもしれない。能力なんかは一切不明」

「あんの狸……。また余計なことを……」

「ちよつと一護」

あろうつことか藍染を狸よばわりした一護をマールアは即座にたしなめる。

「なんでそこまで藍染様が嫌いなの？この力だつて藍染様に頂いて

」

「なんでだろうな」

「はい？」

一護は銀のナイフを忙しく動かしながらぼつりとそう呟く。

「なんでか嫌なんだよ。目を合わせることも。名前を呼ばれることも。何もかも嫌なんだ」

「なによそれ。そんなので洗礼の時、一体どうやってはたつ　とマールアの動きが止まる。」

「……もしかして「洗礼」も受けてない、なんて事ないわよね？」

「洗礼」。力を持ち、数字持ち（メネロス）以上になる者は、藍染への忠誠の証として彼の斬魄刀、「鏡花水月」の始解を見る事が何故だか義務付けられている。

おそらく莫大な力を見せ、歯向かう気を無くさせるため、といわれるいわば一種の儀式。

この事を破面達は「洗礼」と呼ぶ。

ここに居る限り、一護もその通過儀礼を通つたはず。なのだが。

「おう。行つてねえ」
「ずこんっ」

いつそ清々しいまでに即座・はつきり明確に否定され、マールはおでこをテーブルに打ち付けた。料理ののった皿を一瞬の判断で避けたのは流石。（・・・褒め言葉？）

赤くなつた額を擦りながら、マールは身を起こす。

「な、なんで、そんな事を・・・」

「面倒くせーし、興味ねーし、」

そこで一護は一度言葉を切り、小さな声で一言。

「・・・迷つたんだよ」

「・・・っに」

洗礼をさぼるだなんて、前例の無い事をしでかして、その理由がそれか。

マールは堪え切れず、笑いを噴く。

「につしししししっ！！？ま、迷つた！！？道に！！？前代みもくん！！」

特徴的な笑い声を響かせ、食事中ということも忘れ、手近にあつたテーブルをばんばんと叩く。その度に音を立て跳ね上がる皿々。

自分のステーキの皿を両手で持ち上げ確保しながら、しかし彼女のあまりの笑いように一護は真っ赤になつて怒鳴る。

「煩せー！大体今までがおかしかったんだっ。こんな広い所を迷いもせず地図見ただけで覚えやがつて！！」

「にしし、それ、ただの八つ当たりだから。にししししし！」

笑いの最中にも突つ込みをいれ、さらに笑うマールに一護の堪忍袋の尾が限界を訴える。

「・・・今日こそは」

一護はかきこむように残り少ないステーキを飲み込み、皿をマールに投げつけた。

それが着弾する前に、テーブルを足台にマールに迫る。

「今日こそは許さねーぞ！！」

この一声が毎日恒例、既に日常と化している、一護vsマールの本日開戦合図だった。

割れ、使い物にならなくなった皿を拾い集め、黒いビニール袋に入れる。

このビニール袋という物もマールが現世で仕入れてきた優れものだそう。今のように喧嘩の後始末に一役どころか何役もかってくれる。

「・・・一護が悪い」

「まだ言うのかよ。今日は随分と根に持つな」

「だって、せっかくステーキだったのに」

「もう十分食ったろ」

「でも」

頬を風船のように膨らませ、マールはたらたらと文句をばやし続ける。

「ああー、現世に行って買ってきた最高級のお肉だったのに」

「任務資金を何に使ってんだテメーは」

「あーあ、お肉うー。一護のせいだあー」

「・・・」

「おーにいいーくうー」

「黙れ！！」

これでは駄々をこねる子供・・・否、それよりもたちが悪い。

怒鳴りつけた弾みで手の中で更に粉々に砕いてしまった皿の破片を拾い集めながら、一護は大きいため息をついた。

「たっだいま　　・・・って、なにしてるの？」
「一人チエス」

螳螂戦闘狂に呼び出された時間だ、と掃除をほったらかし出て行ったマールは一護一人が支配する盤上をじい・・・と見つめ、対戦席に座った。

「こつちの方が有利ね。今日こそ勝って見せるわ」

「オメエに恥って言葉はねえのか」

「無いわ！」

「いばんな」

堂々と「勝てば官軍！」と拳を高々に上げ宣言するマールはいつそ見事である。

と、その衣服に染み一つ、汚れ一つ無いのを見て、一護は思わず首を傾げた。

「お前、その螳螂・・・？に呼び出されて闘ってきたんじゃないのか？」

「まつさつかあゝ！」

「ご冗談を、とひらひらと手を振るマールの言動にますます謎が深まる。

「じゃあ、今まで何してたんだよ？」

「逃げてた」

「サインを突き出すマールの顔に嘘を言っている風体はない。

「だって、アイツかなりめんどくさいのよ。闘う理由聞いたら「メスが上にいるのが気に入らない」とさ。っかーもう！何様だったーの！」

あー、ネリエルもあんなのにわざわざ構ってやらなくていいのに」

「「ネリエル」？」

聞きなれない名に聞き返すと、マールは驚いたように群青の瞳を丸くした。

「え、知らない？ネリエル・トゥ・オーダーシュバンク。第三十刃

トレス・エスパーダ

の」

「いや・・・」

「あー、そういうの疎そうだね、一護。うん」

納得したと言わんばかり頷きマールは駒に手を伸ばす。

一護はむっとした表情をしたが、事実なので何も言い返さず相対した。

「さあ、行くわよ！」

「また負けた・・・」

「攻め方が単調すぎんだよ。何回かやってればパターンが俺でも読める」

「うう」

呻き声をあげながらマールは駒を始めの定位置に戻していく。

「よっし、もう一回！」

「ビーツ！ ビーツ！ ビーツ！」

机の上に置かれたランプが赤い光と鋭い音を発する。今まで見たことのない現象に一護は驚愕した。

「何だっ！？」

「・・・一護、刀を持って」

マールは普段の振る舞いからは考えられないような静かな声を出す。

「現世に行くわよ」

そして、あまりにもあっけ無く。彼女との日常は崩れ去る。

貳拾壹 日常（後書き）

・・・あれえ？

「マールさん死亡」までいくはずだったんだけどなあ・・・？
どうやら次回に持ち越しですね。あはははは・・・。
早く追憶の話終わらせたい・・・。

コメント・感想共々お待ちしております。

貳拾貳 王手（前書き）

祝！お気に入り登録してくれた方が二百件突破！

きりのいいところまで書き溜めていたら一万字超えました。
ちよつと流血表現あるかもです。

嫌な方は注意してください。

貳拾貳 王手

「このランプはね・・・」

先程、光と音を発したランプを掲げ持ちながら、しかしマールは駆ける足を止めることなく説明する。

「これから追う実験作虚の霊圧を察知して、光って鳴るように藍染様が改造なされたの」

「なんでそんな面倒くさいことすんだ？」

「なんでも霊圧を隠すのが極端にうまいらしい・・・んだけど、詳しい事は全然」

マールが「お手上げ」とばかりに両の手の平を上向かせた。

指に引っかかったランプがカチャカチャと断続的に揺れ動く。

一護はマールの前ということも忘れ、舌打ちをしてこの状況の元凶を罵る。

「あんの狸・・・！やつかいなヤツ作りやがって！」

「こら！・・・でも今回ばかりは同感ね」

反射的にマールは一護を諫めたが、自分も厄介事を押し付けられた自覚があるので、案外あっさりと聞き逃してくれた。

彼女もほぼ情報なし、という事でかなり困惑しているようだ。

「正直、今回の任務はなんかくさいのよね」。

藍染様が能力開発した破面が能力を調べあげられる前に脱走。

どうやって逃げ出したのかは未だに分からず、逃げた破面は霊圧を隠すのがうまい・・・。

なんか、出来すぎじゃない？」

「・・・それは考えすぎじゃねえか？」

一護にそうかたずけられたが、マールはうんうんと唸るのをやめない。

「私、勘はいいほうなのよ」

「考えに考えて決れてるだけに思えるけどな。深読みのしすぎじゃ

ねーの？」

マールを作り出した霊子が固められた道を走りながら一護は呆れたようにそう言った。

「・・・そうね。それより一護、現世はまだ昼間の時間帯だったはずよ。青空が見れるわ！」

どこまでも、見渡す限り続く灰色の雲。どんよりと垂れ込め、気分を鬱屈とさせる。

「・・・青空・・・ね」

「ああ！そーいえば現世には曇り空つてもものが存在するらしいわ！よかったじゃない、青空よりもレアよ！！」

慌ててマールが曇天へのフォローをいれた。一護はつまらなそうに目を細め、

「・・・青くない」

ぼそつと呟き、視線を地に向ける。楽しみにしていた空よりも足元に広がる大地のほうが色彩豊かで見慣れぬ植物というものも生え、まだおもしろい。

「また来ましょう！ね？」

一護を慰めるためにかマールはぽんぽんと一護の頭を優しく叩くように撫でる。

駄々っ子をあやすような扱いに一護がむくれ、反論しようと口を開きかけた時。

「また二人で来ましょう。今度は青空の日に。ね？」

そう念を押すマールの顔があまりにも必死で。口に出しかけた言葉を飲み込み、反射的に頷く。

「よかった！」

途端に花がつぼみを解くように開く笑顔。

「一護には見てほしいの。『本物の』青空をね」

「・・・なんでそんなにもこだわるんだ」

一護自身、青空というものに興味が無いわけではない。が、そこま
で拘る理由もない。

マールは、手に持つランプに視線をよこす。赤い光が点滅を繰り返すだけで音を発しない。近くに研究体の虚はいないようだ。

「・・・ま、いつか。話してあげる」

探索のためマールは歩き出す。一護もその後を歩く。しばらく無言でそうしていると、マールの足が止まった。

「私はね、虚圏に青空が欲しいの」

一護は愕然と目と口を見開いた。

「虚圏に青空」。ありえない。夢のまた夢。高望みが過ぎる。夢はでつかくとはいうが、でかすぎるのも考えものだ。

身に余るものに手を伸ばし続ければ必ず破滅が身を焼く。

「・・・「イカロスの翼」だな」

「分かりにくいっつこみね」

「うっせえ。第一、空なんてもうあんだろ」

「ダメよ！」

マールは語調を強め、ぐいっつと顔を近づける。深みのある快晴色の瞳が一護を映した。

「あれはね、ただ天に蓋をしただけ。でも、その外は今までと同じように真っ暗なのよ？」

私は、あの眠り続ける寂しい世界に朝を・・・夜明けをもたらしたいの」

「・・・どうして、そこまでこだわんだよ」

「決まってるでしょ？ あの世界が好きだからよ」

胸をはり堂々と言いつつマールの顔は輝いていた。

眩しいほどのそれに一護は瞬きするのも忘れた。

「・・・ん？なによー見とれちゃって。だめよ？恋しちゃ」

「するか。こんなおばさん興味ねえよ・・・いてててっ！！いふ

あいふあい!!」

「そんな事いうのはどの口なのかしら?これねこれでしょこれなのね」

「いふあいふあい!!ふあなふえ、ふおのぶあぶああ!!」

「なんですつて!くつ、ぴつちぴちのこのほつぺ、羨ましいぞコン
チクショー!!」

ぐにぐにと一護の頬を上下左右・四方八方にひっぱりいじりマールは自分の肌のはりと比べ、怒り嘆き羨ましがる。

「いいふあふえん、ふあなふえ!!」

「ん?なに言つてんのか分かんないわよ?」

「ふえめえ・・・!」

ふふふ、と黒微笑をこぼしながらマールは頬をいじくるスピードをあげる。

一護は必死の抵抗の末、マールの手から逃れた。摘まれて真つ赤になった頬を両手で押さえ、射殺するような視線でマールを睨む。

「てめえ、よくも・・・!」

「女性をおばさん呼ばわりするところなるのよ。いい機会だから憶えときなさい」

腰に手をあてて笑むマールの背後に黒いオーラが漂っている。

「・・・はい・・・すいませんでした・・・」

その迫力に冷や汗をかきつつ一護はさっきまでの怒りも忘れ、慣れぬ敬語で頭を下げる。

声が震えるのも仕方が無い。蛇に睨まれた蛙つてこんな気分なんだろうな、とそんな事を思った。

ビッー ビッー ビッー

サイレンが鳴り響く。ランプの明かりが一際増す。

「来たわね」

ふざけていた様子がまるで嘘と思うほどの切り替え。

やっとこの変貌についていけるようになった一護は素早く背負った

大刀の黒の晒が巻かれた茎^{なかし}を握る。

マールもランプを投げ捨て、腰に差した双短器に手をかけた。風でざわめく木の葉の音がやけに耳に付く。暗い空が心の不安をかきたてる。

ごくっ、と渴いた喉に唾を無理やり降下させ、一護は相手の霊圧を探ろうとした。

が、やはりうまくいかない。苦手分野ということもあるが、一切かんじゃないのはやはり、実験破面は霊圧を消す能力があるのだらう。

「霊圧を探るのが苦手なら、それに頼ろうとしちゃダメ」

一護の様子を見て、マールがアドバイスを送る。一護は困惑し、マールの背を見た。

「ならどうやって」

「他の感覚を使うの。視覚・嗅覚・聴覚・触覚・第六感。空気の流れや感触」

「そんなっ!？」

「いいから信じなさい。私が嘘ついたことある?」

一護はぱちぱちと瞬きを繰り返した。そして、大刀を握る手に力を込める。

そういえば彼女が嘘をついたことは無い。いつも、なんだかんだ言いながらマールは正しい事しか言わない。

全神経を総動員させ、相手の位置を探る。

小さく小枝が折れる音がした。

「っ、そこだ!」

しゅるり と黒の晒が意思を持つかのようにほどけ、宙を舞う。

白い峰・漆黒の刃。身の丈よりも大きな刀を、しかし一護は軽々と振り回し斬りかかる。

ガキンツ と鈍い音が、鈍い衝撃が走り抜ける。

一護の刀を受け止めたのはシンプルな甲冑を着込んだ兵だった。黒の漆塗りをしたかのような槍を携えている。

力的にも体格的にもこのまま組み合わせれば不利は目に見えている。

一護は相手の槍を大きくはじくと、響転で距離をとった。

「大丈夫？」

「ああ。にしても、コイツが・・・」

槍を構えなおした歩兵の格好をした破面を睨む。マールは腑に落ちない顔で見つめる。

と、その指先を持ち上げ、一言。

「虚閃」

瑠璃色の光が集まり、一直線に兵の兜を吹き飛ばす。頭を失った兵士は力なく崩れ落ちた。

「変ね・・・」

拍子抜けだわ、とマールは腕を組む。

「いいじゃねえか。終わったんだから」

「よくない。藍染様の研究室から逃げ出した実験破面がこの程度？
どう考えてもおかしいわ」

兵のような破面に歩み寄り、その体をじろじろと見つめるマール。

「なあ、いい加減帰ろうぜ。なんか天気も悪いし、！？」

一護は風きり音に言葉をきり、咄嗟に刀を振る。かん高い金属音が耳につく。

「な、につ！？」

一護の大刀が受け止めたのは黒い槍。持ち手は先程倒したはずの甲冑の兵士。

頭は混乱しているが体は打ち込む槍に反応し柄を切り落とし、鎧を袈裟に斬る。

ぱったりとあっけなく倒れた兵士は、気味の悪いほどマールの足元の兵士と瓜二つだった。

「これは・・・」

「どういう事なのかしら・・・？」

二人は顔を見合わせた。何か、とてつもなく嫌な予感がある。
ガサリッ　　茂みが不気味な音をたてた。

二人の間に緊張が走りぬける。マールの対の胡蝶刀が鞘から抜かれた。

ザッ　ザッ　ザッ

いくつもの足音が地響きのように伝わってくる。草を踏みつけながら姿を現したのは、真つ黒な軍隊だった。

先ほどの二人と全く同じ格好の歩兵が六人。

鎧に装飾が追加され、黒馬に跨る騎馬兵が二人。

ゆったりとしたローブを着、杖を手に持つ僧侶は双方共に伏し目がち。

その背後から現れたのは表面に城郭が彫られた漆黒の大盾二対。支え持つ兵士が見えないくらい巨大さだった。

その盾の奥に立つのは長身の女性。ドレスと一体となった鎧は他の兵とは比べ物にならないほど上質なものだと一目で分かる。優美な装飾をなされた杖を携え、絹糸のような髪は長く、その頭の上には黒いティアラが当然のように納まっていた。

一系乱れぬ行進は、一護達を前にしてぴたりととまる。

一護は素早く黒兵達に目を走らせた。

「・・・十三」

「いいえ、十四のはずよ。じゃないと、ゲームが成り立たない」

敵の人数を数えた一護はマールのとんちんかんな答えに眉を顰める。

「いーい？こいつ等の格好をよく見て」

一護は黒軍の顔ぶれに目を通す。

「・・・見たぜ」

「じゃ、気づくわよね。倒したのをあわせて歩兵が八、騎士・僧侶・城壁が二つずつ。そして女王が一体」

「っ！？じゃあ、これって・・・！」

「そう、チェスの駒と同じ。城壁が大盾っていうのがちょっと違うけどね。」

「どうやら、奴の能力は自らに忠実な兵を作り出す事、みたい。」

「って事は、在らなきゃいけない駒がここにはない・・・」

「・・・王」
キング

女王の隣、玉座に座っているはずの王の姿がどこにも無い。

「多分、王が例の「実験破面」。そして、こいつ等は全部ただの駒」

「じゃあ、王を探せばいいんだな？」

「可能性は高いんじゃないかと思うわ。ただ、どこに居るかが分からない」

「つしゃあ！いくぜ！！」

「ちょ、一護！？」

マーラの制止の声を背に一護は軍勢に駆ける。

歩兵が敵の接近を見て、槍を向ける。全員、教本の手本を丸写ししたような綺麗で全く同じもの。そして、実践においてあまりにも隙だらけな構え。

「っは！！」

小柄な体軀を生かし、槍先と地面の間に屈んで滑り込む。そして、かけ声と共に気合一線。

同位置に突き出されていた三兵の槍の先は、まな板で揃えて切る葱のように同じ長さで切り飛び、地面に三つ虚しく転がる。

続いて殴打に攻撃方法を切り替えてきた歩兵を大刀の一振りで見つ二つに。その時、頬を灼熱の痛みが走る。槍を突き出した兵に対応しようと体を捻った時、弾丸にも匹敵する速度で両の胡蝶刀が投擲され、兵士の頭を正確に貫く。

「考えなしにつつまない！！」

膝蹴りにて残り別の兵を地に沈め、マーラは教示の声を張り上げながら刃渡り五十センチばかりの胡蝶刀を引き抜く。

「はいっ、返事はっ！？」

「んな場合かつ！！」

歩兵が倒れたその合間より馬上から長槍がこちらを挟らんと突き出される。

一護は幅広の大刀で危なげなくそれを受け止めた。続いて、騎士の乗る黒馬が前足を上げたのを見て回避。予想通り、馬は粉塵を巻き

上げ前足を振り下ろした。

マールは一度に僧侶二人と切り結びながら、再度問う。

「ほらっ、返事はっ!？」

「いいから集中しろっ!！」

怒鳴り返すも、剣技で二人相手に圧倒している彼女に対しては無用な注意かもしれない。

黒衣の騎士は手綱を引くと、馬を一護のいる方向にむける。

そうして、馬の尻を槍の柄でぴしゃりと叩く。馬は全力でもって疾走を開始。

この攻撃方法はいたって単純。騎士のもっとも得意とする戦法、突撃である。

一護は大刀を正眼に構えた。地鳴りのような音をたてて、馬が迫ってくる。

馬との距離が二メートルをきるかという時、一護はぱつとしゃがみ込み、馬の側に峰を向け真横に突き出す。

騎士の振るった槍が耳元を掠め、数本オレンジの髪が宙を舞う。

黒馬は突き出された大刀に足をとられ、前につんのめり騎士を巻き込んで倒れた。

馬が引つかかった事によりかかった衝撃に思わず手放してしまった大刀を、一護は今のうちにと慌てて拾う。

服の袖で汗を拭いながら立ち上がった一護を、落馬した騎士は槍を捨て、腰に差していた長剣で切り捨てようと抜刀。

体格差を活かした上段よりの攻撃。が、全力を持って振り下ろされたそれを一護は刀でたやすくはじき、がら空きとなった喉元へと刀を突き刺す。

肉を断つ感触は無かった。が、鎧は力を失いその手から長剣を取り落とす。

「・・・オレを見ると、皆上段で攻撃してくるからな」

対処の仕方は完璧なんだよ、と高い背を持つ甲冑に皮肉を込めて言っている。

たかが甲冑にすら身長のことでは侮られた攻撃をされた、という事がなげに悔しかったというのは、秘密だ。

「それより、マー・・・」

ラ、と呼ぼうとして言葉を失う。一度に僧侶二人の猛攻を受け流していたマーラ。

今は黒馬に乗り、長剣を振り回す騎士が参戦している。

とどのつまり、相手が増える。そして、それを一人で圧倒している。

「あ、終わったの？」

しかも一護に話しかける余裕まであるときた。

ああ、そういえば十刃だったっけ、と思ったのは、内緒だ。

「手伝うか？」

「大丈夫よ。ただ、このロープの二人が超速再生できてね。斬っても斬っても立ち上がってくる、っていう無限ループゲームみたいになってるだけ」

いやいや、仮にも命が懸かっているというのになんだ、その遊びのようなネーミングは。

いや、それがマーラのマーラたるところなのかもしれない。

そう思い、次の敵を探す。しかし、残りの歩兵はマーラが一人で片付けたようで、戦場に立っているのは二人の大盾持ちと整った美貌を持つ女王だけだ。

刀を向けようと、一步もそこから動こうとしない。盾持ちは動く気配すらない。

チェスのルールにどこまでも忠実なら、女王は最強。彼女の傍は安全地帯。

ならば、王は一体どこに隠れるだろう？

「はあっ！！」

響転で一気に女王の後ろに回りこむ。小さな影が見えた。

「そこか！」

同時に一護の腹にめり込む女王の爪先。小さな体は軽々と宙を飛ぶ。

「っぐ・・・！」

一護は咄嗟に大刀を地に差し、スピードを殺す。止まりきりはしなかったが、速度は落ち。そのすきに地におりる。土煙が舞ったが、気にも留めず敵を見続けた。

（コイツ・・・）

違う。今までとは格が。

歩兵は動きはのろく、単調。騎士は速攻。なれど単純。盾持ちは鉄壁。されど鈍重。

女王は違う。一度攻撃をくらっただけでも分かる。

動きは機敏。攻撃は変則的。いままでの「駒」らしい枠にはまった対応ではない。

コツツ とハイヒールの靴の音が大地に響く。

一護は追撃かと身構えたが、結果その心配は必要無かった。

絶大な力を持つ女王は不動。その前方に盾二つが並ぶ。

完全に守りの構えだ。

（どうすれば・・・）

瑠璃色が明るく閃く。

「たーまやー！」

盾持ち二人に激突した虚閃が鮮やかに輝く。跡形も残さず焼き消す瑠璃色。

元気よく屋号を叫ぶマールはきつと、玉屋が花火を打ち上げ、大火事を起こしてしまったという事実を知らない。

「おまたせ。こっちもよーやく終わったわ」

マールは胡蝶刀を両手に一本ずつ持って歩いてくる。その後ろには痙攣する三人。

兎にも角にも、これで残るは。

「さがってて」

マールは亜麻色の髪を靡かせ一護と黒の女王の間に入る。

「私がいくから」

瞬間、マールは間合いを詰め、胡蝶刀を振り上げる。

杖であつさりとそれを受け止めた女王に対のもう一方を左から打ち込む。

双刀のスピードを活かした怒濤の連撃。一撃一撃の威力は一護の大刀には劣るものの間髪いれずに繰り出される攻撃は相手に防戦一方を強いらせる。

「じゃあ俺は・・・」

女王の後ろにいた王を探す。もとの場には影も形もなかったが、最強と信じている女王の傍からそこまで離れているとは思えない。そこらの茂みに身を隠していると見るのが妥当だろう。

広がる森は天候のせいであんなに薄暗いというのに、木の葉がさらに光を遮り不気味だ。

「・・・面倒くせえな」

もう虚閃で吹き飛ばしながら進んで行つてしまいたい。そうすれば、何時かは王にあたるはず。犬も歩けばなんとやらともいうし。

ふとマールを顧みると、黒檀の女王と剣戟を繰り広げている。

姿がかすみ、亜麻色と漆黒の残像がぶつかり合う。一拍遅れて全力で互いを斬ろうとする刀剣の雄叫びが火花を散らして響く。双方一歩も譲らない。

「つと、いけねえ。王様、王様つと・・・」

見入っていた一護は軽く頭を振って探索に戻る。目を皿のようにしながら奥へ、奥へ。

ガサリッ 近くの茂みが音をたてて揺れた。

「ガアッ！！！」

咆哮と共に赤色の虚閃が一護目がけて放たれる。今の今まで隠れ力を蓄えてきた一撃。

近距離での不意打ちに一護ができた事といえば反射的に腕を上げ、頭を守る事ぐらいだった。

「・・・やるわね」

「・・・」

返答は無論無い。その代わりに真つ黒な剣の刀身が鈍く光を放ちだす。

「随分とまあ、特典が山盛りなのね」

マールは胡蝶刀の一方を逆手に持ちかえると重心を落とし、低く構える。

その手に、頬に幾つか走る裂傷。対敵も同じ数だけ傷を負っている。欠けたティアラが髪の上に情けなくのつていた。

光を強めていく女王と長剣をマールは油断無く睨む。

ドオオオオン・・・

耳をつんざく爆発音。火の手のように森に上がる赤い虚閃。

マールは目の前に敵がいることも忘れて、その様子を仰ぎ見る。

「なにっ！？なにがどうした」

言いかけ、はたと口を嚙む。いや、言葉が続けるのを中断してでも確かめたい事があった。

自分の唯一の従属官。寂しがりやのくせに他人に寄りかかり方が分らない自分が初めから全面的に甘え、からかい、対等に接せた唯一の存在。いつの日にか虚圏に、と望む青空に君臨する太陽と同じ色の髪の少年。

その霊圧が急に弱弱しくなっているのだ。

今の爆音・爆発に巻き込まれたのだろうか。大怪我をしたのかもしれない。

駆け寄ろうとする足をかろうじてとめたのは肉薄するように迫ってきた女王の姿。

マールは身を振る。が、対処に遅れたため完全にはかわしきれない。剣が先程より数段切れ味をあげ、マールの肩の肉に食い込む。

そのまま腕とおさらばする前に、剣が振られる方向に逆らわずに踏み切る。そして響転。

傷はそれ以上広がる事は無かったが、深く抉られた傷口からは血が伝い、白い服の一部を赤く染めた。

「あら、この服お気に入りだったのに」

マールは凄みをきかせた笑みをうかべる。一護のもとに早く向かいたいというのに足止めを食らっているこの状況。服のしみ。その全てが彼女を苛立たせる。

爆発が数回にわたって続いているのが、戦闘中と、すなわち一護は生きていると確認でき、それが彼女の最後の理性の糸だったが、それもきりきりと細くなってきた。

今のマールは心ここにあらず。しかし、頭は冷静に勝利への道を辿っていく。

「さあ、取り急ぎ服代だけは請求させてもらおうかしら？」

マールは響転で一氣に近づき、胡蝶刀を横に薙ぐ。首を正確に狙ったそれを女王は仰け反るようになてかわす。そこから第二撃。逆袈裟に切り上げられ女王の鎧が音をたてて砕けた。

血は出ない。他の兵隊達と一緒に。違うのはそのまま系の切れた人形のように倒れこむのではなく、踏みとどまり反撃してきたことだ。鈍く光る長剣がマールの胡蝶刀とかち合う。二本の刀をクロスさせ長剣を受け止めるマールの口元に小さく笑みが。

「虚閃っ！！」

瑠璃色がマールの眼前に結集し、女王の頭を狙い打つ。

カアアン・・・ 欠け罫割れたティアラが地に落ち、砕け散る。

「あらあ？ちよつと安くついちゃったかしら」

ティアラの破片を踏み砕き、マールは妖笑をふつ、とうかべる。

その笑みをすぐさま消し去ってマールは木々生い茂るほうに視線を移す。

爆発が、止んでいた。

「・・・嘘よね・・・」

込めれる限りの霊圧を込め、響転を行う。

、間に合ってよね！

爆発音は、相変わらず嵐の前の静けさのように止んでいた。

「・・・っは、っは、っは」

鼻に土のおいが飛び込んでくる。荒い息をしながら一護は立ち上がるために腕を立てようとした。

が、細い双腕は一護の体重を支えきれず折れ、体はぐしゃり、と再び地に落ちる。

「・・・ロス」

「王」はぼそりと呟いた。四・五歳ほどの外見だというのに、目には光が無く「生ける屍」という言葉が頭をよぎる。

白っぽい金髪は乱雑にはね、大きすぎる王冠はかぶっているというよりかぶられているという表現がふさわしいだろう。チェスのボードと同じ色合いのチェックのマントを羽織っている。

王杓をゆっくりと一護に向け、彼はぶつぶつと壊れたレコーダーのように同じ言葉を繰り返す。

「殺ス殺ス殺ス殺ス殺ス殺ス」

王は一護をガラス球のような瞳に写し、王杓の先端をゆっくりと突き出す。

その先に結集していく力の光。真っ赤なそれはぐんぐんと大きくなる。

ぼろぼろの体を叱咤して動かこうとするが、それでもほんの少し移動しただけ。

とても特大の虚閃がはなたれるまでにその威力が及ぶ範囲から逃れる事はできないだろう。

そうこうしているうちに、大玉となった虚閃を掲げ、王が一護に

照準を合わせた。

虚閃の威力をこるす為に残った霊圧をかき集めて防壁をつくる一護しかし、それも所詮は焼け石に水。そう分かっていた。

「コロス」

虚閃が迫る。大刀の茎を血塗れた手で引っ付かんだ、その時。

グンツ 首の後ろを引っ張られて一護の軽く小さな体は後方にとぶ。

一瞬、隣を過った亜麻色。

気がつけば、マーラが前方で手を此方に伸ばしていた。

いや、違う。彼女は一護を投げたその手に胡蝶刀を握りなおした。その顔にうかぶのは、微笑み。

「よかった間に合って」

グオンツ 轟音がして、一護を襲うはずだった虚閃がマーラに迫りくる。彼女は胡蝶刀でそれを受け止め、霊圧でかき消そうとぐんぐん力を解放していく。

その体を 二本の長剣が刺し貫いた。

「あ、」

一護は目を見開く。かわいた唇からもれ出た声は、擦れていた。力なく膝を折ったマーラ。女性らしい曲線をもつ体から不恰好に突き出る二本のもの。

あれは、何だ。

受け入れられない現実を、脳が心が拒絶する。されど、拒んだところで目の前の出来事が変化するわけでもない。

純白の長剣が二振り、マールを両脇から貫通している。

もち手は先程まで相手にしていた烏木の兵隊とは正反対の純白の騎士二人。

気がつけば、あたり一体を包囲している白妙の軍。

（そうか・・・！）

黒と白のチェックのマント。どうしてもそこで疑問をもたなかったのだろう。

どうして、王の軍勢は「黒」だけだと思いついていたのだろう。

どうして、俺は、　　ッ！！！！

「バカ」

王は唇の端を吊り上げた。マールの眼前に勝利者の歪んだ笑みと優越感をもって歩み寄る。

「コノ程度。クズ。十刃ノクセニ」

「・・・莫迦はアンタよ」

ゆっくりと、マールの顔が上がる。その声は小さいが凜としていた。王の顔が驚きに痛みに彩られる。その胸に突き刺さったマールの刀。

「チェックメイト
王手！！！」

胡蝶刀が薙がれた。真っ赤な鮮血が飛び散る。

「ア、アアアアアアアアアアアアアッ！！！！！」

断末魔の絶叫が響く。一護よりもさらに幼い身体は灰のように形を失くし、どんよりとした風に攫われていった。

辺りも囲っていた純白の兵も、マールの体を刺し貫いていた二振りの長剣と二人の騎士も同様に消えた。

「・・・終わった・・・のか・・・」

一護は大刀を支えによりよると立ち上がった。

マールは一護が無事立ち上がったのを見て、満面の笑みをうかべ、

カランッ

胡蝶刀がマールの手から力なく滑り落ちた。

その肢体が傾くさまは、妙に時間が長く感じた。

倒れふす音は、遅れて聞こえた。地に広がる赤は、速かった。

「……え？」

咄嗟に駆け寄る事も忘れ、一護は呆然と立ち尽くした。

何で、どうして。そんな意味の無い言葉の羅列ばかりが頭の中を駆け抜ける。

「マール……ラ……？」

ふらり、と一歩足を踏み出す。いつもきれいなマールの亜麻色の髪は地に広がり、血に染められつつある。

それを見て、ようやく頭が働き出す。

「マールッ……！」

名を呼びながら駆け寄り上半身を助け起こすと、彼女は吐血をしながらもうつすらと群青色の瞳を開いた。

「……うるさいわね。そんな声ださなくても……聞こえてるわよ。」

いつもどおりの物言いに内心ほっとしながら一護は「このバカ……！」と一喝した。

「なんで、あのタイミングで入ってくるんだっ。なにが、チェックメイトだ……！」

「……に……今……今回のチェスは私の勝ち、ね」

「んな事、今はどーでもいいだろうが……！」

「よくないわよ……。だつて、」

「もう、できないだろうから」

マールは自慢の亚麻色の髪先端が風に吹かれ、消えていく。

足先から、灰のように細かい粒子となり、「マール」が崩れていく。

「あー…まさか、あそこでまだ伏兵が居たとは……。油断大敵っていうのはこの事ね」

苦笑しながら、マールは空を見上げた。曇天から雫がマールの頬に落ち、滑り落ちる。

「……ごめん」

一護の声に彼女は空から視線を一護に戻した。

俯いた瞳から零れ落ちる涙。

「お、れが、もっとちゃんとしてれば……。俺がつ、もっと強ければ……。!」

嗚咽の混じった謝罪。となどめなく流れる涙は一護の頬を伝い落ちる。

「……こら」

予想もしていなかった小さな叱責に一護は腫れぼったくなった瞼を瞬かせた。

「…助けてもらったら、「ごめん」じゃなくて、「ありがとう」でしょうが」

「……ありがとう」

ぐすり、と鼻を吸いながら一護はマールの肩を抱く手の力を強めた。マールは微笑みながら一護の頬を愛おしげに撫でる。

天から降り注ぐ雨と流れ出ていく血液のせい、その手はひどく冷たかった。

それでも、一護は心地よさげにその手に擦り寄る。

もう二度と、撫でてはもらえないのだろうか。

「・・・青空はきれいな」

マールは光が消えていく瞳で雲が立ち込める空を見上げた。

その目から、雨とは違う雫が零れ落ちた。

「・・・ああ」

マールがそれほどまでに焦がれる「青空」を見た事も無い一護は曖昧に相槌を打つほかない。

「とっても、とってもきれいな」

「ああ」

「・・・一緒に見たかったなあ」

「・・・」

完全に自分の死期を悟ったマールの台詞に一護は思わず言葉を失った。

雨足が強まりつつある中、彼女は空色の瞳から涙を流す。

「一護。・・・私、死ぬのよね」

「・・・」

「いやだなあ・・・」

「・・・マール、」

「死にたくないなあ・・・」

マールは弱弱しく一護に縋りついた。

「暗いところで、独りは怖い・・・」

一護はマールの手を握った。ここにいるよ、と教えるように。

その手も、さらさらと粒子となり消えていく。

一護にはなす術もなせる術もなかった。ただ、無力に唇をかみ締めマールの肩を抱くしか出来なかった。

雨が、勢いをました。

貳拾貳 王手（後書き）

お久しぶりです！上にも書きましたが、気が付いたらたくさんの方に読んで氣に入っていたただけだったんだと思うとうれしくて涙がとまりません。

マ「だったらもっと更新早くしなさいよ」

黎「うおう！ダメですってマーラさん！あなた此度本編でお亡くなりになってんですよ!？」

マ「面倒くさいわね」

黎「いいから！大人しくしててください!!!」

マーラさんは役目を終えてふてくされてます。過去編なんかでまた出番あげたいな、と思っています。

あ、サブタイトルは「王手」と書いて「チェックメイト」読んでください。

さあ、追憶編終わり！次回から現実です！

貳拾参 情報

一護は喋りすぎてだるくなった唇を閉じた。

耳の痛いほどの静寂が部屋に広がる。ルキアは布団の脇で正座して、沈黙を守っていた。

「ありがとな」

一護は最後まで聞いてくれたルキアに感謝を述べる。

「こんな話、聞いててもつまんなかったろ」

「・・・たわけ」

ルキアは弱弱しく一護を叱りつける。

「そのような顔をしてまで、私に話す必要などないのだぞ・・・」

一護は目を丸くした。まったく自覚がない。

「・・・俺、今どんな顔してるんだ？」

「・・・おいて行かれた、子供のような顔だ」

そう言つて、彼女はとても辛そうな顔で横たわる一護を見下ろした。膝の上で握られた手は握り締めすぎて白くなっていた。

「・・・てめえこそ、そんな顔する必要なんて無えだろ」

「「そんな顔」？」

首を傾げるルキア。一護と同じく、自覚は無いらしい。

「大切なものを失くして、途方にくれてるヤツみたいだ」

そう、大切なもの（マール）を失くしたばかりの一護とそっくりな表情。

ルキアはそう指摘され、目を逸らした。光が遮られ、黒檀の瞳に影が落ちる。

その様子に事情がある事は察せたが、無理に追求はせず、話題を変える。

「そっいゃ、あの二人はどうしたんだ？」

「あの二人とは誰の事だ？」

会話にのってきたルキアに安堵しながら、一護は一緒に町を巡った

二人の女子高生の名を思い出そうと奮闘する。

一人は威勢のいい黒髪短髪。もう一人は飴色の長髪でおしとやかだが天然の気があり、たまに挙動不審。

そう、印象は覚えているのだ。だが、名前となると……。

「……誰だったっけ？」

「はあ？」

「いや、一緒に歩いた二人って」

「……有沢と井上のことか」

ルキアは呆れた顔つきで二人の名を上げた。その瞳が半眼となって一護を見つめる。

「……貴様、昨日の今日で何を言っている。ほとんど寝ていたというのに」

「仕方ねえだろ。夢の中で色々あったんだ……って、「昨日の今日」？」

ルキアの言葉の中の引っかかる点を「どういう事だ」という意味をこめて繰り返す。

一護の意思を正確に汲み取り、ルキアは説明するため、室内に唯一設けられていた窓に歩み寄る。

がらり、と窓が開けられるとそこからは高い日差しが差し込んでいた。

「貴様が倒れてから、一晩が過ぎている。もうすぐ昼時だ」

ぐうゝ　ルキアの言う事を肯定するかのごとく一護の腹の虫がなる。

「ほほう。腹が減ったようだな」

ルキアは意地の悪い笑み……すなわち、一護をからかうときの表情にをうかべた。

「あう……つるせ……！」

自分の失態に羞恥で赤くなりながら、一護は掛け布団を頭の上まで引き上げる。

（よかった）

もう元気そうだ。ルキアは先程までとはまるで違つ、優しさに満ちた笑みを口元にのせた。

布団をかぶつた一護が、その笑みを見ることは無かったが。

「では、貴様の分の食事も用意してもらえようテッサイ殿に頼んでこよう。

貴様が倒れたと聞いて心配なされていたぞ。ジン太と雨もな。後で詫びておけ」

「・・・分かった」

布団に潜つたまま、ぐもつた声が返事をした。どうやら、ルキアがいる限り、酸欠になろうと意地でも出る気はないらしい。

「着替えも貰つてこよう。大人しく待つておるのだぞ」

そう言つて、ルキアは襖を開けた。

「おお、そうだ。あの二人から言つてを頼まれておつたのだ」

立ち止まり、布団の中の一護にもきちんと聞こえるよう大きな声で言つてやる。

「また一緒に歩こう、だそうだ」

「・・・そうか」

数秒の沈黙の後、一護は短くそう返す。

その返事には、様々で複雑な感情が込められているのが聞いただけでも分かる。

「あと、有沢は」

その伝言を思い出し、ルキアの口元に知らず知らず笑みがこぼれる。

「「ちゃんと笑えるようになったけ」だそうだ」

「・・・余計なお世話だ」

また幾秒かの無言の間の後に返事が返ってくる。

しかし、今度はぐもつた声が少し明るく響いたように聞こえた。

手を合わせて合唱してから、一護はざるの上にのつた白い麵を不思議そうに見つめた。

皆、我先にと箸をのばす。そんな中、箸を持つことさえしない一護にテッサイが話しかける。

「いかなされましたか。素麺はお嫌いidez」

「あ、いや……。そうじゃない、んですけど」

たどたどしく敬語を使いながら、一護は苦笑する。

どうやって掴んだのか、というほどの麺を椀に入れ食べる夜一。その周りで皆が涙して空っぽの椀の汁を見ていた。

「こういう皿から皆でとっていくのってやった事なくて」

「ほう」

「一緒にすると、一人でドカ食いするヤツに全部食われちゃうんで、皿に盛り分けてるんです」

一護の脳裏に亜麻色の髪的女傑と若草色の髪の美人、そして同色の髪の童女がよぎる。

思えば、自分は随分と大食いの女性との遭遇率が高いらしい。

現に、今も。

「夜一サ〜ン。ちょっとは残してくださいよ・・・」

「なんじゃ、残しておろう。ほれ」

「いや、麺三本ってどうなんスか」

「細かいことを言うな恋次」

「そーよ。細かい男は嫌われるのよ」

「お前等は取れたからんなコト言ってられんだっ！」

「ちよつと一角！醜いよ」

「・・・くだらねえ」

「・・・うん。やっぱりこうなつたか。

「素麺追加で」

一護は料理長・テッサイに追加オーダーを頼む。

「承知いたしました」

テッサイは快く引き受けてくれた。のっしと立ち上がると机の中央

に置かれていた空っぽのざるを取る。

「皆様、しばしお待ちを」

その後、結果的にテッサイが何束の素麺を何回ゆでたのか。それは……言うまい。（察してほしい）

「……で、話ってなんだよ」

食後のお茶を啜り、一護は目の前に座る少年隊長に問いかけた。食事を終え、席を立とうとしたら、「話がある」と引き止められ、現在に至るわけだが。

銀髪の隊長は何か話しあぐねているようで一向に話を始めようとなない。

ルキアや他の死神たちも卓を囲んでいるが、口を開く気はないようだった。

「……なあ」

呼びかけようとして、はたと口を閉じる。

……そういえば、コイツの名前ってなんだっけ。

ろくに話した事もないのだ。名前など覚えているはずもない。下の名前はなんとなく覚えているが名字が妙にややっこしく、記憶に全く残っていない。

「おい、とーしろー」

「冬獅郎じゃねえ！日番谷隊長だっ！」

「……いや、俺破面なんだけど」

はたして、死神の隊長を「隊長」と呼んでいいものなのだろうか。ひ、日番谷……ああ、もう覚えにくい。冬獅郎でいいや。

一護は彼の呼び方を「冬獅郎」に決定・固定した。

冬獅郎は一護に言われ、ばつが悪そうに目をそらした。

「……すまん。つい癖だな」

「……お前、苦労してんだな」

隊長が「隊長と呼べ！」と叫ばなくてはならないだなんて。

思わず憐情の眼差しを向ける一護に気づき、冬獅郎は大きく咳払いをする。

「ともかく、話はもう少し待ってくれ。浦原が何かもってきた物があるらしくて、」

「どうも。お待たせしました」

噂をすれば、なんとやら。室内でも帽子をかぶっている浦原がへりとした笑みをうかべて部屋に入ってきた。

手にはなにやら機械機器らしきものが。

「浦原さん、それは・・・？」

「ん？ああ、別に。お気になさらず」

そう一護にことわりつつ浦原はカチャカチャと機械をいじり始めた。気にするなと言われても、「はい、そーですか」と完璧に無視する事などではしない。

自然、一護の視線は浦原に流れる。冬獅郎も特に咎めようとする素振りはないので、そのまま見学していると、浦原の顔が上がった。

「準備OKです」

「よし」

その言に頷き、冬獅郎は一護に向き直る。

「じゃあ始めるぞ」

「え、あれは」

浦原のセットした機械を指差しながら一護は眉根を寄せる。

「気にすんな」

浦原と全く同じ台詞で冬獅郎は切って捨てた。

一つ、大きく咳払いをし、口を開く。

「単刀直入に言う。破面側の情報が欲しい」

「・・・つまり、俺に仲間の情報を流せ、って言いてえのか？」

一護のブラウンの瞳が座り込む。

もし、一護の入っている義骸が霊圧遮断性の物でなければ、確実に上昇した霊圧を感じ取れただろう。

静かな憤怒。

彼のそんな表情を見たことのなかったルキアは驚きに目を丸くした。冬獅郎は顔色一つ変えることなく答える。

「話せる事だけでいい。宿と食事の恩、……ってことでダメか」

「……」

一護は馬鹿馬鹿しいと一笑する事はなく、形だけかもしれないが無言で真剣に考え始めた。

彼の優しい性格上、今までうけた恩を返す形を強要されては、即答して「嫌だ」とは言えないのだろう。

その場に張り詰めた緊張からなる静寂がおりる。

やがて、一護の黙考が終わった。俯けていた顔が上がる。

「……教えても此方が構わない程度の情報……でもいいのか」

今度は冬獅郎が顎に手をあてた。できれば重要なものがほしい。ほしいが、そんな事を言つては、何も手に入らない。零された情報や言葉から新たな事が見えてくる可能性もある。

「それで構わない」

そう言つと、一護の表情が和らいだ。

「だったら、別にいいぜ。崩玉のこと……はもう話したっけか？」

「あ、ああ」

急に話を振られたルキアは慌てて頷く。

崩玉の件が「教えても構わない程度の情報」とはとても思えないのだが……。

まあ、それが発覚したところで尸魂界にうてる手など無いも同然なのだから、「その程度」の情報になるのかもしれない。

「じゃあ、破面の中にある階級っていうか……組織のつくりでも説明するか」

紙くれ、と言つた一護の手にルキアよりスケッチブックが手渡される。

何故、常時携帯しているのかに首をひねりつつも、一護はスケッチブックの白いページを開き、一緒に渡された黒のマジックを走らせ

た。

「一番トップが藍染・・・サマ」

一護は嫌そうに「サマ」をつけてから、白紙の上のほうに「総司令官・藍染」と書いた。その下に数本線を引く。

「それでそのすぐ下に破面統率官の東仙さん。で、狐」

「・・・きつね？」

「ねえ！それってギン・・・の事？」

乱菊が身を乗り出して一護に迫る。一護はその迫力に気圧されながらもしつかりと頷いた。

「あんなヤツ、狐で十分だ」

「市丸ギンと何かあったのか？」

語気を荒げる一護の様子にルキアが尋ねる。

「あの野郎・・・！俺達しか食事を取らないからって狙ってザエルアポロの薬入れやがった！！おかげで何度もさんつざんな目にあっただぜ・・・」

一護の脳内に薬による被害が走馬灯並みの速さで駆け巡る。

「・・・た、大変だったようだな」

ルキアが片頬をひくひくと痙攣させながら一護へと声をかける。

その背に般若の面が浮かんでいるように見えたのは、はたして目の錯覚だろうか？

室内の一同、こぞって気まずげに一護から目をそらす。

「なにが退屈しのぎだ・・・なにが似合ってるだ・・・！」

怒りに震える拳を握り締め一護は彼方に居る銀狐・・・もといギン狐の顔を思い出した。

思い出したら思い出したで腹立たしくなり、想像内のギンをたこ殴りし始める。

「おい」

日番谷が呆れたように一護を呼んだ。はっと気が付き、一護は「悪い」と眦を下げる。

少々どころか、かなり話が脱線してしまっていた。

気を取り直し、紙に「東仙さん」、その横に「狐」と書く。「狐」の字に心は一切こもっていない。

さらにそこから線を引く。書かれた文字は十の刃。

「その下……。藍染サマ直属の、破面。通称「十刃」。強い奴を上から十人とつている。」

こいつらの実力は、正直計り知れない。戦闘なんて滅多にしないしな」

戦闘狂以外、と一護は小さく付け加えた。

「あ？なんだって？」

それを刺青……。否、恋次が聞きとめ、尋ねる。尋ねる、とはいっても口調は問い詰めるように荒い。

「なんでもねーよ」

本当にわざわざ言い直す必要もない事だったので、一護はそう言った。

別に、「なんでテメエなんぞに言い直してやらなきゃいけないんだ、この赤パイソ！」と思ったからではない。断じて違う。

が、恋次はそうは思わなかったようで米神に血管をうかせている。

「テメー……！！」

「阿散井っ」

「ちょ、恋次！？なにやってんのよ！」

「落ち着くのだ、この莫迦者！」

一護に掴みかかろうとした恋次を周りに座っていた死神が押さえつけるようにしながら宥める。

恋次はかろうじて自分を押さえつけ、座りなおす。が、その直前大きな舌打ちをしていた事からも決して静止を受けたことをよくは思っていないのだ、と分かる。

どうやら、相当に嫌われているらしい、と一護は眉を顰めた。

しかし、彼の逆鱗に触り、嫌われるような事をした覚えが一切ないのだ。

首をかしげて考えるが、ない事を思い出そうとしてもどうなるというものでもない。

一護は話を再開する事でその場の空気を元に戻そうと試みた。

「・・・で、この十刃の側近が従属官。数字持ち（メネロス）の中から何人でも選べる。」

あ、数字持ちって言うのは破面のなかでも藍染サマの命令をつけれる奴等な。

弱い破面は切り捨てられ、本拠地にも入れてもらえない。

中には誰も選ばない奴も居る。数えられないぐらい選ぶ奴も」

一護の頭の中にピンクの髪の毛をかきあげながら見下してくる研究者の姿が浮かび上がる。

そっごく頭の片隅に追いやりながら、一護は十刃の文字の斜め下に「数字持ち」と書いた。

恋次が「そういや、」と、何かを思い出すように空中に視線を彷徨わせた。

「俺と戦った金髪が言ってたぜ。破面？15（アランカル・クインセ）とかなんとか」

「俺と戦った破面も言っていたな。確か、生まれた順から数字をつけていくとも」

「おお。よく知ってんな、冬獅郎」

「日番谷隊長だ！！」

反射的に怒鳴ってから、はたとその口を閉じる。そして、また場の雰囲気を取り戻すために咳払いをし、冬獅郎は「ところで」と一護の書いた図面を指差す。

「ここにも線が引かれているが」

「ああ、これは十刃落ちと葬討部隊^{エクセキアス}」

「ぷ、ぷりば・・・ぷりん・・・？なんなのそれ。十刃の一種？亜種？」

「いやいや、乱菊さん。ぷりんって」

食い物になってます、と恋次がつっこむ。

「にしても長ったらしい名前だな、オイ」

「美しくないよね。もつと簡潔にまとめられないのかな」

「・・・俺に文句言わないでくれ」

ネーミングセンスはアイツのなんだから、と知らず一護の眉間にしわが寄る。

「で、十刃落ちというのはなんなんスか？」

ずっと口を閉ざして機械を弄り、モニターを覗き込んでいた浦原が話を進める、と言わんばかりに顔を上げた。

「十刃落ちは、「元・十刃だった者」たちの事だ」

「「元」？」

耳ざとく冬獅郎が説明を促す。

「後からあがつてきた者達に負け、十刃を追われた者達。数字は三桁に落とされ、従属官を持つ権利も剥奪される。って言っても、実力は十刃級だ」

言いながら、一護は手に持つ黒のマーカーで「十刃落ち」と書く。

続いて残った線の下に「葬討部隊」と殴り書いた。

「で、こっちは「葬討部隊」。隊員全員感じ悪い。以上」

「待て待て待てコラ」

恋次がストップをかける。一護はこれ見よがしに顔を顰めた。

「・・・なにかというと、突っかかってくんな。」

「なんだ？」

「「なんだ？」じゃねえ！！全部テメエの独断偏見じゃねーかつ！！」

「俺だけじゃねえ。あれ見りゃ十人中十人同じこと言うだろうぜ」

「そうじゃなくて、もっと正確な情報をわたせて言ってるだ！！」

「わたせたど？俺は渡してもかまわない程度の情報を渡すとは言ったが、それをいちいち分かりやすく説明してやるとは言ってねえぜ、赤パイン」

「んだと！？」

「やろうつてんのか！」

睨みあう二人を止めたのはルキアの一喝と一撃。

「やめんか、このたわけどもがつ!!」

「うぎつ!?!」

「がつ!!」

一護と恋次は脳天を押さえて蹲る。腰に手をあて、ルキアは二人を糾弾した。

「なにをやつておるか!特に恋次!一護にはかなりの無理をやつてもらっている事に気づかんのか?!?」

「でもよ、」

「言い訳無用!!」

蹴り倒され、ぐりぐりと踵で背中を攻撃するルキア。一護は不憫な恋次に合掌した。

バンツ! 大理石のテーブルが砕けるか、と錯覚するほどの音。

「ちよつと、それどういう事よ!!?!」

ルベルゼの鬼気迫る表情にも、ウルキオラは無表情を崩さない。

「どうもなにも、そのままの意味だが。お前の耳は飾り物か」

何気に毒を吐きながら、ウルキオラは無機質な翡翠の瞳を向ける。

その先に居るのはいまだ主のそばつちりを受け、謹慎中の従属官・

・いや、彼らを従属官と呼んでいいものか。彼らの主は十刃ではないのだから。

「・・・確かなのか」

セロが左右色彩が違うオッドアイでウルキオラを睨みつける。

「一護の霊圧が全く感知できないというのはー、」

「今言つたとおりだ。この三日、残留霊子もどう動いたのかの情報すらない。なんらかの事情で霊圧を消しているか。あるいは」

「・・・その身に何かあつたか」

「冗談じゃないわ!セロ、なにアンタまで不吉な事言つてんのよ!?

一護ちゃんなら大丈夫って、アンタもそう言つたじゃない!」

「・・・この世に、絶対は存在しない」

「黙らっしやい!!」

論理的なセロと感情的なルベルゼが激突するのは、今に始まったことじゃない。

しかし、今日は両者共ヒートアップしすぎている。

近くで恐る恐る話を聞いていたネル・ペッシュ・ドンドチャッカの三人集があわてて飛び出し、二人を羽交い絞めにして引き離す。

「まーまー二人とも」

「落ち着くでヤンス」

「これが落ち着いていられるもんですか! だから幾つになろうとも、一人歩きなんてさせたくないって言ったのよっ」

「・・・それは前々回の話し合いで可決された。今更蒸し返すな」

「・・・って、二人ともいつこの事で会議なんてしてたんスか!？」
初耳だ、とネルは驚愕に目と口を開ける限界まで開いた。

ペッシュとドンドチャッカは知っていたのか、咳払いと共に目をかなたへそらす。

ウルキオラは部屋の出口に足を向けた。

「現在一護は搜索中だ。しかし、見つかる見込みは今のところない」

「・・・責任は感じてないのかしら。仮にも一護ちゃんにこの任務を回したのはアンタでしょうに」

ルベルゼの口調は明らかに責めるものだ。けれどもウルキオラは足を止める事はない。

「あいつが自分で選んだ事だ。それで死んだら、それまでの奴だったというだけの事」

「なにをっ・・・!」

ウルキオラに掴みかかろうとしたルベルゼを、ドンドチャッカが全身全霊の力を持ってとめる。

「なにすんのよ!」

「頭を冷やすでヤンス」

「ルベルゼっ! いつこなら、いつこならきつと大丈夫っスよ! だからー」

見た目幼いネルに必死に言われた事で頭に上っていた血が下がったのか、ルベルゼは大きく深呼吸をして体の力を抜く。

「何時までさわってんのっ！」

「うぎゃー!!」

肘をドンドチャツカの顔にめり込ませてから。

「ウルキオラ」

セロに名を呼ばれ、ウルキオラは初めて足を止めた。

「・・・俺達の謹慎期間の残りは」

「あと二日・・・だったと思うが」

「一護の居場所を突き止めるには、何日かかる？」

「さあな。なにせ手がかりも情報もない。あと七日して何も掴めなかったら、搜索は打ち切りだ」

今は大事なときだ。いくら一護が腕利きだとはいっても貴重な時間を一破面のためだけにそこまでさけはしない。むしろ、失踪してから十日も搜索してくれるほうが珍しい。それどころか特例といってもいいぐらいだ。

「・・・七日後。もし一護が見つからなければ、俺達全員の現世行きを許可を藍染様にとってもらいたい」

ウルキオラが振り向く。見つめ返すセロの目には強い光があった。

「俺達が、一護を探しに行く」

貳拾参 情報（後書き）

今回はちよつとがんばって早めに書き上げました。

そのせいでどつかおかしなところが文中にあるかもしれません。お気づきになられましたら、教えてください。内容や表現が変、というのはもう作者の頭の問題なので、指摘してくださらないとありがたいです。

勿論、皆様のご感想もお待ちしております。「続きを待つてる」などのコメントをいただけると、読んでくださっている方が居てくれるんだな、と実感できて、出筆のはげみとなっています。

年内にもう一話書きたいと思いますが、間に合わなかったときのために言っておきます。

メリークリスマス！そして、よいお年を！

式拾四 土産（前書き）

頑張ったら、年内にもう一話いけました！

式拾四 土産

「・・・どうだ、浦原」

冬獅郎は一護が立ち去ったのを確認して、浦原に訪ねた。

浦原はモニターに釘付けだった顔を上げる。

「はい。霊圧遮断義骸でも霊圧を感知できるこの優れものの機械でずっとみていましたが、一護サンの霊圧は一切乱れず、終始同じ波長でした。嘘は言っていないかと。」

あ、ちなみにこの機械はアタシの発明っスよ」

「それはどうでもいい」

一蹴され、床にのの字を書く浦原。

「なんじゃ。気味が悪いぞ、喜助」

廊下からするりと黒猫姿の夜一が入ってきた。

「いい年をしたおっさんがなにをやっておるんじゃ」

鼻で笑った様子がありありと分かる。猫の顔なのに。

幼馴染のあんまりな言い草の浦原はふてくされた風に夜一を顧みる。

「夜一サンってばもう。アタシ、泣いちゃいますよ」

「勝手に泣き喚くがいいわ」

やはり、彼女はどこまでいっても浦原に冷たい。

「で、どうするのじゃ」

「なにがっスか？」

夜一は苛ついたように尻尾で床を、たしつと叩く。

「これから、に決まっておろう」

崩玉の事、破面の事、十刃の事、藍染の事、そして、一護の事。

「・・・どーもこーも、どうにかしていくしかないでしょう」

ぼん、と機械の電源を切りながら、浦原はそう締めくくった。

皆、一様に緊張した面持ちで頷く。

夜一はちらり、と自分が入ってきた廊下に視線をやった。

皆、気が付かなかった。

廊下で息を気配を殺し、もれ出る霊圧が完全にかんじさせなくなった者がそつと全てを盗み聞きしていた、など。

廊下から入ってきた、夜一以外。

自分に宛がわれている部屋に戻った一護はずっとつめていた息を大きく吐いた。そのまま、一、二度深呼吸。

「・・・なるほど。そういうわけだったのか」

浦原達の話聞いて納得した。納得できた。

怒りはない。むしろ、敵に対して当然の処置だろう。

自分の体を調べるように眺めながら、独り言をぼそつと呟く。

「この義骸、まだなんか仕掛けがあるかもしれねーな」

気に入っていたのに。残念だ。

そう思い、一護は義骸を脱ぎ捨てようとした瞬間、気が付いた。

霊体へ 戻れない。

一護はオレンジ色の髪をかきむしり、大きく舌打ちしながら布団の上に胡坐をかく。

思い返せば、どうやって義骸から出るかなんて、一度も言われなかった。

なので、てつきり抜けようと思えば簡単に抜けれるものだと思い込んでいたのだ。

「あー、くそ」

これじゃ無自覚の、とはいえ立派な捕虜じゃないか。捕虜に立派があるのかは知らないが。

そういえば、雨に殴りかかれ、大刀を求めたときルキアに言われた。「自覚を持て」と。

その意味が今・・・否。今更分かった。

「本当、鈍いな俺・・・」

ぼすん、と仰向けに倒れこむ。

頭に散々一護の事を「鈍い」と言っていた紫の髪の破面が浮かび上がる。

「・・・ルベルゼが知ったら、なんて言うだろ」

笑うか、それともそら見たことか、と呆れるか。

案外、何も言わず刀を持ってこれを作った浦原に切りかかるかもしれない。

一護は自分の想像をネタに笑おうとし、片頬を引きつらせて失敗した。

・・・一番最後が一番簡単に想像できる。

本当、笑えない。色んな意味で笑えない。

「おや、おつたか」

足音も立てず夜一が先程と同じ黒猫姿のまま現れた。一護は上半身を起こす。

「てつきり逃げ出したかと思うとつたが」

「へえ、何でだ？」

「わし等の魂胆を知り、これ以上関わりたく無くなったのではないか？」

「いや、別に」

思いがけない一護の即答に夜一は金の瞳を細めた。

「なにゆえじゃ」

「いや、だってあいつ等は何にも間違つてねえだろ？俺は破面でルキア達は死神だ。

警戒するのは当たり前だ。・・・けど」

身動きした一護の顔に影が落ちる。

「やっぱ、俺は利用はされても信用はされないんだな、って思うとちよっと悔しい」

「信用しないわしらが憎い、と？」

「いや、そうじゃなくて」

一護は心臓の位置で手を握り締めた。霊体でも鼓動は一応あるらしい。

とくんとくん と一定の速さで脈打つ心臓。穴は無い。心もある。のに。

「・・・一緒にいても、信用おけないって思われてる自分が、悔しい」
「・・・そうか」

夜一はふむふむと頷く。そのたびに尾が左右にゆらゆらと揺れた。しぐさを見たところは、猫そのもの。だがこれが、褐色の肌の女傑の仮の姿だとは。誰も夢にも思えない。

「一護。わしはおぬしをただの莫迦だと思っと思ったが・・・違ったようじゃの」

少年にしては長めの睫毛を瞬かせた一護を見据え、夜一は断言する。

「おぬしは本物の大莫迦者じゃ」

「・・・なんだそりゃ。ほめてんのか？それともけなしてんのか」

「ほめ言葉じゃ。一応、の」

そつぽを向く黒猫。怪しい。怪しすぎる。

「ウソだろ。十割中十割けなす気しかねえだろ」

「被害妄想の激しい奴じゃな。ほめとると言ったらほめとるわ。人の好意はありがたくうけとっておくものじゃぞ？」

「人じゃなくて猫だろ。むしろ化け猫」

ぼそり、と一護の呟いた言葉に夜一の耳がぴくりと動く。

「なんぞ言ったか」

「い、いいえっ いつも通り素敵な毛並みです」

一護は、咄嗟にビロードのような光沢をもつ夜一の毛並みをほめる。
「・・・ふむ。当然じゃな」

そうは言いつつも、夜一の機嫌は幾分か上昇したようで、つり気味の猫目がどこか優しい。

「ところで。先程も言ったが本当にほめておるぞ」

「・・・バカってほめ言葉になるんだな」

まるつきり皮肉だった。しかし、夜一は涼しい顔をくずさない。

「うむ。覚えておくといい」

「・・・はい」

夜一は「よいか」と教師のように話し出す。

「おぬしは莫迦じゃ。大莫迦者じゃ。だからいざという時、賢く振舞おうとするな」

「・・・はい？」

一護が意味が分からず聞き返すと、途端夜一の眼光が強まる。

「返事っ！」

小さな体から、ライオンすら一睨みで屈服するようなオーラが滲む。

「は、はいっ！」

大きな声につられて背筋を伸ばし、正座する。そんな一護を見て、夜一は目元を和ませた。

「本当に、おぬしは愛い奴じゃのう」

夜一は正座する一護の膝の上に飛び乗ると、丸くなる。完全なる昼寝前の体勢だ。

「っと、待ってくれ！」

このままでは、そのうち足がしびれてしまう。

一護は夜一を抱き上げ、足をくずし楽な体勢で座りなおす。

そして、夜一を下へ下ろすと、彼女は寝心地の良い位置を探ししばし動いていたが、やがて太腿の辺りでとまった。どうやら、ちょうどいい場所を見つけたらしい。

「・・・で、なんでこんなところで寝ようとしてんだよ」

「子供体温じゃの、おぬし。ぬくいぞ」

ジーンズの上から肉宮でぶにぶにと押される感覚が気持ちいいやらくすぐりたいやら。

一護はやめさせる意も込めて夜一の喉を撫でる。ごろごろと気持ち良さげに夜一は喉を鳴らした。そうしているうちに、一護はふと疑問がわきあがる。

「なあ、夜一さん」

「ん？」

「なんで、あの時俺が聞いてるって言わなかったんだ？」
その内容はいく先程のこと。

立ち去ったと見せかけ、一護は廊下で彼らにぎりぎりまで近づき
聞き耳を立てていた。

そんな時、夜一は気配を完全に殺して一護の足元をすりりと通り抜
けたのだ。

ご丁寧に、一度振り返り一瞥をくれてから。

「言う必要があったかの？」

夜一はそう言い切った。一護はしばしあっけにとられ夜一を見つめ
た。

「いや、だって・・・」

「その義骸が霊圧遮断性のものだとおぬしが知って、それで何か
できるというわけでもあるまい」

うん、正論だ。だが、だからといって破面が盗み聞きしているの
はたしてほんとにいいものなのか。

「・・・いいのか？それで」

「おぬしも大概しつこい奴じゃな。第一、そんな事よりも自分の心
配でもせんか。」

わしは、「おぬしは逃げられん」と明言したようなものじゃぞ」

「いや、もう無理だろうなって思ってたし」

「諦めとったのか」

呆れ口調の黒猫は、大きく欠伸をし尻尾をぱたりと振って目を閉じ
た。

その様子を見ていた一護もつられてかみ殺しきれない欠伸をする。
欠伸は伝染する、と昔から言うが一体何故だろう。

一護はそんなことを思いながら後ろの壁にもたれかかった。

「あらら・・・夜一サンってば」

二つの寝息が聞こえてきた頃、ようやく浦原は独り言を呟いた。

夜一はおそらく途中から浦原が居た事に気が付いていたのだろう。

現に今も、わざとらしい寝息をたて、一護の傍に居る。「今は余計な事はするな」という意思表示であろう。

「そんなにうれしかったんスねえ」

しみじみとした様子で意味深にそう言い、浦原は懷からカメラと携帯電話を取り出した。

「さて、あの人へのお土産がまた一つ増えましたね」

パシャリ カシャ その場に二度シャッター音が響いた。

鏡に映った自分の姿を一目見て気に入った乱菊は店員に微笑みかけた。

「じゃあ、これも貰おうかしら」

「ありがとうございます」

それほど大きな店ではないが、店長のしつけが行き届いているのか、店員は丁寧な態度で接客してくる。服もデザインは決して華美ではなく、しかしさりげなくおしゃれなものばかり。実にいい店だ。

試着室から着替えて出てきた乱菊の手にある商品を「お預かりします」と言ってきた店員に渡し、乱菊はぐう・・・とのびをした。そして、時計を探して、くるりと店内を見渡す。

「あら、これもいいわね」

その拍子にみつけたワンピースに駆け寄る。店員はにつこりと笑っている。その笑顔と反対に米神につたった冷や汗は、店員の後ろにつまれた洋服の山がその全てを物語っている。

「すいませ〜ん！これも試着いいですか？」

「どうぞ」

乱菊は任務資金の入った財布を握り締めた。

「いや、買った買った」

喫茶店にてアイスコーヒーを注文した乱菊は横に詰まれた紙袋の山を満足そうに見た。

本当は酒がいいのだが、さすがに真昼間からどうなのか、という考えから変更した。

なら、任務中に暢気にショッピングとティータイムを楽しむものかどうか、という考えは彼女の中には無い。

「現世つて本当に何でもあるわね」

その全てを経費で落としたとすれば、そく上司の雷の叱責が下るのだが、乱菊はそれをもともしないのだから意味がない。（まったく、冬獅郎隊長殿には同情する）

「あとで女性死神協会の皆にもお土産買ってあげないとね。あと、ギンにも、と言おうとして、乱菊は口を紡ぐ。

そうだ。彼は、もう。

「・・・ぬけないわね、私も」

はああ・・・と重いため息をつき、乱菊はマドラーをまわした。

どうして、こうなってしまったんだろう・・・？

藍染惣右介。護廷十三隊五番隊隊長で、誰もが認める人格者。

そんな彼が世界に反旗を翻したのは、突然の事であった。

騒ぎの始まりは、藍染惣右介の惨殺からだった。

彼の「遺体」は無残に高い壁に貼り付けにされ、見つかった。

藍染を心酔していた、五番隊副隊長・雛森桃は錯乱にも近い状態で常日頃藍染と衝突していた三番隊隊長・市丸ギンに斬りかかった。

それを抜刀することで受け止めた三番隊副隊長・吉良イズルと共に彼女は投獄されて。

一方、護廷内では犯人探しに躍起になっていた。情報がまともに流れてこない一般隊士達は少しでも挙動不審の者が居るとひつとらえ。

拳句、普段から仲の悪い隊の隊士同士が道中で睨みあい、「犯人はお前等の隊の者だ!」「お前の方だ!」と言い合う始末。

護廷は、混乱に陥った。死神同士の同士討ちに発展しかけないところまできて、ようやく隊長・副隊長が直々に動くので心配するな、ということが大体的に発表され、騒ぎはようやく落ち着いた。

そんな時、夜一が尸魂界に姿を見せた。隠密機動総司令官及び同第一分隊「刑軍」総括軍団長にして元二番隊隊長。そして、罪人の逃走幫助をし、永久除籍を受けた四法院家の姫君。

その隊長格と同等の実力の面から藍染殺しの疑いがかかり、彼女の捕縛命令が下った。

実は、彼女はほとぼりがさめた今頃を見計らい、崩玉の存在を知らせにきたそうだ。

来たタイミングが悪かった。後に夜一は苦々しくそう言った。

いや、それさえも「彼」は読んでいたのかもしれない。

夜一が逃げ回っている間、四十六室からは、彼女の捕縛についての命令が幾度も下った。

それを疑ったのは、日番谷冬獅郎、八番隊隊長・京楽春水、十三番隊隊長・浮竹十四郎、そして六番隊隊長・朽木白哉だった。

「命令絶対」の白哉がこれを疑ったというのは、後で昔から馴染みの全員が首を捻った。

浮竹と京楽は面識のある夜一の保護に。白哉は義妹のルキアと副官の恋次をつれ、藍染殺しの真犯人の搜索へ。冬獅郎は乱菊をつれ、近頃様子のおかしい四十六室へと。

そして、そこにいた中央四十六室は、全員事切れていた。

あの時の衝撃は今なお忘れる事はない、と乱菊は思う。

殺されてから随分と時間がたっているようで、壁に床に机に飛び散る血は赤黒くなり。

司法を司る賢者や裁判官達は、物言わぬ骸と化していた。

そこに現れたのは、投獄されていたはずの吉良。意味深な事を言い、ついて来いといわんばかりの彼に冬獅郎と乱菊は迷わず後を追った。

今思えば、その行動をもっと疑うべきだった。

過ぎた事だとは、思う。けれど、終わった事ではない。

その短慮による傷跡は、今も彼女、雛森の体と心に深く残っているのだから。

そう。少なくとも敬愛した上司から、直接瀕死の重症を負わされるなどという事は、回避できたのかもしれないのだから。

本性を現した藍染は、そのまま異変を察知し戻ってきた冬獅郎に深手を負わせ、彼の遺体に違和感を覚えた四番隊隊長・卯ノ花烈の前で全てを語った。

能力・目的・・・信じていたその人柄さえも偽り。耳を疑いたくなる内容だった。

冷笑をうかべた藍染は付き従うギンと、乱菊の幼馴染とともに双へと移動した。

そこで合流した九番隊隊長・東仙要と共に、夜一＋護廷十三隊の隊長・副隊長の面々に刀を突きつけられた。

乱菊自身もギンの拘束をしていた。

終わり、になるはずだった。

『すまない。時間だ』

余裕に藍染が言い切った直後、「離れる！」と怒鳴った夜一に体は素直に従った。

それが、乱菊の本心だったからなのかもしれない。

その瞬間、藍染たちは光の柱に包まれた。

大虚が同属を助ける際に放つ光、ネガシオン反膜。

祖に光に包まれたが最後、外と内とは干渉不可能。隔絶され、触る事すらできないという。

藍染は、虚と手を結んで、否。従えていたのだ。

『ようやく、崩玉も扱えるようになった……。これで、私の側に駒は揃った』

思えば、夜一がこの台詞にやけに過敏に反応していたが、乱菊はそれよりも共に天に昇っていく幼馴染しか見ていなかった。光に包まれた時の、彼の言葉。

『あーあ。もうちょっと捕まっとしても、よかったんやけどな』

『ごめんな、乱菊』

なんで、そんなこと言うぐらいなら、戻ってきて。そう、言えなかった。もう元に戻る事はできないのだ、と唐突に理解してしまった。

『私が 天に立つ』

死神たちは空の黒い裂け目に消えていく、三人の離反者たちを、

三人の元仲間の後姿をなす術も無く見送った。

カランツ　グラスに入っている氷がたてた音が、乱菊を現実呼び戻した。

「やーね。私ったら・・・」

もう、あんなバカの事なんて、割り切ったと思っていたのに。

自嘲しながら、アイスコーヒーを一気に飲み干す。そろそろ帰らないと、冬獅郎にどやされる。彼の憤怒の雷と凍てつくブリザードはそれはまあ恐ろしい。

テーブルの端に置かれた伝票を手に、立ち上がる。

そこに書かれた数字は、勿論経費で払われるのだ。

何の特徴もない電子音のアラーム。男はそれが自身の携帯の着信音だと気づき、テーブルの上に置かれた赤と黒の二つのうち、黒い方を手に取った。

画面に表示された「メール」の文字。黒いほうの携帯の番号を知っている人物となると随分と送り人は限られてくる。

一番可能性のありそうな胡散臭い店主の顔を思い浮かべながら受信暦を見てみれば、やっぱりそう。一体なんなのだ、と思いながらメールを開封した。

次の瞬間、画面に広がるのはひざの上に猫をのせ、眠るオレンジの髪の少年。

数秒後フリーズした思考を再起動させ、画面を下にスクロールさせる。

そこには絵文字を多様した文章で「寝顔を激写！今度手土産にもっともって行きますね」と書かれていて。

やっぱり盗撮か、とか これって一応犯罪だよな、とか色々と思うことはあったが取り合えずメールを保存し返信を選ぶ。そこには、ちよつと迷ってからこつ文字を打った。

『土産話も待っている』

貳拾四 土産（後書き）

今回は、このお話での戸界編の事をはつきり書いておこうと思って急遽書いたお話です。藍染の手紙で雛森が冬獅郎に襲い掛かる部分なんかはカット致しました。

書くと文のリズムが崩れちゃったので……。ごめんなさい。

誤字脱字がありましたら、教えてください。直します。

感想もお待ちしております。皆様、良いお年を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5315w/>

夜明けの太陽

2011年12月27日20時07分発行